湖月抄

手ならひ

若菜下

花 巻名は詞をとりて号也 細 此巻も上下にわかてれどもおなじ
ひとつゞきの事かきつゞけたるによりてわかてる也 但上は六条院の四
十賀下は朱雀院の御賀也 上下ともに若菜とせり
上巻の奥よりひきつゞきたる事どもあり 小侍従か
ことはなとも思ひて源四十一歳の三月より四十七歳の春まで
いわれたり 四十二より四十五までの四ヶ年の事は此巻にもかゝず
まへり 花 前は四十一歳二月までの事は上巻にあり
此巻は上巻の末を三月のことを書て 花 四ヶ年の
事は前巻の詞にみえたり 年月をさだめて
四の帝御位につかせ給て十八年にならせ給ぬといふ冷泉
院譲位 源氏四十六歳の時御位をおりさせ給ふ 筆
わかへることのたより

ことわりとは思へど、うれたくもいへるかな。いでや、なぞかくことなることなきあへしらひばかりをなぐさめにては、いかゞすぐさん。かゝる人づてならで、ひとことをものたまひきこゆる世ありなんやとおもふにつけて、おほかたにてはおしくめでたしと思ひきこゆる院の御ため、なまゆがむ心やそひにたらん。つごもりの日は人々あまたまゐり給へり。なまものうくすゞろはしけれど、そのあたりの花の色をも見てやなぐさむとおもひてまゐり給ふ。殿上のゝりゆみ二月とありしを過ぎて、三月はた御忌月なれば口

ことわりとは思へどうれたくも 細 小侍従が返事也
まへの口惜しさをいはれて 花 上
巻の末此詞よりつけてよ
むべし ことなる事なき
返事 細 小侍従が返事も心をやらせて人の心をなぐさむる事
直に女三の宮に物いふ事あらん
細 六条院を大形には大切に思ひきこゆる源の為にもなまゆがむ心あり
柏木の心也 なまゆがむ心地
細 三月晦日也
六条院へ
女三の宮のあたり
の花の色を見て

殿上のゝりゆみ 三にノリユミ
孟河 賭弓 正月十八日 於弓場殿 射之 四府之卿已下東帯 右取筆書之
三月はた御忌月 細 母后

若菜れは忌月なれど延引あるへ(避忌月流例) 花鳥に云 ……[illegible]……

月崩御なれど女院の御代に端午の節会あり しかれば忌月の事は唐朝よりあ……[illegible]……

まり但楊帝后をとられんとして九月九日これ忌月といへり……[illegible]……

国あり忌月の文字……[illegible]……十月に……[illegible]……九月九日の節も延喜の帝の忌月に

あたるによりて十月によせて……[illegible]……名付られたり……[illegible]……

又とさまり文粋に見えたり 略記

この花 花鳥に八俳と……[illegible]……

あまに係ると源……[illegible]……

あるし 河海に若菜上に柏木

の詞に……[illegible]……

……[illegible]……

……[illegible]……

こは源……[illegible]……

しかじかも……[illegible]……

れたりとあり

……[illegible]……

いかなしたる上……[illegible]……

て射……[illegible]……

まんまりへの……[illegible]……

細 あひく……[illegible]……

河 ……[illegible]……

伊予介……[illegible]……

哭 方志の合……[illegible]……

おしなべてまのよこの源氏……[illegible]……

的射より……[illegible]……

しとうつ……[illegible]……例のつ……[illegible]……

……[illegible]……

……[illegible]……

じいどもうりてこゆをしの……[illegible]……

射 ゆをのをとぐれかの上……[illegible]……

……[illegible]……殿上人……[illegible]……

……[illegible]……

ハしれまんまりへの……[illegible]……

細 五月六日く

……[illegible]……

……[illegible]……

細 寺方の……[illegible]……

勝人……[illegible]……

……[illegible]……

……[illegible]……

細 ……[illegible]……

河 西宮抄

云賭弓注進錢 自殿暑院 進

出懸物ヲ蔵人持出 給付 延喜六

一御息所被出女装束 ヲ

延長四年中宮被出女装束一ヲ

柳の……[illegible]…… 細 養由基とも

……[illegible]…… 同 史記

日楚有養由基善射者 去柳葉百歩而射之 百發而百中之左右觀者數千人皆曰善射

……[illegible]……

孟射……[illegible]……

……[illegible]……

我……[illegible]……

……[illegible]……

……[illegible]……

……[illegible]……

花鳥 ……[illegible]…… 近来乃

友人也

巨々殿

……[illegible]……

抄 柏木の……[illegible]……

ひげ……[illegible]……

細 夕霧……[illegible]……

夕霧の……[illegible]……

抄 夕霧の柏木

……[illegible]……

さそうしらてしらき　細うてしらきハ大やうやうく。彌のた強おうらのつらてを年ともえ
きよおくぞ。論語にも射不主皮とそり。其大やうるうし百さひあてうらと無
らりとうう。勝負よんをうけて争称のなげ分しなし

うらまうらうしともれん
おタ素の心よ冬うなす
まそし拍木の源よりもく
しくるうれんと盗を
多く師そひきれ表
ひをかやうしすとう
らまきうてうちに
ろう
人よてんつるべき　細 今
もをさうあへきうし
盃河古人詩冊よ批點る。
ど云ハ御褒美あうなく
されバてんつうまい。地と
ハ人よ分のそうらかま
しらし

と知らる故よ秋さん夫ひの出くらやうしとく
此りひつさぬくこうらも。この道の中にて　盃 夕と伯之
よしよううなりしひとしいかなりよをこうろう
つうてやんはされどつうるすとしみうくとし。
抽地をとしくしらまさうてしとおしんと。　ゐ夜
細 拍木ハ盃伯の源をたてその心とし
いしおしく地おしまん分つうしを地らじと
芸をさんの悪みたらし
ことそまろうよけ地をろうくしまばゆく　盃憩之
おんいおうなきりのうなれぬるしんそうに。
くうりうるべ。今よてんつうんさいめうまひ
もじしそふりのをまして地かけろうさこ
しとおひまびてえうめありし經とそろう

それよぞくさうす
盃猫さん雅治之ゐ猫盗
こやんすさんかるまうう
まして女三のすうて

うんれるんうひみうに
盃 女治の拍木と兒牙
の中みぶもけきうくえ
まかまつけてをも女三の宮
とおひおうそさ

えみのよまうう經て
細 女三宮の御兒牙なれ

猫よそひとりうらふりひハうつまり ハれ
えそしられ。地まへしくさらふべくん度ふうくら
ねどうくもうしさびしさなくさあふうと。
なりけんと地りかよりのぐらかしくいぞ
うぬうもそいぞうしん。それさんぞりさ乳とも
細 以猫籠之拍木の兒牙
ぬきう。女れの沢しさよまつりてりのがうり
芸の御之
あどくめのしまうつりしんきう。いとおうくふ
うくうんそ何りしきれりてなしうそま
おなよきし經しりなしつうか流すへうひ
女三宮の地まひ
みぶうよ。けどをとるるしひさうと。ゆくうう
うらんえしあひしうすと御あやしくぞうししとそうたし
よおやしくいおりしけんぞうしとくぞうす
細 女三宮のけたうぬのむし
ごよくら地かゆれど。ふうろうけよえつめうう
まどんうしおさらをとそひるきれなど。まえそ

し仰せひの山あとまき
へきのんと

うられはねこの　花　小右記
去長保元年九月十九日 内裏御猫産子 女院左大臣右大臣有産養事 有衝重椀飯納筥之衣等云々 猫乳母馬命婦 時人咲之 奇怪事也 天下皆有若是可有徴哉 未聞禽獣用人乳 嗟乎
所詮泉流の法方のねこのこと

（柏木のこと）またうちそ。ろうあうりまひまへつる所あり
人々しと。然人とくいそこそまりまよ。白ひやう（細）
ま〔う〕しハわらぬはこうちあれとざはり
のはあ猫そくこひしとみるくおそてよみ〔や〕海め（細 猫の子のあまくひ）
うしくおりつまみすうちの法猫このあまくひ
きうれうりきかでくうしとり〔の〕。所ぐよあ
れく。び〔え〕みもまうれるか。いておへしげわ
まくとうろよまりとひのぞくられハ六条の院（細 柏木の〔心〕）
のひめ〔宮〕のれうさまなるぐる猫とてそ。いそえ
とうろくもと（女三を〔とひ〕出〔る〕之）
ぬやうかうほしておのしうさんじしぐ〔う〕〔と〕
うるんをまへしとけりしまへんい猫とわさ
らうくをさせ猫はいらそぐくしくとらん
（女三の法）

（細 柏木の猫）
とまうし猫のこゝのよるぐへなう御してる
んえぐりしあみかじやうおうりのみまれど。ろく
ろおうしくへすれまうハわやしくたけ
うしさりのまやへ作ろうみで。ゆうしく猫れ（細）
きうつりこそしてすし猫。まうしめとを
てぞこまりつやのはれくさまりてさへてまひろへさ
を猫えれハまへちせまうかげるハいしてく
しげうりわとあつわくとんへでげうむど
ありま奏へるえとづめんとおがしまりこそ。
はつしきゑとろとそて。日でろへてまぐりさ
まうハわらくあうしくうハ〔御〕権現よりり（孟猫のお童）
まそとあり何のとをまひしうハはなむど

こうつかの法もまち
細 源氏中に〔も〕あり〔つ〕へ
く猫を女三へ〔こ〕ゑ〔さ〕
あおんとおがしまうさ
と
細 柏木の法〔の〕
くろしびあまへとを
又孟をまりまえんで

いとこのうし人 細 柏木
の御くらゐ大將殿をそへ人
しらしてさしてんとは松
も君の御有さまにおもくに
の勢ならんや花鳥
猫をいとしくみて
そらさそゆかしくおぼえ

ことそれゆへにこそ、父この女みやをもおほしよせ 細 右之 細 柏木女三へよせし
うまうけまをゆるしよりおほしよせし
へ給しまて、お給をいたしたまはす あまたの御ことも取へ給し 柏木の詞
かりいてゝこのうし人かと猶ゆかしけ 此見
まつりしらるくまへてかくまでいゝる
よりなるもげにおほしさ侍しらる 細 女三の御事
かなんすさまつゑこらにゝなまなんを
きゝきやあはんしておほくよしまと
らもとしとのあへいにれてうかゝまへ 細 柏木の御猫は女三の御猫也
あはもかさくるしぬりのあれとその
みきかうしきはとのつかしまさる
人しるみして[illegible]まうしと 女三の御方より猫ゆかしく

とのつかの御ゆへ
こころれぬ人とよをゆや
あかんと女三の御ことを
おもうにかしつかひかせて
さるかけもあさふかく給へと
おもしらりまさらりける猫
ともあれはきとそへ給へ
らんと柏の御猫なれは
思案ことなりねことをと
とらすりしと女三
の御猫よつきそへ柏木の
しゆまて

めうきたされて志つし給へるあかひくんし
よ給ころのしかよわかなかしよねとかあ 柏木の心なり
くらかへ此御かたへあるまゝらるかそとも
てしるをわかりちゃく心を給あけさせは 細 猫の
給このうしつきそしてかすもやしらひ給ひ
けなめるしかとしてをふるるれてとしすれ 此身をもなし
ひとゝのすまよまいかれかりとなひつく すて
とまりやよういかしきいてくるの猫 花 猫の事
くらしちくしみつし給つゝまさそれ給なく 細 我ものか
しゐてくらうしはよるけうるてきてらうそ 音メウ人 猫は猫の音也
をもてむしれとかくまれる はなくなれはいふ也
孟 柏木の
このまゝうかへのこことしてなしれる

ほつえかくつ 細 なかく女三
ゝかく猫とかる義あり
不用之時は猫のなく

まとよめり 師我念を
女三の宮ことまみ
らせ給ハ何とて[illegible]
て我抱かひとすしめ
[illegible]
られも芳のちかきりかや
何思も又さだめひしの
ちぎりぞとせ抱かし浅
ましさハ 泉式ア [illegible]
よ不及ことく 和唐武宗
時宮妃後身為猫事あ
り

何とて力くねるかまん。これも昔の契にま
やとりかぞところの宮へハいかにもくらくいげ
まなしと[illegible]入てすがめられんへり。
ごろうるぎはおやしくまぐろれ[illegible]給こ
のとさめくろみかやろ[illegible]まいれ給へ
ねはかよとぞめぐかり。まめかすめかと
まいらせ。とりこめてられと[illegible]ひ
[illegible]たる猫殿の御方ハ大殿の[illegible]
とむたねのきんとがいるん。ひめしのやうにと
[illegible]まそりくらむのかじしく。
けらくかそうすりきてるのめんし給ば
もこまやらゆへぞそこ[illegible]るくめて

あけぼの 細 乃る中ま[illegible]ハ
宮の兄弟られどもうら
りくしきと
うかこしうみはむすび
御むろうしと夕霧宮の
兄弟なでとくしう
らねどもなくさう
しつむ

ろとのはらぐく 細 式ア[illegible]
法門のゆかりしはひとめ
女御まそおりとれぜせ
のわがくもうちのはん

あし宮へれハ大殿もあけいさるかのこと
うとしく。とすびきさげろうはんぐ猫のあま
つまわるよき猫てしたりはむすびそでをひ
うりし給ひ[illegible]し思いますそそ[illegible]のえ
しめれ御前どとかそてるれそそ。[illegible]べ
[illegible]かりそりつきゆかし給ての[illegible]
まゝし思ひ[illegible]の浪るれだなをくしと
ての[illegible]らの姫[illegible]えそりそうけ
[illegible]まくしまへど。[illegible]るどまうれ
ゆるし給ひ[illegible]とうあへ[illegible]ぬ
[illegible]猫そえんしかりしの給ひこの法が
えいしやむどとなくうらめまこのまろ

ふせきもうちあけし

武蔵坊がしのびこしかど
孟源と姫仕とはまさしう
まそくハ武アムの玉くわる

梅吉の内かみくるしきにハ
細川がたよりつけてとま
姫の其がしこよと

ねこまたらひおもし　梅吉ハ
女三と云ふ主の猫かも
まさ姫と取りそばうて

清くも世へとこうまうてこのくるしみそう
し給ふとぞへえそむさ給ふてぞうろうろ
しき梅吉もひめのしやうかくしもいまあ
しくなやすうちにそ武蔵坊が欲まさし
つゞきなりてもく人をしまりつうまり世人
をとりしもひめしうらぬ物もさうせれ斗も
をまつくころまうんとし
しなうりまべきこそことさるれバ姫君の
姫がくなをそうはうくハおしんなうて
姫君をとり人て苦みれどもし
出かう人ぐこゝよみれく斗かられど斗がしも
きざめぞそ来つ悟とそうし気色だんまりて斗が
もしうれど猫の姿をかひ斗とひするまゝ
けそもおひうしねぞくらおしうりまし給。

お桂姫の母おのけのうち
もく君のおやうくがとひゞめうくへりそぞの
つゐのおりうき座ふとおしぞとまそてかゝ給
やるをくおしきりのまかがりてまくるの
れおうりをバおつけそゆりしくとひてぞいま
めきうられにころぞ座りまぞりのり給まだ
武アムの文あるをひとそろのをおもうて。
はらよつうそ見えりろうぐりはうれさ
ぐひそゞ世ゆすをしする座ししく今ちくま
斗がろうしまぞそのゝやえおまえてをを
ぐをべきし斗がしくこのまゝうるる気さえ
こゝろまてれバなきなふはりしづうんと云
りん女ごとぶはなみづうくまつぞそへえとこうちま

まそ(?)しくハ千ぞへて
細さしひても不叶うし
を(?)もしにかまうひてよく
どくきかめしまゝ
このまゝりよ気色つく
細川アムへは絶え孟桂姫を
堂の前に昼せんとし　悪武アム
文文字の(?)めうそし
文学上文　細(?)常之宝
家孟表子姫の祖母
お文としいハ武アム江戸アム

まづこれあれバ武アマの
家と云家とくろりと云
世武アマの女房ハびおの
御かも久かのうとと
ふるべく

あまりうらしむ
細あまりにんとをつて
さゞりとかふ孟子ノ領
章志のまをいうと賞
のこまゝ

太夫ん女ごあまさ
細婦女ゑひげ黒の家本
ゑ離別せらゑ王女は
とそ肉よまりまひ
と秋ぬ中ゑあけど
されて肩ぉ志まふ
まけもるまきし
秋けもれど女連の筆
のえきまうりかまべ
くれとくし

まんとう世路よくろ女の方
細覚無アマくまもの女の
家を忘れがくてを
形よ訓うろ人をとさ
つまゑたり

しもハうせなけくめぐめく人のもくろうしよ。
なとめく志うきとのとがいまのこれ人のうしと
くすると志れるときわぎたゝりとのゆそしゞて おやそ
託状おぐ もうやまうしめまり給ひぞうけひとうやし給
お覚え つゞみしあまりうしくどころるくおさいく
志とびんをとじ。おびんさのあるかりみくとさ
あうりるれバえうしもいひをぞうしゑば 孟一段出家
さ。おりしまうそれぬいとふるくうしさ
お武アマと 労し給。太夫ハ母こあさき地しまそさ
ぐ極るけりしさおり。く沙汰 桂枝の気のこ
こりりしめべきれど。ゐ代ハ心気のくしさ
ひとすらぐくゐかくてまん。くろぞいかや 孟心孟桂枝の母
ちうさひがりのよ。とし心よそへてたりゆきこ
お ひげ黒も桂枝の気ど女勢の方へ御めそぬまそ
つま給。太刀もくこわがしよ志くがうぞとと
しまのくし
てどうりよこゝをてうれしあれバいうん
むぐりし給とそてれ志うしひどをさうる。 桂枝の気の云ろくひと
武アマ次の 汝てつりしゆくんじいればより川よるとじ
あすくれこうろよいれまつり。ゑくうとまひ 賞ん
きろ女房ど。うし去るよてひゆめしまで。さうむ
りの汝あのこ面よ。みるそてまろのうまん人
とかんとめがしろよ。おしくはあくねどこ 孟桂枝をとろくるなれとく
あうりてぞ。まのし給さうりとめがもそまぐら
おしかやあのれんがしひ給こ面ひこ極らげ
武アマのくし ちうり。太夫めいりとこ しろづきさきるざされと。

くらおしくうきうして
松 桂枝と栄の物うけ
するゆえれどわかめ
しとう〳〵てうく云ゑ
兵部の君もよれはよ
孟姫源氏て栄ハ云がま
はまじしき人すれば
いやしき云ひしかく
くらのりしおゝきさ
細 比翁アゝ其のおごとし
きれゝ母とこてまするへ
りしてぞ親方のつる
うりしと云ひまうく
ときうすさいつよ出り
兵よしてまうど
仲 源氏君物ども云ふどの
こしくまよるびきて
このはおぞく　さる
らそいすよ地利さんと
く〳〵むろしのえ
そのそをもけびくてき

細 志承栢の定人母之
出がりてけむさまらく君もきさうそひがし
結つれどもいけしんいそくらの時はらおしく
うきうしと云ひそて結ち桂の君をもよれいるよ
松 書翁アゝ
いいくく気めさまくことがとふじゆるよ
つとわかれらよゆすゝ海いざうしてすれ
比きゝ母と我アゝ其佛法云物ら之云結し
細 むろく
ばやりのしとけりへのつうんのさもぢく
よありしげるきれさ海とらくとくすまる
はさやうたらせのうちととまりげんまうろ
そうらく
すさいつよ出がりろんて海へましうど海れ
も文字の著れれんき云表みもとく
しくもと表みも出がりいくまろもそのとくも
けびくえきてえんとは云ひうしきう
しにておさけくたうにおらさきも海よ

かくさ所も栄へまびん
とハ云つぶらしうど源
きさ翁よ何しのあひし
と鉄足しゝ名れ出ゝ
す悟くしきやうや
云ひ出しまうんとかう
恥りさとしさて桂栢
八継子しそ逆きゆう
のやうゝれでおぢてゆ
翁よ栄の事まうん千まよ
ゆづつひせる様くとく
うられ〳〵しきもうられ
がれよ　おも栄実まれ
栢の君まよりしひまます
物らげくとあうさやう
の物らげあうそしきを
云ゝれくれよ栢栢の兄弟
わどしてむろどしうも
翁みゝへうくうしだに通云
ますよ栄翁アゝもきもを
かまゆがうしくこし栢栢
の君をもしてくすれますます
いうさきうとし
みかすらへのとうるよ　細 小君 大将の

しにておさけくたうにおらさきも海よ
あひらうりしとおへすくおはつけきやう
しやうく出うしまうひり久とりとくろし
くぞしてうしと出がりしまうくとうあれば
松 桂栢も継子まそゆるされたを
うらあくらうみくさて結らんしきし　細 むろう桂栢の
さるへゆらひまする
づつひとつるべくなど出がりをうれしうを
さうへきしとはおつひきさてし結をうらと
の君を逆るがしてうらのうるさきを云てば
がやよめくうしばくさくしまいつしてうとする
桂栢の祖母之君とおのまうをもうよ佛せうれ
よかやうくしくれそるれさうげんはるさえ
ゆか小方とうふさうれのぞうつるよゆす
大小方のむふ細之
るくいんじまう結みこさうはのどうますさ
かあくてき結うんとがるこてとうるやるす

ぬるぞあはれになぞらへられしとぞ

ど、宮よりめしけれどもまゐらせず

こしらへむかひてかたらひ給へり

さても左大将殿の北の方は、おほきおとゞの

君たちよりも、ひげくろの大将の御かたを

むつましくおもひかはして

ひやうぶきやうの宮は、なほひとりおはしま

しておもふやうなる人をもとめ給へど

さのみもあらぬにや、まきばしらのきみを

ぞ、めとりたまひけれど

うちのみかどの御中よからずして

年月もかさなりて、うちのみかど御位につかせ

まで十八年にならせたまひぬ。つぎのきみとなら

せたまふべきみこおはしまさず。もののはえなき

に、よの中はかなきを、心やすく

くおもふ人々にもたいめんし、わたくしざまに

心をやりて、のどかにすぐさまほしく

なんと、年ごろおぼしのたまはせつるを、日ごろ

いとおもくなやませたまふことありて、にはかに

おりゐさせたまひぬ。よの人あかずさかりの御よを

かくのがれたまふことゝ、をしみなげけど

春宮もおとなびさせたまひにたれば、うちつゞきて世

[illegible]

ぢじのへうたてまつる
花太政大臣致仕の例なし
るけれども左右の大臣
致仕はあまたありへてとゞり
但天暦三年正月三日是
日太政大臣致仕表従中務
省奏進有勅答不許
見李部王記
かうぶりをかけんとす
眠同致仕冠を懸るすなはち
一番今からへ出仕とやめて
隠居すると云ふ也時ハ冠
もいらずなるなり
太大臣よるりまで其世の
中とは粟田関白道兼于
時右大臣也兼家

中のさだかならじてとまりてうけがひをと
なからう世わたさせたまふべきのつかさをかへしく。細 杨木の文之
こりうねまひぬ。世中のつねひるさにはうこ 致仕のきと飲をのするふ祖し
きみどのこともと位をさらうむおもまる
のさ身のかうかうどうけんあるやうなからん 細 左大臣之 黒白子 成陰也
と気しの後ひく。右大臣太政大臣よりうなひて 細 義香
ぞ。世中のさだかりしつるまての後さるを。女御
殿の女御説黒白聖女之彼文と女御之
のきはかりの世とどもありうけ後みだくなと位 ここえるふる
ひよられバ。かかりあるに位をえきれど。いりの 花 今上の母女御贈后のきをとつて 何人の兄
姉てらむ
ぬらて
うちきつのうちしくりひるまへき。ちゑ条の女 細 明石女御之
ゐのねくらのいろれ文坊にねさまひぬ。よろく
きこしうねそちひしりじぞしめてうりて良に

例の左右より給ひ
昨久寺ハ右中将よりてわ
かいしも右大将より任今文
左大将をれ宰進ひのとハ
いふし
冷泉院の世つぎ 細 未審
院の御子のつぎまふ
ることを深く思し
給ふ冷泉院と崇めそ
めるもありかれ頃の
帝とも冷泉院とかく
称し冷然院と書ると
此院もけくかくあり
彼冷泉と書く火災を
さらひて冷泉の院との
りと入るまよりかゝ
泉院ハ大炊御門南二条北
堀川西大宮東四町累代
後院也
女御のぞらされと
眠未詳冷泉院に溢見
申のようにいれども冷泉

めでしく。めやすかりしことなくさん太大将の 異 久安寺 太大将殿
右大臣よひらまひく。例の左よろう
きぬいよくあかしまいるかたすくもうわり。
六条院ハ ほのめく ゆりおもひめる冷泉院のれづきお
りしまさきねるをおうぞれん思をよ異ぞ。
おりうすゑらひれどもひるやまさきれとも
あくてとらしまつるがりよつてハなくれてぞ
思の世まうくハえうてよもしうりの継とをく 細 未まではね續あれぶりより 細 源の之ひ
と口惜しく。さうぐしくはやそぎし。人よの
つまう後之
ちうひあしとぬしくるれバいかさくろうん主 細 明石中宮也 十八年と云て年をさかしきの之
づくの女御えてこちあもさうたそそひかそ。
いちどれ兒てあうしひろし。源氏のきらつゞ

方の末乃おりまさるさぬなどもおかげなし 細六条院の御事なりけるのあんなるく
思ひやりきこゆる事なくてかしまゐるぐらりはべるに、たゞ末の世まぐくは 弄 冷泉院
のみかくてこまひゆしに、源の森通のすえあちなる事をあらはしてかの世をつぎ給ふ
べきよし 花 陽成天皇の御母二条后は業平中将のまことの子ともいふ清和の
御子とは見えど、まことは業平の子ふかくひきまうりてこそ一代がくくり末
の代にはつたへ給はざるをふかゝんやとみゆるへし
源氏のくらいつぐきさ 細 薄雲秋好中宮の中宮時事源氏ゑり 源氏によりて源海
業苑御諸をひろり何 業平御諸に源氏の命のさ后にあたりてさ后も源氏によりて世の御
[illegible]中宮の時のまし御明石女院は東宮の母后ゆれば后
[illegible]つきにようきて

さなきだに
さ夜ふけてまでまゐらさぬを世人おりけずめも
つるようけても冷泉院の后をゆへあなくて 細秋好中宮 おほ皇子もまゐらず
おほせにつけてもむ［illegible］ 冷泉院の秋好を中宮にすゑさせ給へる
かるがらしくもしめさ［illegible］つる御こゝろと
ゆかしすまいつよく六条院の御しらる
月よそへておぼえくもらひさらて給へり。
冷泉院の
院のをうしゆかしめしもやうにさせまし
血 冷泉院六条院へ御業平を
かせうしぞ、げずり給ふべしつうしうても

夜のみじかきめしまに
師まんよ冷泉院の御宿
よるやまくさふくに
［illegible］

今ハかう 細 此六条院へ
おさうぶしき不る、聞えさ
せ給ふそれぞとまる死
とし

げようぞさくわらまめ月もつきせぬ給ひけり。
細 女三の宮
姫宮の御しとへさらどれしくめでたひ思ひ
細 内よりも［illegible］ 好
え給へ、御月うこのうよもわすれ［illegible］くりそし
細 されど思のくまは［illegible］ほど
つれますく候、このうへのれいうかりひかば、例
まうりくさ御くずそり月つるまくにゝ中い
［illegible］ 細 源と紫上
とうつしくひつびかさうしまひてゐくる
うわぬこしるくへぞそめでゝ給ひうぬおりく。
暁 紫上源氏の御まゐ御宿
いまれうう思ひあへの［illegible］すまゐるうずぞのど
やうるとさるひとりしちん思かこのさへかくぞ
うりとゝとそつうこうすまうまひたりしを
みうよせらうざりぬべきこさ海よ［illegible］ゆ 細 源氏
てうちまあやうよ［illegible］給おりくわるまおろ

とくまりてさりくしく
お家を治よとこそは
たうりくしく世わさんを
いうと迎りもうとし
あら世よりしんゆあらは
おいて語れにかくらとう
へまへしも日おお家のう
つしんき母をさらんいらく
あしとし
そくこまさとまことの
ほめや　細 眼ん弁文生
よと実母のてくし治
つとし
ありくゆくさうれうのり
お ゆゑ上の今りて無ね
をりられいおり給え

おごくつしるこれいとあり。ぶしまりてさいぐしし
いあるいしくあれどいらぶまうてきいぐし
くせがしきひあら世よりくらんれの御信
ちろめくさきよいうちしそるずくうれしづる。
のうしもてもかわしさとと
そのこしくげらん須よいとうくるしゆかりは
れらどのもごさまらげおしますず女れのまへ
こるさとまことの御母やよりさくおすこ
えまひてれうさいうくれずの御らしろさ
ひぞしとのりしまるしけぞ。亡くゆく
よあのりしげよめでさうりもこ。わまゑ召やく
ともれいさ色ぬしらてひのるさごとも
れいゆらつてめどさんへのびのひくしてして

おもさんのまひくてしして
くらしてしありぶ表
紙ゆしくじして世の
のうをとてい日のし
とのらく所同とのぐひ
明めそ四しくうせり通
けよりられいくさかひるまて
細 天下の母弟ぐるう
でハ御落ゑりれしと
とうり

がきられしけるりとあしるおて抱し給を
こよりの孔りりぐくらくさいく脳りんとそ
表ぐ父の女れのれいのりよまうして治りんとそ
おとさとおけて御らんとられいば脳く
めうきこしとうぐとゆかうらうしこの
のりぐうよりすうんるうらく世のいのうとく
くへさら孔ぐをしげよりられいくさかひるう
でいるくしてまあへさいこしぞをとふひとさき
てさうりのうぶつきうりさこうりやるとし
のぶさんくしくうらくしく。弘神も安
いれあみへさいるの栄あくうくらりいらく
さらやまがしのひまりらぬよりくらいらくでし

さるべきにてしばしかりそめに身をやつしける 細 此字ハ変化の昔 垂跡への尤ハ書時 出世しかりける此いにしへの物 入道が願ひかく多きを 師 上巻に てんげの物としがたき ところ 細 明石 此段ハこの心とぞ 入道の願をハひしくてま うでまうして まうづるひの事さのみ

細 源氏須磨へのみちをもろの願をぞ多く とづくしの事かくれしまり

細 御叢殿の そのよも 御願ぞはてさせ

おもひよりけんと、あはれにおほけなくも御らんず。さるべきにて、しばしかりそめに身をやつしける、昔の世の仏とぞ見え給ふ。このたびは、この心をばあらはし給はず、たゞ院の御ものまうでにていでたち給ふ。浦づたひのものさはがしかりしほど、そこらの願どもは、みなはたしつくし給へれども、猶世中にかくおはしまして、かゝるいろいろのさかえを見給ふにつけても、神の御たすけはわすれがたくて、対の上もぐしきこえさせ給ひて、

花 長保五年九月十九日 御参詣 家参石清水并住吉 給東遊神楽走馬 今案 源氏君 御物詣 上ニ冬ノ詣住吉可見之

師 上達部ハ大臣二所 のおほ臣よりかんだちめ 今上御即位の後 太政大臣よりかりそめ 大臣も人ハ二所也

細 舞人ハ十人 名清水賀茂の臨時の祭の陪従のごとし 六衛府の次将どもの

細 東遊のあり 細 陪従とも云 陪従 十二人 四位五位六位 各四人これも

二人ハ加陪従といふ是も近衛府より撰して 春日祭 近衛使の附 陪従

まうでさせ給ふ、ひゞき世のつねならず。いみじくことどもそぎすてて、世のさまたげあるまじくとはぶかせ給へど、かぎりありければ、めづらかによそほしくなん。上達部も、大臣二所をおきたてまつりては、みなつかうまつり給ふ。舞人は、衛府のすけどもの、かたちきよげに、たけだちひとしきかぎりをえらせ給ふ。このえらびにいらぬをばはぢに、うれへなげきたるすきものどもありけり。陪従も、いはし水、かもの臨時のまつりなどにめす人々の、みちみちのことにすぐれたるかぎりをとゝのへさせ給へり。くはゝりたる二人なん、近衛府の名たかきかぎりをめしたりける。

かみな近衛の官人なき臨時祭の試楽調楽をば近衛陣にておこなふ時の陪従も
多くは其楽づとめにて呉 同陪従を前人とかくすもあり是に一言 陪従と臨時祭
の時前人ありて行はれしが二十四となりしもくはしくは事のおぼえたり
そへありしあそびたり 細 加陪従とて役所の役者なとめしたるべし事のあるべし
師 加陪従とは十人の前よりまさるを見るとて臨時の祭など附陪従
の前より加陪従ともいふ又役所の役者なり事のあるべし 蜂の道の者
の所役なるなり
ゆゑありのさうらい
細 陪従とて神楽を舞ふ人
しろ御神楽をもみな集
の友人なり

ひやうゑ 細 ひやうゑ
ひやうゑのさうしも
ありけり
を中宮の子にて 嘆息

近衛づかさの名をかしうかへりまめしくたるる
れうぐのさすかはしつりしとさめてまるせ 五節の人数も為つとえらり
つらうつらうもてまさりぐうつうりつる
白金 竹の翁まもの御息所
内裏の大臣の殿上人のうちよくすまれてくるせ
つうしまうらしどもしくぞ見てまつくてまう
上達部のかたちら馬ぞひもり若いをくり
もしはづらくのものりなどもさてくくの人
きがりまつ殿まうさる女也 女は殿上 細 御息所の女は殿上
四車の第一の車
いかくへひとりよをまりさうつきの御車にみ
はおりのれうさめまて無びてのりなり

女院の御めのとなうりて御乳
是東 明石女院の御乳
母ともをつうしの名をよ
明石の人下しまうしたる
彼浦よりのたちうつる
れど此明石工尾張の者
どの内車よりりく
し
ぐくの人なりひ 后 御車
をたりや人給をおほき 注 副
車ともいふ
わりの御わがれ 細 わがれ
八流し 御 明石上の御たち
のとい義し
人めりくそまくてさん
細 源氏八十の人の同立か
ぢおいてまりさせんと
く尾張の女を好む海星
まさむなあく
みすびそりく此のて乃
ひびさま 細 比すび目
ぢけり女御のなりんは御車を
御名上のまつめまうる

女院の御めのとくありそのりくるげく 明石 女院の女房達
のひとりまし、人の御方乃ぬ女御殿のい 細 堂上方の女房たち
つ車
つおりのれわかれのありかとおやまうさ 其が名まよいうふそ
すこしつうぞくあるにつへべきしなりさう 御式部
尾張の素、たるとへうりて
ハ尼ござとバ女郎にくハおいのまうの云ひのぶ
くらりよ人めしくてまうでまりんと述 六条御息所
いのまひゆれせば此よびハらくぬ得つきのひぐ
こさまよしうまじらんもうさうでうし臣
花東宮の御後よつきあわん世といつて
なふやらうさまん世中をも猶りくまうつでこ
御名上く 細 御いくりまて
御方ハちりめ給ふうとのうり乃命うちろ
てのり立うりとハ此給とこ 御おすまの出
めさくそらうくりのゆうしりりてあくすひ
ありけ給ちりなつくへいまそれしらう

まへさふらく　細　めの上るなどハうきりのことくくばかまきえて一段のくるし

錦のにしき　同　ちりやらう
錦のにしきにハ小萬も
秋にハもみぢ川の
にあり
そまの山の秋ところぬ
細　引哥のもみぢ面白
し　紅葉をそめとまいの
山ハ吹風の音も秋を
きくるらん

く白ひ給ハ身どもとよりもいろいろ
ちぎり。わくらばにもひさしくんのたきさき
晦なり。十月中の十日あまれハ錦のにしき　発　杖椛
まちふるぞも冬きりてもみぢ川のこゑ
紫色く　みぢるじもてもの秋ところぬ
こしぐしさこ雨りろこしのぞくしら
同東極　錦着く　あつまあそびのふくされたろいろくお
りしろくる風のくるまひびきあひてき
第こぞりさ松風よそもそてある笛の
細　和琴く　花月　月はふくろくまくへおつりて
こしよそりあひくとるりひの　細

つきとるられて　同　錦ホ
とうごころをえらうくとハ
て。花しくハ和仕くし古被
あどどころぬとつでこと
ころすふくちらり。所　住吉
のに錦手まに浪りて散
をくくくろすあることとぞ
但此揚所ハわろきちらそらん
まハおしぶろへし
山あひまどれり　細　舞人
の装束ハ小忌とぞいふ
藍にてすれりし　晦日
のつごもり東遊の装束ハ
人竹文なる摺袍蒲陶染
や花かざし陪従冬舞
下襲地摺襖合陪従ハ
桐文青摺袍柳下襲
裂文白表袴合大口赤紐
巡輝笏引半臂各同
付こく
かざしの花のきくハ舞人
花陪従ハ款冬挿頭舞人
人陪従ハ山吹但住吉
物まハ役まで舞人陪
従のかざして花の上と云

ここひハ古歌あるらく
くもられてとくのへとりくそうろこ
しくぬもち雨めりしくもぞそ面白
く。雨ふりハましてくくしくなり。山あるを　細　住吉く
すわりけのわしハ松のことどりまもく
まぢひらぢしのかをあいろくハ秋の花よ
こしわうつらめトくれぐくあまよごふもめ
のこまぢひいろふりしめとちうすゑり　永子
まうやうふる道アハさぬぶさてたり
まふ句ひまちくらうさへのくるにまずこそ　肩とわぶさ
がくひえひぞめれそでとふぼりるよひさ
分かるべし
こうりしくるよ。紅みりさあくめのくしもそ
のくらえくれるまにもみぢ　細　おそひのこまく

まてさすたまり法性寺の関白より殿もわたるなり
まさひいろハ 細 まさひ色めくせなり 此句精くの義也しかじかも 無詞事 玄高可為
畏一條 思ひ出めくらん哉
りとめこそろ 何拾遺求子 色やかうひとつの松の枝をかけてよ世も八十世もこゝろつよし
こめふきて 細 花なりみつから 眠らされざる事侍し 花東雅讃云玄人二三疋次第河舞次
東遊次加之於呂之調子 葉双調也 長保五年 伊吾侍徒御社御堂尾府下上卒
其外殿上人合十人舞人 舞生之舞 相府脱衣被纏之 今案花ハ片舞とみ
子ゝ神社の行幸なりのりたまひての附も求子なりそて後ニハ下十人なり
て舞すなわちなりと云則なり 手
上人の下襲とえくまのみめ袷ありて紅葉のいろにより入りして見る細
すまりなりの 細 此の文字まて舞わたり是下なるのくしろおなりまま
さしてハ五つの下重えし深ハ殿上人の下重なる 細 紅葉の色ことと
ひらき見える 細 りよゝを拾さまなるへし 畏一條 ひきわたるとを
こくそえり 男女ミヽ

細 河海の説不審只
ひとえろうれとり荻を
舞人の河の裏にせし
こしろなし 河海挿頭
事下 人長わること 花荻を
かさすとハ人長の作
法よきり入長の作ま
みおり東遊のうた舞
かのすりにおるハあかつきす
もくりつや只細河説を
用へし

二の車代 細 此の尼の方
への方と 畏一番の車は次
なるべし桟敷なとにも
内このまへ入すふるべし
師おの方は次の方の車は
かわしの所ごと尼上達の
てのりあうとあるへき
車のうし
されたえ おか君の御あり
御ともえなる人もあまれ
たれしもわたく 姉妹
候ふへし御 説文ゝを知
て紀君の松は書をよみ
人まあまれバ尼えなく
いひやりすものそ

細 西白云 孟 下ゝなるのみならず紅葉のやうなるとの事なり
ころ松なるそばまれて紅葉のちろまま見ひ
まろとまりひわたりすごことまでいてきた
うくられるゆゑとしろやまなりでふり
ひと在まひていりあるいいくわりあるある
源氏
だてえけりもかりくしのしぬかなし
られ中ごろまへすひし世の末に経もあめ
のまへ乃やるにかりそして心そのわれしく
ちうごれるをのまかづきこ人をみるけ也べ
細 松江の浦にて まろまへ
ちひいのかしとのぞこひもさちひいの源なる
細 桟敷なるにしあ帰りまひまへ
いりあひて二のくち海にまのひて
源氏
されかなしくもせむまてにて後うしの御世を
へらしまことも御ならひりもまたましまえ
尼のみ うつはにまかせて
思ひ尼君うちまわれさしつかひいなるま
まろうまにも
つけくもかのうしくえましてかたきはし
女みなお
いけと女御の后のみかしとしもろ海をすまじ
細 八尼のこと
ひめうもいとうたしけるうちわり弟のもとく
をの経をそうしとりとむなき給ひし人をまひ

すまのうらを　孟　明尾上
のわたりし海士もなく
らんとし即尾の下
細　藻塩たれ行平のとし
ともかんとせる面白
し海よりうらひるな
ござゝし
むかしそ　細　わまりあ
ひろ源氏の、みえかぬ
上の本文をうり哥哉と
りくの月し　眼日哉書

しほ海くよりのわれしこう行平のゆく
しとこといふ事
尾上　すまのうら浪いかにかきさこゑし
かりわすもさふやたつしんどこくいを人家
らんとしぐらみひせろまつたちそう　孟る
尾上明抄　世のうさそもしのれをもれねすまふし
行乃あつるとくろるをつけくるひとひくふ
くうしひく秋あそひあそしまふ所の月
くろうよすゑてうゝへの比ゐて掛りくるゐし
まつうよ奇りのひとこちさうとさて松　とまりの久ゐそうつらふとさのちなかちて　松の
らと又まひてぞりの殿としそぐろつさ
は御わざし旅寝ともさらそひさらさい

ころしろうとの物うく
孟　望上门外へ出すふこと
八今ろしめくさくに君
耳ニ不唯聞堂上言君眼不
見门前事ヲ　白氏文集
すまの江の松よ　細　出家上
の有くうみさころ画之
仰行前の秋凉さ松の
音を拾しくえすふんよ
て行のうけるゆふく
うしく附名江のさ句を
そふへし
ひうの山さく　細　出家のす
なきるまくうしみそこう。
松のくへの音のふくきるを
えろく後ぞうくう世を
しやし出世せるし　花清
輔朝臣袋草紙ニ文時ガ

のくつるひのうくれのしらぶしくこゝつい
よつけくこゝそ　けくあり網代のあそびうり
こゝわりめうれまひえれれうしらくのも　三五夜の点　外
のきさしくし絡もぞむしてりくこや このわ
うのわりきさはすぶこすし入絡る夜いめぐうしく
地りしく地びまう
芸　もとこのえ乃松よるあつくをく君は行の世
ころゆふうしりもじらりけうのあそんのひう
の山さんとふひくうく雪かあしさ気ちやれ
ばまうりの心うま絡志うしこやしとひとめく
ゆ尖芸　されりしくるん女流の花　源氏女流
行人のてよとりりしうさうくこぞよゆふ

ひかさは神のよりけつりかけのるねにゆふかくる也。今案此文明寿を
極まうることゝ見し候ら。又袋草紙ハ源氏物語ころ後の物すれど筆ゝうことを記しあ
やまりて侍りやよつくん 男
神人の 称 諸おほさ何ゑすゝゆふかけそあるハ木綿をかくる
さふらひ。細 是ハおほ前
をしけてまゐり明まう
まことしも見え。注子云
神主をつかへお神乃
伝定納受の寄まし
しかるへからむ

けふのみつかひハことしハ中将の君 細 是ハ上の女房
ちかうそくゆふくまかしへかくされハげ
よいのまきこ神のさかしかつうくうてまゐ 細 出る子院く
らせ給ひうらをとるまにまゐりはらへと
うへのおほいの歌ハまいのかきとめさ始 おかまの出ぬに出まにまゐりて
そう
かへしさらせし中くいでさしさして松のか
とせられまれていまめかしきことしし
るけれハうちさしてふんかのくとあけ
けるよ君ハいまゝへふかくていとすゝしき 細 神楽ハ八幡
じらしきしまぜし。おハしすごさおかうかう

いりし夜すゝみたる所も 師 神楽
これ栗座称物するわ
神楽おほく
是神楽をらうへの所も
こちら 河 戌之 歌を
まはかせて並居さ
るをさうし 河 左三十一
万歳くゝ 七十三
やちゝせの万歳や万歳
ハにくやかまらの川によのまへ
さかや 神楽子万歳
拍子をとりつゝして
拍子とり袖をかれなから
えしくいそかまのかん
ことよりえしよみ
上秋をつ歌り
河 秋のよのちよをひと
よなせつよし

いりてしりの、とのかかやとそへさしてた 河 庭燎
ましるきことよいハまぞてよハ出まうけまし
めうらよみ纸まさいくとうらぬこ纸
くらうへしつゝりきひて こゑうれしのまゐ 孟 源氏の古世のまもを
盤渉調ほわかんとこ也
なまひやうぞいとぶをやゝうでかくと
あろずる面白さまさよしの一えまうる海
それきのあふこともあらず。あけのれゝ
くるるまにおかふかもはかしくわろさんへ
ちふ川だらるまゝとくそてつけゝ
東遊の風よ行らびくまつきもれまし
まぐらも。とさころのらけよ花のかしこさひ 拍子をとりてうたふ
きらうへうろとまめをまぬれとて 河 四位紫 五位緋 六位緑袍

わざをみびのかりてをりて
細 織々は霞なりけり
異日は衫袋のをりては
そうらう袖も尾ふれ
ばうひきるろし
そのぶりくハそうらうぶら
なり 回 後言うりろそ
ハ言心 お 女房をまの
ハふうなし

細 後妙ハ面白き也とそ
めて

けうめをうらそしおうしこう代々河をゆく
てものまうりうろうす
いめまつるそてめでしうきさきき
おもへめとをかんうつでよし
のかりておりてさう
めぐ海しき女のすく
きまうりごろうりお
こゝくしくてこゞ
き海でゆよ雨をとげる
孟 遺逸也
のをうえうとつ
おさくむつしき
ありかを

とをのしうう
おりさあ
酒をくせ
さて
かうきう
入居の
あてうん
わうまし 評判
そうされ 細 お絵
立ちし
あんのへ
めであう 世倍
物とお
わうくの
つとさう 孟 取云
て尾云くと
ハめうれ
ゆきそう
去杜の行幸 細 洞觀の
行幸也 二條 洞觀
天子の父母
なし 毎年
なよの父母の
ふるとし中

うけをうれまつるの
きさつしるうり 毎
じしや 世中の人
ぐうく
ことまつ
そそおうしの尾
ろうのちしの
うら河とき
春くしぞ
はうこ
はうつる
よるんむ

[illegible]

うちうちの
この院をば　細 源をさして也
おほかたのうしろみ
くはしくなきと也
御心よせ
二品になり給ひて
細 女三宮二品になり給ふ也 元二品親王
八封 二十戸 位田卅町なり 哭 戸八式戸之
千戸万戸と八式戸をまちあ
らしこれを封戸
といふ也

ひめ宮の御事をのみぞなほえおぼしはなたで。この院をばなほおほかたの御うしろみにおもひきこえ給ひて。うちうちの御心よせあるべくそうせさせ給。二品になり給ひて。御封などまさる。いよいよはなやかに御いきほひそふ。たいの上かく年月にそへて。かたがたにまさり給ふ御おぼえに。わが身はたゞひとところの御もてなしに。人にはおとらねど。あまりとしつもりなば。その御心ばへもつひにおとろへなん。さらん世をみはてぬさきに心とそむきにしがなと。たゆみなくおぼしわたれど。さかしきやうにやおぼさ

（傍注：お 女三宮の事　㐧 六条院の事也　細 源をさして　細 寵八年をつもるあまりと　のたまふ心也　㐧 世を背きたし　細 紫上の心也）

ころのみやすからぬ　細 女三宮の御かたへいらせ給ふ事のみとて紫上のおぼしめす心也

女一宮　細 明石中宮の御腹之姫宮なり紫上のかしづき給ふ也

いづれもわかで　哭 明石中宮の御腹をいづれも紫上のとりてかしづきたまふと也

んとつゝまれて。はかばかしくもえきこえ給はず。内のみかどさへ御心よせことにきこえ給へば。おろかにきかれたてまつらんもいとほしくて。わたり給ふことやうやうひとしきやうになりゆく。さるべきことことわりとはおもひながら。さればよとのみやすからずおぼされけれど。猶つれなくおなじさまにてすぐし給ふ。春宮の御さしつぎの女一の宮を。こなたにとりわきてかしづき奉り給ふ。その御あつかひになん。つれづれなる御よがれのほどもなぐさめ給ひける。いづれもわかずうつくしくかなしと思ひきこえ給

（傍注：今上也　女三宮に　源氏の心を　哭 女三宮と紫上とに源氏のかよひ給ふ事也　細 紫上の心也　紫上のうみ給はぬ女一宮）

きちまひんてぞうしうき
哢 夕霧三郎の衣をさう
しづきまうて

さくなうさ法つぎきて
細 内侍中宮の衣服夕霧
の衣をおもく給ふれど
まへ 繁昌あること

つゝ。東の院にハくまいりのよるむまへ 細 花散里なり
ごあつかひとうしやうてちねのこゝこる 河 典侍惟光朝臣女
いのそけづゝの衣をきらうよむへてぞ
くづき給ひしかうしけかさくらぐんも給ふよ お 内侍のすけ腹の紫え
里ハされかくすけされハかじめのさゝをもら 之濃もちゐこきて
うちぢら給もくなすさ法つぎと衣てある
どもたまよひろごりてこしすこうるさいてお
おくなりきひきか衣。今もかて給そとうハ
くしをあふひかひてぞつれ。さとなぐ お 源の衣を家あるとし
さあ給まかたの大殿の女りつうしまらう 細 ひけ衣と
まふとにかんよりをまさりてきよし

大学のうちにうくしき
るれまうて孟 雲よ源のう
えくおづゝの入き給て
紫ともむらさき給ふ

女御の衣ハ 細 中宮ハ女
とらうひかへて心をかくく
ゆかしで今ハ此女三乃
あかすとのゝ源ハなをつ
けすると 哢 桐壺明石
ゝる

りうゝのさくりをとて
お 朱雀のつく給もある

うけくちゝきもぢ出ちるれ給ふやうなべき
せりをもゝらり給ふつぎいのゝへやをも此尉
面ありておもしろおもしろくきこしうへひ
かゝひめ衆のこぞで出あかず海よりて出か 細 童玄ゝ
とゝそ。おゝしまもど。女房の衣ハいずれは出か
やけざ海よ出たるゝゆゝしきひてこの衆 お 廿三文
をべいとこゝろぐりしく出きるゝんき給
のやうよ。もひそぐることそまつり給ふ藤壺
院のつまいむげるよ世ちゝくなりぬるから 細 をりちゝきこと
しておもひぼそとくよこのうれ
こゝくうつりとなひもつれしゝいめん 細 廿二文
るん。いふひときひあろしまはちつき 孟 廿三ハ見衆あり

まじきふしなきを思
過ぎ去りにしかなく
おもへバ来世の根よのと
うへさとて

へだてなく おりつるものなき
ふかめると源の出よめ
らくもど孟律おく
るさといふ年あり

みなひとりまうん 細今
年木雀院の此年中
ぬ女の御年四十に満
ちり源ハ四十六歳し
いりゐの此まり也 細
のかおくよきなりりく

かくこのうりしりそれ[illegible]
さ[illegible]して[illegible] お朱雀の御方へ女三宮をとと
べ[illegible] 源氏之
氣色[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
て[illegible] 細此加之思
らもこのたびより[illegible]われる
の名と
どそうじてやとかりて[illegible] 朱雀の
此流服之
[illegible]

るまうれ[illegible] 此心知心調月
まれバ人の[illegible] 朱雀音楽を好せ[illegible]
[illegible]
とめ[illegible]
とめ[illegible]
[illegible] 细[illegible]
さん[illegible] 此女三人の御典侍[illegible]
[illegible] 細七泉[illegible]
ちひさ[illegible] 嗤
[illegible] お叢文の中まと
さ[illegible] 孟童 孫王
[illegible]
のえ[illegible]
[illegible]

琵のものさうらん
菩薩みても女三の宮きゝく
て別て琵とをもあひと
げうらでうりし

きうどそしこきんづうりへ
細流の琴弁ハおほかひ
つくんと菩薩みも内
みもゆうしく[illegible]
まそうし

こしかるべきことゞもとゝのへて、おもしろきのまひなま
うはなをきせ給、いとゞうらへきこえひのこと
とぞ、これんゝとつくしまひ、らうんきこらく
のもおもしろ手、いと遍なきてうかはらき
いりしうり、きらんのはなしをるんなうしひか
ひろきいとまうくて、みとひきされ
なりみひみしうへ[illegible]かし、うすく[illegible]
まう給らんつゞくよ[illegible]ことの[illegible]
きう遍そしきさりとをこきんぢうう
きうう給つくんとあうこゝくよそひ
ひうどとうみをしそうしめて、げにさ
[illegible]
ことにつくし給りんつのでよふなりてこ
ぎやうどのうな遍のせうしとゆゞじれらとも
つくんきまそて、とくはきうめべきつのてご
とゆはとゞしへ[illegible]ゆうこともあうとをはそ
ひいけるまさり給よされどちぎこそう
めでたしあられらうきてみはゝとよそじぬと
あまぐあすくてまうりまつんつゞくま
きそうしめきんとゆうしるくゆうしげうせ給
めんいとしろしきなうろくきこしとうとい
とおしく思して、ひごろをおほしめて
とつおもし給ちかくべうしかうてあすう
ゆりうさ大らく光のぼさまつけてうう

ことけつひハなまきり
弟より此琴のさ遍ハ
からうされとまそく

太曲に琴之太曲也春ハ角
夏ハ徴秋ハ商冬ハ羽五

用ハ宮也律ハ寒。呂ハ温也。
又云琴ニ有大曲中曲小曲
出太平御覧ニ云々
琴のさびさめづらしき　細　花鳥
師曠とひろう。花　楽書曰
師文之変易寒暑孫登
之感動風雪云々。謂琴
事也。琴書曰、師曠晋
楽官也。於琴能易寒
暑占風雨、為晋平公鼓
之感玄鶴六下舞

さびぐさくらのさむしろにめづらしき琴とくの
へいで。やんごとなきかたのへきてのかぎりと。（お　女三のみやくハせく）
とりまうでとしへゆめし琴まなびしけなく
（しきなくと）かきなりやうるれど。やうくろえ琴ま
なよ。いとうくなり琴。ひのいひしひしたけ
くだす琴ひとさびもゆしめんもらいと陵と。（細　中ゑゆら之拱きん八よもと）
ころあはさしきれど。よろくろんたがへ
ゆよこしのころをきこめなるへきとそこい（孟　窓上）
（みも源の御膳をこひて女三ノ宮と若のうへ）
みもそのころいれいと陵やなしあひくめけ
（細　明石女御と）
られとへきうし琴。女御の気ふまうてへれ
みをきんいすろうしそまつり琴なさら
（明石女御の御ゐと）
られいどのかりゆきくうるれめてとも

十一月　細　一本土月しあり
土日又引今ゴ食ヅ潔サイ齋の
日あられたる。又十二月と
神まつの月くおとなよ
ま用く

冬のよれ月　細　人のうちて
さう物よりて見ハ物絵
ことは多く待ともろく

ひきご琴しんとゆりしと気ありて。女御をもわざ
（咲　明石女御の御膳く）
とわりうきれいと陵と。しぢあらしときこ
そままてゆすてまつりをことかう前はくすう
（咲　白氏文集を懐妊あるこし）（又　月）
と。まうも顔色だうをあそいつくきぞろう
まぞめまつれいふをわざあどうのこととつけそ
（河咲　孟　十二日　細　十一月）
おりしますわうり。十一月もぐしくハ
（明石女御子今上のまうりまうとく）
まうりうあへきれをきくそくこうしきうり
あれどうらうつりずまうく御けつきこまろく
（細　明石女御の御ゐと）
の御あそびとうしゃまし。おじそてられよ
つくへ琴いざりけんと。つてくとひやかし琴。
（源のへ）
冬のよれ月ハ。人まうひくめでありあひ
すれいかりしうきよの雪のひかりよ。あかり

さいまどろふく　細　いそぐ
しとぞ云ハまいりて
あさにいそぐべしとなり

院の御賀　細　朱雀の院の
賀先内よりしらるゝ
つぎなし

をりにあひたるてどもひき給ひつゝさぶらふ人々も
すこしこのかたにほのめきたるは
御ことゞもとりどりにひかせてあそびなどし
給ふとしのくれつかたはたいなどにはいそ
がしくこなたかなたの御いとなみにおの
づから御らんじいるゝことゞもあれば春
のうらゝかならんゆふべなどにいかでこの
御ことのねきかんとのたまひわたるにとし
かへりぬ院の御賀まづおほやけよりせさせ
給ふことゞもこちたきにさしあひては
びんなくおぼされてすこしほどすぐし
給ふ二月十よ日とさだめ給ひてがく人

女楽こゝろみさせん　細　女三
宮又試楽なり朱雀
院にみえて下作あるべき
ためこゝに今の人々にて
女楽まづありし
さて今の物の上手をさして
細　世にある物の上手とい
ふとつきてぞ源氏
生のすまるゝ

いとふかくはづかしき
細　源氏ハ皆それぞれめし

まひ人などまいりつゝ御あそびたえずこの
たいにつねにゆかしくする御ことのねいかで
かの人々の箏琵琶のねもあはせて
女がくこゝろみさせんたゞいまのものゝじやうず
どもこそさらにこのわたりの人々の御心しら
ひどもにまさらねはかばかしく
つたへとりたることはをさをさなけれど
なにごともいかで心にしらぬことあらじと
なんおさなきほどにおもひしかば世に
あるもののしといふかぎりまたたかき
家々のさるべき人のつたへどもをも
のこさずこゝろみしなかにいとふかくはづ

世よのもてはやし（かハみかくり）
しことお源の自讃の
詞に我心のをとよびぬぞ
どのふかゝりしとく
そのかみより々えての
世のわかれんてのぞれ
うしかき 師 此氏の棄
八なきんてのあまり
たれらしめて分お匠祢
たくみにて昔年か
源くぬきるべしとて
九二斗 細 今年九十一歳
なるべし。源へまうすま
年十四とみえたりぞ
のち八年まてたらぬ

おゆかしさはのひとうんなかりしぞかし
よりもみてのごろのりくさんへどのぞれ
らしめさこすぐもそまよみこわざくなりま
するへし。（師の和琴ハ…）きんなさこましてざんとま（細 琴ハ女三宮ま…）
かんへりつくかりもすりとかこのれ
めでたかりぞさいまつさんへゆきしくあるぐ（へちん心をかきとも）
とのあへいぶるおぶらくらる名をてらんし（女三のまたし八宮の…）
くりくゆかし給留よあすりまけりと契わた。
九十二ぞかりよなわりのあへどあぞをとつし（ニジフイチニ 御点）
くくこなわりよそびいろうからして。かやそ（源の御…）
くめえりまうりらしくのそえて給述よ（御朱雀へ女三の宮…）
もえしありてかつくとしへめたりとね

げよろく流らしるき
孟 源のやとりり人ることて
八女三の此名八立ちじ給と
くお源へ朱雀のあり
まへるとがふとさるき
月にてそ 細 二月よなり
みぞとく出家のこと
とりて

びきやさり給ふのなんとげりんどぞさりよ
うゐくへてそし出すりさまへとぐくいふ
出つくとしへきて給ほげりくらしれうし
ろそうくてへぬまてゐらけりくがつは
を給ひ名残とくれあすりおもしとへてこそ
もすか。二月十五日でらりよふとれいそくもか（花ちるとく八十九の年…）
りしさ御ぐるゝぞめうくふきぞて。かすれ
のむめをさくりよれわりゆく。出家なくこ乃
花のもとよめし。これ容親をこぞりすこよ（源の御詞と）
よりま名の月しそくれいつそぎさらくこそ
のきえぐしりへまりさこめもせ給ぞん
はこのゝも。そがくめきりて人のひへるさ（細こと…）

さん給よ　細　女三宮のま
しまうとうかへ思ふを
ころうしかつうと師説
女性のかんかるともこ
ておうへ。

むとこのかみ川からほどけよ。らくさまへ
とそ志ん殿よりくしなすり給ひ。ならんとよ。
されもくとりのゆりしかりてすくろのが
らまわしかれど。「細　女三宮ことさら人々をえの言記給へ」こよとどきさぬべかり
とくめさせかそてきくしわびされどりしわ
おうさうりてさつしくを給ふ。「細　院御ちより風ぞ」へ
もくさらをかれさうぞ人。「お鳥ちくらり　細　おかめちのうへこし」おかろよさく
らのかぎとしとらのとりのくあとめ。「孟　うすき」
きさりんのうへのなう御。「花　ひらへをつふまや」かれるわせらう
うさ御ゆそてるしまぐれさう限とめし
より。「細　明石女御之」女御の御かさすそしはれきろくひかまいい
しがわくかれかてかのくりりろるくきこに。「細　正月うれど」
とのくいと御しくつくしうろしまそて　母
ひじとおぶやうよにゐす。わうくあとい「細　明石女御のやうくし」「花　音」
ろよすがらのうぶさとしくおやのうへのえ「きはくくもて」
う御あくあれやまずつきたかりしのきこと。「唯　唐綺を山吹がさねわらし」
共すさ御よとしのくてろす。あしのれ人
さ殊てくとしくしてそ。こうりさいふるん「花　紅梅桜そらくさと」「童の装束めうへし」
さらくかてうりあまどのうそうりそてお
こめこうしすしくらめるどえすしてさ
せすつりまの戒りさみも。くつくひまぐ「細　女三宮めと」
くさてまて。まししゃくのすづきづりつきと
よつくろうをさまつり。おまよ。やうれの
うづき。えびそめのあくあるど。こしよこ

あそど　細　菩提の書巻
きくの名こと花あまど
えうぐさとどりそ一し
師うぶりそてしは四人
なうしいの女のうぶさと
こうちう（し）
おこめうてしもく
師おとめ八さこしを
わくころゆくようくう
まくしつつ
ころのるど　同　装束から
てうろをつくろうな候く。

ほう殿そてある桜川ハ異本にさし
あさみく 細 かくまさきれ。花あさぎハ表薄色裏ハ濃青に表をうすく
きこえさせしさへどたう
びさし 源ひさし御殿
なにもあるましきことを
とくいけるまゝどハ
朱雀の皇女なれ世の
おぼしめ給ふそそまた
しらず

右此ハ殿の三郎
発 鬚黒の男子四人の内。
又殿の子二人也。三男ハ
むかしの殿乃嫡子也

のまうしくめでたうしきこゆかはあらねど。
たゞけさうさうき ものかうこのけはひのいとめでたくけしうさこ
へいしすひるし とさえどもすこしびるし。ひさしの中の柱
女三宮上紫女院を さうじとをあけてころさぶらふきさち
几帳 やうつりとけちめなく。中のまへハ端のお 細 源
りしまでぐさ供のしきりひさしのふの揺 ひさし
源の まあつをみはじめたるさんしてゑ供の
玉 御殿の三のうかくの君の御ふるまひあそ
筐 ぎさうの御簾おこねのはしうつくしき一筆 加 夕霧の嫡男 雲井雁の腹
よのきそてすのみるまさふしつゞと給くら
発 絃の袖の色名し しあこしく大きなしくて。はしくし光気うす

絹の秘物を入る 絹地染 そひしほたるしやうつしそくとんぢのめく
ろぎとよつれきうとりける。いみじうのはし
御女房 さまびて。女のくまぐましん。女はのうに
きうのはしくしやみははうくしくまへさ
しはかすざえひさきすまうぞやうしあやう
盃 源の酒 くそ例のてうすしまくてるぞちて
せうとく 源の下知の前く たまり給ふさうくのはしくしはゞゆふよしくま
るとうくもののよあそうすうかりのまえくべ
よつけくてしとのすらどこそうれけ
かなくそのふましくひとくのめのべき供。
細 見きえ とんるとえそりまつめじとるさえ給とと
童みきのろこ そめしもせつべらかれこのみえかう大かさ

こやまはくさらくまさき
細 女三宮ハ姫君の御台にて
いまだえひろきげにと
て用 あるし

女流ハ四よう人のそうしめ
ともなき　孟嘗女流ハ壹
よ楽養あれハ心安き
ときのらし
まらんしそつくづくまる
ぬるんすれど
かな和理て八日本にそ抱る
抱く六絃にそ絃あれども
もくみられバ抱よあかす
なんとろてむかしき
あるゆわきあれて弱し
のかのはしのけハしらみりきとか

いとゆかしげにそのやさしきこのたへ人その
こゝろうらむずることもなひまでたねをすこ　夕霧とかきし
めしませだれぞしぐそろしくんづるひ
てかりもこあらしのゑよそくろすちてハいつれ　かの喧嘩のかえしを源氏の源身分し
もられずそてごきされでもしくとるれバ流
れぬそんくてたねのかしく絃りんよきんかる　雅
へくしゆかしを女流ハつるよらへのかしめ
それを抱よあわせつひきすくしまされバ　業工の不抱し　師只六絃にて調子のも　この
うちろやもそ絃ころへしそてつくづくるすら　ねくうすしと
ぬるんつれどあしきさまひろうてとあく　師附よきうらひて物のあるく
でゆくそんなのつよりゆかべかれ妻のてし
のゝハいろれりさむしみすか抱たれとふかしうかく

わしろ抱うらとみゆるうし
あれとかし　細古来くの
しるきところく　咲　琵来
琵琶弟在別らく
孟何ほそ子細あるへし
らし口傳と変へし

花ハそのみたい香
細梅雲しあまえる
香のあるくふれくハの
かおえしお滸電ある
しし古雷不実もし

鶯さそふ　何花の香を
風のたよりよそへ

そゝろりやしろ梅いとおかしく琵琶をえんの　咲由表かく
ねのしいそくうろうげなりして琵琶人の　香き
こゝしらくうろつきされならぬあへんかう　のまりけし
をしよのなづつひハくるよまさりて琵琶
まきんくおぶやうるれなるもしらうに
まこさる流ぞとも袖ゝくとさらしめそ
のきうくろひて息の錦絃られそて帰ら
ゆへあるさもれどもさのよむハこぞる
かゝゆきたひのぞくれく琵琶もさもむバ
うり咲もずれさらゆるしくなきらめく　こゝ
風ゆえなして匂ひさうそゆそのくらろ　梅の香し
うかりもかよさあくもそしぐひともさそ

てそ高うたまへし

一こゝろのまゝにまよはし のとゝもに 〔師〕發(ハチ)絃(ゲン)
箏ノ調子(テウシ)ヲ弦也 双調ハ以三ヲ為發(ハチ) 盤渉調ハ以五為發也 〔師〕調子の絃を發(ハチ)
絃といふくは二の絃をとふ
づまや 一越調ハ二絃
一越 三絃 黄鐘 四絃 盤
渉 五絃 一越 六絃 平
調 七絃 下無 二三五絃
同音 三絃以下甲乙
くらのとしりふづまうや
しおり二三五絃同音のれ
れ可高し 但一越調よ
りも平調双調黄
鐘盤渉五調子すべて
調子の絃といふ二絃
るなべし
行くさかきせりらそひ
と何冷しうしてそ
只と一向まもられきえ
ども冷うらん撥合ハ
ちハ日一ラ川まへるの
なく

ここひうそてつひすま
てそく〔愛紫〕古風な詞

よつまはあはれなるべくいつならはぬあはれにあくかれ（暁殿中の）
のうちひきならしてのあさしうちとけの（孟箏を源の弾給ふ也）
のすゝむるしらずくらくしき（細 源の詞）
まれどこれはなしの人ておもくなる絃（絃也）
へこゝよけさくきさ人のいくさまやうを
なまをしのまんなれうしこまりて絃りて
あ月ごろいみじくめでとくていらくら
でこのこゝよくらのなどふさてしわたる（細 夕霧の詞 師 絃といふことなるや）
ちこへやうそさふしひまへだうたうさあ（細 夕霧よりかくいへる）
つきらわてひとへ何すさまじうたで
こそしのうまへハさくまよのはあそび（細 夕霧の詞 孟箏すこしハら交ハりこと）
のさしうへまゐらうのでうらん
あん（細 源の詞 卑下の詞也）なぐさむきゆらうそらとしうき
さまあうしうれど女びくよえてしまぜ
でらんよげよけるとていなめそあし
それもうしひ絃ちらくそうかしうあ（夕霧の箏を調じて入）
どまうさあるせづりひきそまうく絃
てのれまとのえびらのいとう浪との（河 直衣之）
ねすうことかくわきあのまうあの
どもかさわけれど此ひさくありてつく（明石の器量也）
じく此しげまりけるころのあらへど
ものひさそくうさあつきまへる程ど（女楽のありさま也 明石上の所と）
いつれとるなのよびらくすぐれてよむめ
ききまひかてつひまとけそく此り

隠る 此巻ひろく見わたし お邑の事 このかみ迄

まことにおもしろくて ありなり 孟 和歌とかき
ふくくの本もうつくしく
うつくしけらくのわざ
細よく撃者しきかれ
とく 哭 弟をつゞきかさ
くし。孟 源氏ハ上﨟のよ
めず
さいけんかうかるそ
孟 よくわそげしかれ
じきに源の源氏し。愚案
おきうづかしまりなし
るまいしかしくかたを
源のうかりけるべくたかれ
ろうよいまけんかうお
さうとく

かくこそ也。まいらん（孟 業の不作すと）よたねもかくとくく見え
まゐるよるけりしくあのぞやうつきしまう
ほつまよしよかくきつへしするねの御ぞう
しくいまめきてさうしまは まゐらずしわるよ（なとえくうまへ）
むどりの。やどらくちかくしきそしろをへう（のまたかり）
べてきしよゆらんびおきつてしく。中まりし
しるよもうろうまきゆうしことこゝろゝ
ふ。あるきけらうのわざしめうわよさそうて
ゆりうきよ。ゆうしげけんゆらかそういてきる
ずうくちひろきて 絹。さうのけしくへいの（哭 未異者 空蝉の不能く）（の隠くうめすると）
ひまくうよんけてうくどりいるうめくね
じりめくしいけりかしげようか 風めくしのこ

そうか也。それ（女三の不能く）いる紙よりうかさうそれば物
らひ絹さうりうれば。ちげくもろしくばを
よく物よひてこまおくてくいうよなりにを
けいとのびかめし。たねきう絹。袖みしりて（哭 夕霧之）
唱寿 さうげし絹。流をかくおかぎきらあらし（六条院之）
て。らそへ絹けゆむ。むりしうらをいそうく
やりうくちうしかくのよゆのくちつめ（細 つまり 記ろうをよそり 哭 同）
けそひくこそ也。たねもてゆいてもつくく
れるえる人あとくこの去げりよなりもまく
よいふうきりるくるうしこもの源のあそ
びありて月ゐりしうきこへろうれバどうろこ
たまうるすてまうけて。先よまさ風とうよをそ

月ゐりしうき 細ゆうなれ
の花の宮之 お氏業の
阻まそまうしつの月なれ
こまさし出てとまりて

[illegible]

八宮なし
宮の御方とのぞき給へる人
れど 細 女三宮のさま
のぞき給ふて 孟 女三宮
のやうなるといへども紫式部のぞ
ことかけて 河内 長秀
人々の花のよさ人八葉
子給ふらんとおもふべし

ふくひとの羽風にも
河白雪花繁空撲地
緑絲条弱不勝鶯
白氏文集 鶯の羽風よ
柳
あやしき柳のさまに
て柳とみゆるは此具平親王

さ給ひて宮の御方とのぞき見給へれば人
よりけにちいさくうつくしげにてただ御
衣のみある心ちす匂ひやかなるかたはおく
れてただいとあてやかにをかしく二月の中の十
日ばかりの青柳のわづかにしだりはじめた
らむ心ちして鶯の羽風にもみだ
れぬべくあえかに見え給ふ桜の細長に
御ぐしは左右よりこぼれかかりて柳のいと
のさましたりこれこそはかぎりなき
人の御ありさまなめれと見ゆるに女御
の君は同じやうなる御なまめきすがた
のいますこしにほひくははりてもてなし

御けうそくは例のごとく
なれば 此脇息の事ノ
のこれが小さき事也

けはひ心にくくよしあるさまし給ひてよ
くさきこぼれたる藤の花のなつにかかりて
かたはらにならぶ花なきあさぼらけの
心ちぞし給へるさるはいとふくらか
なるほどになり給ひてなやましく
おぼえ給ひければ御ことも押しやりて
けうそくにおしかかり給へりささやかに
なよびかかり給へるに御けうそくは例のほどなれ
ばおよびたる心ちしてことさらにちいさく
つくらばやと見ゆるぞいとあはれげにおはしける
紅梅の御衣に御ぐしのかかりはらはら
ときよらにて火かげの御すがた

ひとつもぐ　細　河海の事よ
おりさうて楊貴妃を
牡丹にたとへたり唐綱
に花といふは皆牡丹
のことく紙絹の花と
いふは様のことくされ
は数もたゝさの詞也
さてもめでたきはされ
とも見るより　河海に
てまさるひたすら王
これはおもしろき葉木は
花なるべくに　孟川か
よしなき

さ世にあるべくもあらずげなるにおもひくまれ
のこゝろはえびぞめのやかましきこと
かきくもりつるの袖をおもひなげきしのさ
浦まろ須ころもゆかしからぬはかなさ
もずぼきおはやうにおもふまほしく
わすれのひとなりかしてむとい
ふざきしきはしゝもおとのかり
もぐれさうけさひしさは地しをふかく
わすれもおかしいけなきゝんこ紙にとて
をわぐもりてなししのびやかにさ
づしくものそこゆかしきさ須にてそこ
もうしろめたくよろしき浦めかしきさ御

落　藤袴

うちつけのものゝろけ
ならぬうたあ
花うすき他の露ともに
けきものからやむすれ
上の露を引かけてや
かくておほれさまつりて
そもや

さ月の例　細　端午の五月五日
さるゝ花のさまなれど
その月よの五月のうちのものと
とりかへの事は五月に
河海にてさりへ花は
花の月の例花歟

のかりけりのつゆそをすがりにさびさうかやうのあ
んこうちさそてうへも他のよみにてらちるすげ
かなう引かけくてしさびしのびがしこれなど
ものかはあるしもゝよろしくおほしつかりしう
ちなどぞ浦のあやうのみしこそのちし
よろこび　早下　のみな袖かをおそびへとそら
孟西條よ花は緩急されて
まろうそに氣色えさりひききけり
やからひとかしそうなうのりそすりし　細
さまぞひとつのたちのふかくなみらぬ
とふさ　花のかさらなる御れよ袖
　孟の花上を袖よさきみ
ちくさうてし　かくきはなれうすくく
てさ月すり例花さうきの他もとこゝを
しそうろうはれうかの地かさこれもれ
をうちとけぬれけるひさゆくとうてこ

まうしろまさるうとく
ろくにおほけるひ
私 女二の宮おはすを
夕霧のうふく人々みえける
まひ所望かる義也
んまゐまさおもて

みな夫婦も（衍夕顔の紫式部かならず紫式部さしくかく宗へ）いとらうたげにゆかしく覚え給ふ
我が心のうしかりけるを（細 我がのおしそめる）わびぬらる
うちしんで程にゆりしらるよしありかし
（孟 女三とを夕霧の君也）しかせどもりありともしのはしくをとよばかりし
かぶさけ細みくもくまりて明らしかのい
（切 縁を）もわからそくやしきや猿いつくしくさ（細 …の所らく孟案）
（二女三を夕へと也作し）わすよせもしけてあかりごとふきの絡へ
をけるをさわぐとさへどすらしんやもこそ
かさそみてまふけれどひよあるつりくそ
ゆくはあけをしいしもものへらぬこより
（細 崇之のすり 栗孟門）あり〳〵の行方もそなるまじくもありひをみ
べさしありけりしくて年比みつれあれ

あながちよわからしく
細 夕顔の家居をさして也
を持ちさせまで
秋かけゆく風の
愚案 秋かけゆけは
表のあらたの月よく
細 源氏物語之勝月
夜よ 細
しるの勝月もあれ
花秋の夜を以て仕立
のつり物しおかり孟云
の夜と秋のさまよその
あはれ

べりづゞらふかくつゞむかせあらさ
とまりしなぬんとかりのくちおしく
るげりしきあまかれがれあはれなるあはれ
じくおかけるさくおるしくへさしつより
給ひぞいでくりてまふおおりゆ秋かけ（比 細 銀之室の）
（時ふく）ゆく風のけしきも物やらかうりふけりらの（細 二月十九日之）
月なかりよさしいそさふくりくす〳〵や表れる（孟 源氏）
かゞ風にて秋の表をさしくわひよる
それをも思ひのさいりあつとさそさる（細 虫の声と秋のけしき云々）
らむどこすくひとまゐりをわうおよしの
（御夕顔の宿）又はえ孤の鳥あるゝものゝ夜あるに夜よ
はかなき行のよはるとくすむりなきにくく

細 篳篥声
春のうらゝ
かなとすむらしくハ春ハ生
おもくさく夕暮ハ西
時にかわめてうつり
いかにもかえのねにみども
えんに一ましのかりそて
あん 孟卒二八すましのかり 黒素
なそくあらんとあり
然年にあてつく移り
喚合せうるやうにハいり
てうと与とさりて笛
のあみどもえんにすまし
のかりもてもえんとんの
へくや
おハ春とあかれむし

笛のねをしおそろうにすめかくらえし
けれどれいしてこにうらあるせうる
やうなりそしての気色 細 秋の気之 花の春にもおとらく
せうるひらりて限しそ竹れ春乃
そしれ夕どくあまりそえのまうかぶる
かるなる月かけにあ川うにあさわたせ
よろやうにハいかくか宛えの糸さるごと
えんにすましのかりそてうん、女ハえりにあ
それもとかうさ人のいひをき竹きげ
にまうん竹りうかうし、おみくとそ
のかりとハ春の夕暮こそ 細 浸の浅く孟 夕暮に秋の句と春秋の勝負 こよなけり
なれどしらんハいかにのさしめいりん

男蔵陰乱秋愚安五詩注

是歌にハつきの声なり
何呂ハ春のこゝろ律ハ
秋のこゝろとよみ朗
声軒ハ律呂とよみ律ハ
陽正也、呂ハ陰助也、然ど
も催馬楽にハ呂律と
いひて律を次にするも
愚漢志ニ云陽律為律。
陰律ヲ為呂卜いふなれ
異朝にハ律を陽とも
いふ本朝の催馬楽
え呂を春とし律を陰
と用ひ来るなり和漢の
ちがひめあるべし
あのこれなとし 細 八まき
まうなるう師説と
つふかくし
つくくえかわひとな

のよりそへ人のつきなるよりかく縁もなの世よ
らずわる人のえおうしめらいまじくこ
え抱のきくべらくの抱どもをしもげよ 細 曲なり 助き之
まちをいつきのりれ子しろはさをわ
まうしるぞのあひく、いまよぐいまいう 細 是より両河の有徴の介を
そくの坊かしうらさその人かの人ごだん為 滝の名出之
どかく、がくんをさせまふよもぐれなう
えうもすうく如しみると、そのこれなそと
坊し人みどもどもをいづらくえまひべそう お今夜の女楽を之
ぬりやわしんこのくれのかうか女さら
の中にひさけせさんよ、きくるえ 祭 離
くこそ坊かしくとしじかくむれてきく

音楽六人ならびて上手にお内裏も見えず(?)ひらかるゝやうすもひかえてひの女楽とうけて
色則ちうもあらむかれて　保のうく世にもみだらにも
嗜すまふりや口おしきことゝ
おやしらんのごゑえなり
なりとくすりてのとりの
楢のさへまそておるの内言
愚抜とりもなるす
とえまりのびとりすると
ざりしのらし此六番阪
の内ぶ人の免覚もなる
なすゝまのひとりもうりて
ざもおやしく梅のさへ
まそて外よへするる内よ
てわりとうり　細　此女さ
ちの未物まひきとり
まうきし此鉄八未稿よ
ならのまうれもやくなり
とし保の自稿し
その内番の内おそひ
思楽なれとしいりまぞ
とハそ枝中の内枝な
どくの一もるまえてしひ出
女楽の下作とハ勝出いうまぞしく夕霧に向路須く
それにとうんとうりさん
ちよく　あぢもすくしひかくしかり
まちりやわんの口おしきんおやしく
人のごゑえなりなくとりすりこしまと楢の
なへありてまそり雨おりぞその内番の内あ
そひるどもまひとさぶくよえくりさへ
それりまてにいうまぞしのまへハおわるれ
なんとりやさんとひ侍りつれどわきら
うすしねうろのまくに地すけてやりく
おまやりのがりての世とそあわりせ侍り
ればりや生方の初保の内び
細　拍木さ
晃上代之　細番のしとまくも都すきし
ごぜん
夕霧の
ごぜん
黄金めし
細　夕霧もやくとのしと綿ぬしくわりりとも
そうどもとそ此ひめうくりうさめしま
ひきいそて侍めれいげまさくしうかく流こ
人ちうむしくむさ梅そうりのくねだのられひく
そくとしうさ侍いが代りくりきしとあ
らぬ内わそびとうりてむすへし雨とりこ
そうのきはりやはしんぎりるどいく
つりあうのくうんまらんえうの地らく
がかしそくかりよりけてこしへなび
ひうつねるどうろまかりせてくうき
てまつるいりとよまりのしてかへ地さく
とそたるれぬ物よ侍めりをやとうこて
お黄梅の琵琶和琴今の世にハ知ふ
女楽のさまし
奏神楽の和
狐とひとしく
抑とゝ
お唱寿せ
細　段江夫
晃　晃
細　生れ上と出あの子と
出の子のうつき梅なしく
初一うりに
すとうくいたとも沙くね
内おそびと
おとしくしうぬ内枝
とうひてらよ出ひ雪
ろうれうとし
うくおりまつりそこうてらえ
おひしてうねなど
晃　宮と晃なども打まいひ
て個へ合せてうとうう
思楽かの個よ和琴こそ
りかで争ぬえてへうれ
どおりこぞくまかりうなす
なるて出く出のさとり

めでられとあり。絃さま〴〵
でよろこびのうちきこえ給ふよ
つけてうちらへみちびきし
ことなめりや

ひはさしもよ　細　明石上の
琵琶ハ我口入せざる
也　柔　明石上ハ源の君に
ならはずとも京にてハ又
ならひ給ふべし

まなびしこ　細　弟子なる
ことそハ我しるとあり
花鳥　自得あるとみえたり

とゝのひてこそ侍つれとめでゝきこえ給ふ
さこしくしらてはよはおかしぬと、わらさと
うけひくをとらうさきなくゐるもてさ
わしく弟子も侍らぬこそ我とのみぞ
あさがほも源氏のうへより給ふはあゐ
弟子どもなりかし。琵琶はしもこゝには
くちいるべきことまじらぬ。さいへど物の
けはひことなるべし。おぼえぬ所にて
きゝはじめたりしに、めづらしき物のこゑかな
となむおぼえしかど、そのおりよりは又
こよなくまさりにたるをや、とせめて
われかしこにかこちなし給へば、女房な
どはすこしつきしろふ。よろづの事みち〳〵

我心よりをしへつけ奉り
ゆく　お　紫上をまでの上
ならひしうへ與源とを始めより
と明石をもとりわけ給ふ
じとし
そこにもおほむかしより細
ねびまさりたる人ならぬこゝ
ちどりにゆづりてもあり
ぬべきを　眠　當世ふうく
まなびたりしにそれ〴〵にこゝ
しるくも引えたり
ときはへぞさとえと
おの〳〵の人きさゞいふ
こゝをとるところもとみえさ
らうにそえてハ源氏
ももへうさきとし　細大
涯そそもてまかし
天地をうごかし　花　樂書
琴ハ動天地感鬼神ヲ
文選　琴賦云感天地以
致和ヲ
またの物にまさりのけむとに志

につけてならひまねばゞざえといふものゝ
いづれもきはなくおぼえつゝ、我心ちにあく
べきかぎりなく、ならひとらむことはいとかた
けれど、なにかはそのたどりふかき人
の今の世にをさ〳〵なければ、かたはしを
なだらかにまねびえたらむ人、さるかたかど
に心をやりてもありぬべきを、きんなむ
なほわづらはしく、てふれにくき物はありける
この琴はまことにあとのまゝにたづねとり
たるむかしの人は、あめつちをなびかし
おにがみの心をやはらげ、よろづの物の
ねのうちにしたがひて、かなしびふかき物も

琴の音はさてさうひら し 畢 諸器琴ヲ首とす さゝふつや聿にさ ぐひて絹わらやさく このうく 細らわの絃 得ずそでうけりし 衣婆羅門僧正始渡本朝ニ但 元参天皇文武天皇を 琴を引かふところく。ゐらくのらしとかしぬくゑく 琵らわのらしけびり遣と 唐使の時波斯國ゟく のるし。綾合巻によみ有 けくりぬ霜雪をうつし

而文選嘯賦 戌公子安名綽 發徴則隆冬熙蒸騁羽則 嚴霜夏凋動商則秋霖 春降奏角則谷風鳴條 註 翰云熙和也徴夏音 也故冬發此声感陽和之気蒸 至羽冬之音也夏騁此声ニ 感嚴霜至商秋之音也春 秋五月也故秋奏此声感温風鳴條也谷風則春風也商音律至妙感應有如此者 善云列子曰鄭師文学琴於師襄師襄曰子之琴何如師文曰請嘗試之於是 當春而叩商絃以召南呂涼風忽至草木成實及秋而叩角絃以召夾鍾温風 徐廻草木發栄當夏而叩羽絃以召黄鍾霜雪交下川池暴沍及冬而叩 徴絃以激蕤賓陽光熾烈堅氷立散師襄撫心曰微矣子之所操雖師曠之清角鄒衍之吹律 無以加之張湛曰商金音属秋南呂八月律角木音属春夾鍾二月律羽 水音属冬黄鍾十一月律徴火音属夏蕤賓五月律鄭玄礼註注云熙蒸 也聲類云喜熙字

まうこびよろりうやしくそ川しきさりの きしうらさ世よわくこうらしこらよおり うり。世よはらさるしくひかわりりゝら此 らみくひさつらふるをじめつるさまでふく このことを人つさへ八出わくのとしとあるく ぬくふくをぐし。身をゐすゞまなすてごのと とをまのびらんとかぎひてゝまよ声う 言いうくるんありゐるけよろさわきつ りよるくの月旧しをうごうし俯ちすぬ 雪をみくしとらをいらうをきはかし 文選嘯賦よ 霜雪をうつし 賊何變態之無窮ぞ ようわしわらうる世かはわらそらく 文選琴 うらるりらくれしぞのおりよるしひゝら

まべのわらりら三としうけをとをつかうるへ井ぞくのき人乃 かりしくけて衣のごとくにちらいまひとへ川つうきに六月の中の十日のわるよ 雪ふりし奴のごとくにらりてふら。希おわかさま井ゑりさてのまふ苗よ此声らく いわりしきてゑぬゑうこれてあいらくとらふはなわりそうらうこのふこのゝき あまのくわりらそうけてきわきとぐらん。ひゞらぐこみらるかくはいはぞさんわるへとをわや しくかくしきんのぶ人のみらく

びとのきらわくし世のもの恵らんれいやいづこ そだらり のみのうくれうくこをゑしまれくれいあらんさみれど 杼の思余のらしとくあうくさわさをろゐよ 吾世の琵をき燦らんらひ上古也りうでかも及 きらりの思れいわりやらぬくはまぞひて出 孟太りきに宿ひしそうハつりて世は ゆるまち唳 ひつるそなぬとぶひわりけらのらごれきむ

思衿のみらとめ 河灌琴歡匏蓬ヲ縁リ 湘竹叢邑儀不寂寞 把悲絃ヲ暝ヲ離魂恋ヲ良深 靈体思神恋ヲ聽琴永 味礼記曰大礼楽ハ通ニ乎 鬼神ニ

のゝこれをひく人よろしく
そとくらいふ張をつけて
琵琶もろともなりけるまゝそ
くいふるなるしるしをて
此彼よく世のとしくく
きんのねをゑられて
河泉州器之中に琴の徳最
儀々文選嵆叔夜琴賦

わたし二つもし此世のまま
とらへありき　孟子
くゝりよそへてこまし
世の中よひかめる物よなり
ぬべし　琴を執る
とそも親子どうして
かひがめることをられぬ
らまそのかへはすとも

くひとようしんにとらいふかんをつけてさうらう
記すくは、琵琶は地さしくつゝふかう人なし
かいとくろあしうこしとよてそそあれなんの
ねをゑられていかすまでくをり梅をとくの人
志らあるべきとはきんげようげのくとおく
そなうき徳は、やとう、おりゆく世中よひとら
いそくらるけてからそくけらうしこう徳とく
河田雜
此ままよふうひありこと地やことをゑられんく
とは世中よひかめる物よあらぬべしさのうと
るのかうて程にのゐをそりまりしたるなり
のそれとかなりうまさんまんしんひとつよ
身とひきつてきんしやおそうりけりなり

らまつさりらふ
同日本書目　藤佐世撰
琴經一卷　蔡伯喈撰
樂圖四卷　琴操三卷　晉廣陵相
術撰　琴法一卷　琴録一卷
琴德譜五卷　雜琴譜百
廿卷　孙界
のちくは師ともへきんも
なく　異上手にありまふ
るし　同佛智も無師智
とそおり。祖師おも無
師独悟の人あり。何かす
もあらぬれは自得まる
まし
その。たとへんそまさまで
なげくへとあり　源の御孫
のまへらの中よ。思量の
人おりしらこんなれそ

りのすりけらんやけりくのもくべきじろ
つきらくけれるとらいよらりしさうり
みは、世まよあらとあら。よつきつりさう
孟　日本まわたる譜まし
あらふまのうざりをあまよくまわん
とそのらくは師とすべきと人をとく
るん。こゝろまるしひしらいる侭あがうて
上古の人
のへみはおくそべくもあくじゃや。おりして
同源氏の
この後といひていづきゑくもりらる大
いと歎とるんなどのまへぶあねげりはいりしに
とくり
おしくざりりしとけりそ。このここまらたれ
中まや。やうよけひいで絶し絡るぞその
まよるん。そもさすくるうつしへしやすめく

もほのすゞしくへうなぐも
せよゆえんしし
あつしの志いひと此まとく
しく　孟　蔵由隣のうまを
作せらくとやひて覚え
上の海足しうひてし
えへまゆうり　哭吻お女流
の琵を出よよゆつり
あそして又錦上の和琵を源
氏まかりしく
ろうくこおもひ
白僧ろ来　篤娯呂
一段めうしきのあ風よへある
やどらうれるの西るうや
あづくやすしらむあづ
二段之の又井よおうし海
やどしうく
三段あうくしてハ安ぞさ
くんやみへうもとも変
やどらどうしとしく
哭しせうりれ

あしべづくうすしぬてのうきうもぞ
めもすらべき二段今より魂とあらてこし
まふとるどのまへバありしの志へいとやもざ
うしく。激ぐきく覚ぬ。あうり女流の糸く。
さうの流しくとバ。人よゆづうきうてく。
よりつ絡めれバあ何めうを出らくの此まへ
ばありてずらけどら汽流あそびまあうぬるづ
らくあきひ緒くろやうまかあしうしやく
おりくしうて絡れて象らしくへんうてあて
あいぶやうつきめぐくうし月やうしくうあ
ごうまよむの包香りくとやまれくバよ
のしかめくさ哭いあうぶうりのしくバ母流の

ろうしえ　細　篤あもえ巳
し律のうきあらせえ
巽呂らり律よるうとい
まし
ごうの志しく　細　ろケ隊の
おうくべしいろケ調
掻後　阿鬩　水宇强
鍪海波　一唇嚐調
花うりや勇三　春日祭お
三風よらふ琵こどこうの去

流つまよしはゞつしらうまじけよるうし
くらし君のれけをひをけしつうそゆのね
みをくいきどくすえそ覚しつうとこの流て
づうひゆうさら海うりてゆうしうよ此を
しろくきさん。くすらんじでくろうて流ま
でおひざやうつきまむのてろどらあべてき
ちよいじうどあら流しのねるすらくろうこ
あまされあうくべうりてづうらのつききあそ
せどきるうしくら海めききるまさんも
ごのあしくべあまこのてしうまれなどくめ
てざすしくひきまべき。みなもののくらをいて
此しろくもましてひきあふさうしてようき

まちくらべのめでさといふてとおもふつしあそびす。師宣時さんのつくえにしうたう
びす為なく
あふのきらを　細　不知主ノなく。孟　酒肉存二八不占のうちとおりてまくいらでぬ木
しまくし　匿こうも讃て未定なく

みるしばいしくもとこそこうふしむ。去秋よ
うづのまれようしつるもしべうそてびようて
まうしつひのさくまふむちしひとしへ守のえ
まふさ御しやんてで。いてようくまうさやん守へ
おぼど。いくしうしかもしぐてくくちひ　抄　女三の琴とと源の君のひすかす也
ととし絡。この気ぐらのいとう川らくふ　男　七八年の以くより
きらそてどちらまんられたるとどらうくぶり
まそ。わふてなみこうんようしひのあそ　源の御し
ひいるぐいあっそでうけるう明。かてと
ひつうとじめでさきうの涼光の。のびれしよ

ここくぬことらくし
さ　おもと桑つすうしがら
つきと御げしくとぼ物のね
まくこらく。ぞで尋とくく
で衣のふけらと源の
世さるえ並とつくうう
てのまって

なまこどうくわく明どの　うとようしぬなくど　河海のとなえ
さしさま。いつくうけよくりむるさきかぎ
なりやこそて。こうの満。つく気まふうつけさ　男むゐの殿の君し
しまひて衍ぞぬぐぞしくげすふしぶえ　源の衣とあって　細　夕霧の身く
の気まへるるさとりとり物のわそなすぐほ　細　紫上より
なう御むすしらくうしぬさ涌よ気
色だらりあく。まねの気よい。文の涼宴も　孟　女三の宮より夕霧へ
こうづききしそて。文の涼さしもぐくひて
くぐうくづけなまりまふさを御ともわやしも　抄　源のさうぶれての給絶
りの。御みそでやけんものめいし絡いあ。
うれいしきとしかりくのあやよ。文の御い　細　女三の宮より
しもまそて旅木丁のそばよりは紙をとぞする。　源まようせまって

よろしからすまじ絡師女三宮よりまへつかせらるゝ琴あれども玄只は吹絡しゝ夕霧もきかれはあらせまふさるべし

いつれもく　細 源の語は多きことく猶まさりひゞきなり縁ある凡絡蔵人を参備せし分り源の才気をあらはしていふなり

源 しろたへのころもうつきぬたのおともかすかにこなたかなたきゝわたされ　古歌

絡 おもふことすくなくさるべしとおぼえけれ

ちいさきまふ琴どもおほくかきあはせてそ

タ 夕霧は源の横笛をとりてかきならしつる絡はとりて心にしく

れそのものやすつる

面白くあはれにそきこゆるがいとめでたく

源のこと
ここのあれば、いづれもくらべものにならぬをこそ

孟 源の才の絡と
まさな物のつらくいひてのちこのうへまへそぞ

ぞ。我れらの絡あるかぎりはおもしろかれ

たいらあそびつゝあらとれ東まのこそ。月

のすがらはまそでまふとらもしらきくの

孟 夕のこと。霊
上の絡のこゝろ面白かりし
とものゝつらていひしりつれども。こゝよ

細 霊井一層し
くらしひしくゆがりしきのかげかやうしく。

孟 霊上の琴よるて
あさかほのとしへせましひしらじかくわらし。

あな絡はざりし夜にいつれもなりあまひ

みしうへゆかしらまもひきとり絡をぞ。

ゆきし宮のお前あまくへからでさしより

雲井の宿
ひさ絡はず。おのおのをもしずゆひしう渡ら

ゆかずさうさ猶しそくどもあひらむ

をいとまうつきくしあへば。ゆり琴の

霊井のあとし
りすく此の面ば思すがるよそうおもくてを

のおもうらしうら。あひずやうつきそう

上の絡方し
ついしさへお面もぞりのし絡めが。滝のあ

細 雲
いへまうりあひぬ。らんへこときうりあそ。ぶあまよ

絡物ならしいでしまそ。おろつまさぞこうら

ゆかし宮のおきまそてい
孟 霊の夕れおもそく
いうずどし

細 霊上いきゝ宮の
ろんて
御方によらひあるし
孟 霊上の女三の御方より
とまりて晩よ絡さるゝ花

いとうせくろうれうり
ゐ 孟 女三の琴のねハうう
りう ぢうと源の詞也
いそぢうんうくうしくるすとすく
とりへ 私 他事ろうき
らし 師ゝ 他事なく
源の詞へまうへまハいそで
女三の琴とのこうするゐ
ろおまゝさぞとし
いとまじらまぎうれを
細 しうれくふもむうり
くて琴をぞおもへ
つぶつとし

まゐる。哢 源氏と命婦と 田らうかゝまで地代よのごとくれ
細 源の詞 見えのけしとのぬハいかどらうを くなりよ
きう女のいかぐさて給しとさて まへバだ 哢 紫
此の段 しめつくとわすさみくねのこくしいう
ゐそやむりしをいとこうまくわうれ出
思いかぐはうくしくるしすく。とへうて
え給うんよつとつへさてく給。さうしてと 細 源の詞也 哢きお
命婦し とうくかゞつるなうくぬよりの脚たうう
しられわとうきくまづうりて、
いとよつわざるれバとしくすゝぬと 朱雀也
今上也 みもうみも。さんいさりとまでくい

一段よ川ろね 細 若上初
かの時のくそその時ら
く源もひまなうし
く
ここあうえねれつとの
ねの 源のきしてあ給
くぶうかれと筆跡こと
なり

ゆゝ由んとのさいかのさうくがのて曲しくい
さうきさくらうのへし代ぐまりくとり
わきそれうちうみし。おづけまつるさう
しき給と。おひとうしてうんなしゆ力て給
つかぐかをも。昔しかぬ朋じをよ。おつひ忍
ひしき夜その世よハいかしけうともありぞさ
くそんのむづうよりわきこをし へうそゐう
こともじをるくちりく世みも。おかひいさか
くつうぶくせさうれつてもそくじして。こうさを
つらぬ衣のね ろいつぐく〳〵しすう
ちとめんがくまそて。たねのいうくうくふ
こ。地ぐゐきこうりしそ〳〵紀も。ちふやうに。
これしくてそありしうみぢくうそてまみ。

かやうのさだめもいまは
みゆるしく
紫上ハ楽ありしところをま
らうじて万よりまゐるまく
る事と云々

いとくさめたる 細
うれしき何を果し
女人ハ職をさまるせ

今年ハ卅七つまで
細 女も卅七重厄之 薄
雲ハ女院も卅七にて崩
[illegible]

かやうのさだめもいまはいふかひなくおぼえて
えならぬはかなきひゞきもつひにかはらてし
給ふ御ものおもひをしすくしてまゐる
ごとよりけるものとおもひくらしこゝろ
さとかなしきさまことなる人のけはひ給ふ
あはれいとくるしきものかな人ハよもひさし
くぬ女めしもあるまじとゆくゆく給ふ お源の心中之
をきわめ給ひてよろつあつかひ 紫の方のことを
でそのまゝたゞかりける人のなき給
まてとはまさるまじきひたひつとも
とひきさしまうし八十七にて給ふ 孟 紫の重厄之
源の心之
こまりうかひし年月のきさもこそ衣にも

上ハ源よりもかう[illegible]れ妹
とみえたり。然ば源ハ
五十七之紫上ハ四十歳
ごさと紫式アらふや
うかりてうくきちる
るべし

匂兵部卿 細 小山の匂部卿と
紫上のとらし匂部卿入
滅の子と家に伝てみて
とら

えずうハせさるすくらり
細 源のえずうのる義
よりのてみへて肉傾
まて生長せしく

ひかりかくれ給ひにし後かの御かげにたちつぎ給ふべき 源のかくれ給ひし後
人そこらの御すゑ〳〵にありがたかりけり むかしのかげになりて
そのおなじおとゞにておひいでたまひ 孟 源の御すゑ〳〵
らぬとしをめんとうつけるめで
うちのみかどにしもりとおとゞの 細 三の宮之
づくをとりせてん匂兵部卿のみこ宮ハ
もかりよるこそいとにおしなめならぬ
さみくらうものまへみも。いとうつくしうこら
しんとうどのおいでずなうハおもさなく 呢 源氏の話
まへようかしたう給ふしてこうらへ
くせひのぞくいまの世乃若く三位中将
きこえくひたるかへんまうかうされどおも

しめやかにくれぐれあしこあさころうしことひ 孟桐壺帝内文玄
しみはせられうつしや門ハ地のよ人のよ
葵上ゑんをよそれまゐらせ
さ顔ぐらぞくれのそうとゆれるとさひ乃
もえたいとものをそうれしととつり物かく
わがうこうくさまじきいとよつけてとし
あやおく物地ともうしくらよわるるで地ぞわや
ここそひろ弟子そても知ぬれハそれより
久てや、むひし縁よりハいまでもあがうろ 細 若紫上之孟…
わらるしんとあんむひ志つけゝえの
細 源氏の別のこと
はかのひかりの別よりおもふこと地
むひしくふどこ縁ぞうのくしわくど
しらん地ぞみぎされしとひひおりしてされよ

それはえつくや 細 福縁
あをと御へしん雅し
しくお想つさ同とま
たあひめるゝ、えてやん
おひしらもいのちな
ぐきしのうを

きさわとひおりてされ
しりなし 孟 …
のよすもえてはへかる
それくよ得て不如きくる
あかすわりとくお名を
あどめて嫉妬のうさの
地むひわさへ人ハすし道
みやのまじのくらあぐしを
ぐしくてやうさえ
細 源のこのやうかうへく
家をとりてて又づて
そのうさハ人よまぐれ
細うやうの弟としお嫉
妬のきるハ物をむとかせ
ねさうの源の自縁も

たえうしのくへるれハ
お源ハ源ぐらんぶくとく
そよれども業の源かの
上のうけられバなきざり

まつぎくいなんじくわきさんへしりつどころ
うるすしやらもとりしぬ、みのむひをふなかざ
なりぐらさもじらひよつけてよふさぶれ
人よわしきふむひのるのぬとやもけるさ
と地やの中ぞのくらるすぞいとぐしまへ家
やうおほうるやとをさしいゑす。そのくこえ
人よおぞくれさりもそくそとはせぞい
あゆやむひの目かよこのそめ乃うくまうら 細 女三宮之
抱しまるしてハかて海がくさうらくぞわれども
よつけてハいふかわかこうろうづうの竹し
と法とうつしのうへるれい地がしおしおもや
あれんすのくらともくまり縁めればなされ

みつからされんなれど
もし兆のいつよそくわらき
まへまふ紫上よすれどさ
のようも此がしあらん也

こゝろのいのりなりなり
おほよ源の物ぞふるするか
わきまえてもこともあろう
らくろうとのまゝよ付
てさやうよ終ぬ哥歌へ
しさハ紫の上めわう
このまでゑ

されくも此の句
細さまをうへて心やもて
くいれことくし師式紫上
の御家をゆるしつる人也
それやしをわうまじさ
るすまるん　孟しとえ
玄宝之紫のお家のい
ろのるし

とくとしとろん出りつゝ此のしまくゞのくゝ此まふや　細紫上の御こと　孟人の句
うりよ物えうろうてさ身よハすさうふてつぶまぞ　よハらくや此らここをられと自の上をそハいりわらも物とふるとし
の世わしいおしめしと。いづくぬ御らうけう
しさのとくらそのや。さはさうづくの経を　細されらとし
かならうとて。のこり世わげうらけくひらめ　おまどふ御あるさ事し
うしけるうかわめやうふは。いとゆくさかなく　玄宝ふとも紫上の御こと
るよこてらすりを。とらしもらく心てぞ　細此そあらり
おうそすぐをはいとうきろめくまて。さ
きゞをこさうせちらしいうそてれゆるしあく　細源の御こと
でいろそ。姪それいしも。おうまじきうと
まるんさそうけるられまるんしよのうり
しいるはのひうめんじうくなずはれ

くてむつうとう月やあれどおけられの
ぞてにうれしきのことそせさせてし
うき覚あれるわざなむ代をふさ給ふしとおうらうろの
阴しなどをうそてのぬのそ此すしまわ後例の　お紫の事
くしもやまりくそ御ふくとまゐるそしれと　くせを捨る事を源の用心ある事なりけるされし
源のこ
いとおられとことなりのあひてしらでは世
まぞらつ絶此わくはあられど人のき　孟是もらへの上を源の作判也
指のよりそくよくちおしくはあうぬどこ
とらゆしまうれ。此くとのんぞを此ひうう
まおらぬさうしそ。いとりうきこわざたすり
告れとろん世ふてみてろ。ろ身のもてさむ　細藝是之　服の衣ようらへるひしと
とかさるかうしわどよこそめて。やんでし

眼わくなわる也と
細これられえまふ内書
玄人の玄既たらん用の
くハめれなる〻

へわがおやまち　細　子細
のあやまちの子細と下
はいひの巻にして　師　葵
上のあやまちんふりて
うち顔路はぞうしれは
あまりうらがひとよ

よりしくえろはいまろう
つしく　孟　丈破のかりは
ていおもしき葵の心と
く師よのりし紀方氏
てうぬといふども又
るめのまぞうりうら
しく〳〵

かくさしぬもそこらはいとひしと。つゐはうら　細　後悔之　師　葵
と源氏不和なりしをし
ようしもそつゞそあつらしてやとみして
そ。今さへいとおしくうやそゝくまあれ。又
わがあやまちのことをあしくぞうかゞみて。
心ひと〳〵はちんともいづうくうてく。とま
思うまそそのかしもあなぬくへし。世がゆう
しとをもちうたこえいとあまりうくられる
あつくもちくもちくもちりしとやりぐへ
うらみんとおふかはそのりしくうちを
づくりうろく人ぞ海はある人。申すぞ人れ
のは息所し
そくさやもを所なんさ梅しくまくはやくうすま
ところ〳〵
めりしうゆめしこめしはひつくびんぞいひぞしられ

どく人にさらりしきにはまうへ
ありしうひんくまぞ　細　限の床に臥し
と思ゆるかしとやうくるてくゆすひつ
めく。らく多人をられしこそ。いとくる
しうりしうらころゆうびるすくえうつく
てられも人もうらし〳〵綱々のむつび
よりへらんはそいとつてまし所のあやし
くば并とけていと紬とさうてしゝやあじお
まうつくろひ限とはやうそてつぞうらし
中ぞりしくとあるまじき紀名をそうつく。
このあはく。まくなれぬるかげさとて
じをおひあまへしが。いとしかしくけるに

しわんくきうそけは
しとりうしと此がせらわり
よ　おぼしと思ふ根あぐる
あまりゆうもとめりく
とひつゝあり性そと
くばおよ物のけるを
みも生すらう人し
そろゆうびす　とかし
くて　おもののゆゐんを
るてぞうりうらしんて
芝数人すてようてとび
つり

中宮をとくまうてさせ給ふ
ぞうとハいひかゝるへ
細 紫女御中宮の御後見と
の御契りハ宮の事なるを
そこそあるらめとハ
いひなうて宿習とられ
てゝ源のまゝの世まゐ
るゝ
ことをきこれめてん
細 好世よりそある也 弄
べきしたり

内の心ざしを 細 明石上の
すゝめしも也
人とぞひ給ふひ乃
御はかゝるゝ人と源
のありまゝ

人がらもよろしくおはしまして
て御心みづからはまは中宮をとくさう
べきれもかくいひなりしかりそ
く世のそうらへのうしろやすさなれ
心よせなるどもの世なりしも見れとき
れめてんいまもしうとおさなき
つまり
心のすゝひはいとおしくやしさとも
思ひあるんとしきこの人の御方へとさう
でのまひそて内のれうこの御方のは
すゝむらの宿すべしとあるかるゝ
てとやとさ神にとひたる後心のそこそ
まうさいけかくなみなのにもゝ人
いへなるびさむいしゝよしあながちなら

とけぬ気色ちてまかりてなこんら
とさくもづしき所ものあれとの後へば
孟 紫上也
こと人へるいへさしぬをこれはすはる
らぬどものづしき気色をかりくを
あるはいとしけよらく心をづしき
まろ宿をさとよりとしへみさらし
弄 紫上
さ紙いるまこあとやんとつゝおしけれども女
上の明石女御を若宮子とい心さくら
はいとのづしき御かゆかすしんとのことにひて
細 源の心と
うんとのほふさどうあめご後しとゝ心まさるお
紫上の明石上をさしてハおはことなん
つゝしへを思はうくゆりしてそしうそう
明石女御で此宮入子に御かとを申へとと
あそし給も女れのはてあののかは心うるあるう

ゟ御あさまへおほぬ物から
思案むのくまとはかられ
ぬ所おほくらぶつくりかく
れなき所あまにはおほぬ
物から二葉にまえおもて
さるやうにらうたき給ぬと

紫上のことを　細 此段の
女楽に琴をよく引給
ひとへにをしへとあり
女三の宮へ源の手より
かよふなり

いまはいと御ゆるして
細 源の詞 女三へ此段あり

ぞうしと見たまへしにいとあらたにこそ見えれ 細 源の
元君とは葉をさして源のの給ふ詞也
そいはらすぢにはおもひあつかひはべりぬ 細 それ
らん今はよろしき[illegible]
[illegible]

[illegible]

のきハつれなうさは　細　第に
紫上をもおもひすてんとて
の給ふなり
人の御心ハまつ　細　世の例
ハ二条院の紫上の御事也
れたり
源ひきとるやうまで　先立
条院御あとの御事を
いさゝかなる御人のこゝろを
みをしまつして紫の御こゝろ
源氏うらみごとなどかきつゞけて世人と
女源の女三の宮に御心をうつ
す故紫上とも

源もあらそて
源氏いまだなれぬ紀とよそには
あるよりハ男まへあらそ
て共すわ女の御(小町集)
女源の御きより　師の説
女源より紫上へ源氏をく
そこ　しれども紫上より源
りおちしりあらし　共源も
紫の御源氏を知まつらり
しるべし
源ひきさてそうさより
女源のなどもそこそ源の
源氏へ紫上の御なや
このうちを告申まるそ

みくせもありける男なかりし人の御ひゃく
あかぬしとはすら物思ひかられぬ男こそ
やはなるんともらん御らきらすくもあらぬ
おしもひつゞけてはしものことは（お連々脳中に思ひの色を心にかれ）
まめなるあらさるうちはしもひとつやこそ
あふんぞそあまりあるんひく源もうそこそ（これ　紫上の女房なり）
にうしうそんとさつあるとひとも(お紫上の月みさこ書物)ゝんるひ
嘆し（孟女二ましもせりて）せいしなものひとく人のうさえさ
つくあつし給つ御男もめうこそ源もあら
といひともされども御もとゝのようら（お源ハまつ御ことなくされてと）
給ひぬ御ひとらるんともなかまで女源の（明石女御と）
源うしよりうせうそこしありのよりしたやま（紫上へ　紫上よりもあし）

しくてもんとものしずつるは。物ごろうさて。（紫上より源氏へ御返く）
そうなようゆめしまるるまもひつかれく。（お源の心中と）
いそうきとうりまつるよ。いとくらしげまそお（紫上の心中と）
つすいりうれうらぞそしてさくらそすり（源の紫上へ向まての事と）
またいいしへのつくおりそすれべきのよ世のなしまひ
しまつしもののもちなるとぎもかしあつきを給（細　卅七歳のこと）
ていとかそろしく物おぼさるゝもるなことおぼ（細　源のこと）
さるまつらきそうれとはらんしもいれども
日一日そひおりてしろうげまうちまり
まけき給。をさうなきれうて物をそさるよいと（お　是ハ紫上の御かたより事と）
物くしあひかく。物さこあそう給つらしうて
て日暮へぬ。いらなさんと物わりしきことぞ。

よりしてえれと
曉比丘尼ハとりつくして、
又由をたえせ

れいのうどもうぞきしぐてぐじめさせ給ふ。曉ちゝ
そいりしてれうぢあどもさすゝお。もさしうろ承事とて
とゝうとゆすいつうしくらひゝしく志
さまひくむをいぢしきらうつゝまらうひ
須を御さんへうくくうしけるうぢ御くの
けつゑうくうちりるけ通ど志うしをそむ。
よりしとゑれどそあづしをこそうけぢあ
あしらバよのりしらばいつうしくこうらあそ
ゑうりしとゝそすうよまうくこう此いれ 細女三宮の志給ふ由なる 他寺の比丘尼としし
いれ相人のひゝてもおもいげまうねうの院う 細弟産宮之
をうくまうらひ給うしゝそうしめしてれと
めしひいとわんぢしろよまひくきもし給。

すく此寿しるげさそ。ふそまよ所さ久ゝ中御 お六宮
くんとうそ。二条院よりこうしなまりもひつ院
のうらゆすりうらそ。やひいするげくんくき 院中之
ういの泉院もそうしめしなすげくこの人
と世給そぞ。院をりえすしぐず世をそそむ 源氏之
いれいりとげまうひてんと。あぬきゑるなどもん
つくしてまそうすりあけうひまふ御ぜ目う
あらはせあくこのまでハさうりりのまでとう 紫上の事也
わきそてつりふまうきを給。いつてうりのお 細君の事也 此人の為の
わりらくひまれえん。きうこあうこくをうらひん
いとまのうそ うくとのまうしとえ。ゐうそてまへしと。ゐうぞうり 細源のゝゝ之

ゐとを久ゐうんとそ
お局人お申久てうう
むら例お葉上よあう
上东門院のまうく
この人ゝ世ゝに
お紫上ゝ世まうぐ源
も世をも背きさすよべし
とそ給く夕霧なぞ
まんそうくしもうそ
いれお行うふうそん此おるう
のとハさうりのまでとうり
まうとそ　お梅例源の
とこまうひまよ御修匠と
をえ相又夕霧も元
まうさ別よしまそ
ゐゑうりあうてわうれもそ
まそんゆうを

盃一向あつさ別ハ弓箸
ちさきるし琳主まそれ
うちとやりしまふを
一人ふたりさるハ六つくし
くく

さつさ酒よくらるもそ結
ろんとや　須もさる六
出来の盃のおりしに紫
上のさいきうあうんず
をさうさ盃ふと以より
冬よいとしそのそうけるよ
らうわりくくざりの
おあよう十りおんく
わくれそそとあつしにそ
へらく冬ふとし入り
ゆうしまもすさおぢしそ

ありてげんれいて結ぶんうりよ。めのまへ
よ。銭んとやりしすて結ぶん凶あ捨とそ
てハさうしようさ肉とふまじくのとおしく
御しるくへくれで、昔ようろつくしそうく
おほいふうさと。とあまりてさうくしく
おかされんうろぐうしさよひかれつとを
くほを。ざうさ酒よいうるもそ酒さへと
やせかもとのと、おしそしてあうよは
いとよのそうげよふりつく眼のさ酒よ
そ、いうまふおりくせれくろと。いうき酒よ
きんとせりもすじひつ、文の清あふおり
さ酒じくそしされひのさこあくしれ酒のくらり

うくみもおそしまさて
紫上須く、お女清のるす
く細ニ傳姓也

せんぐハうれおかくぞうり。二条院よつどひ
ありてこの院よハ大をけちうるやうまそ
うじ女ども我かりして人ハひとりのほけむひ
紫冬りとろ。女房の君をまとすりあひて、と
ろとをまさすりおかひ結そで、小もおく
しまもてすのくけるどいとおそろしさ
とえやく来りあれとらうし我ほうち
小もそうてしあふうう文のいとう州しう
ておかうしまそすと。てまりおそてもいうどしく
さまひて地ゆるひ結ぶんと。えをぢしくれ
紫ありてし、げ、れ結ぶんりしとの面ハ

ゆく〳〵　細人々のこと

よろこびひろさ
細紫上の娘かたんをとき
てとりひかかりし給へ
ば小取小得福大
取大得福　孝経注 至徳要道篇
せうさんかりの人は
局量せうさく人はたとひ
富貴にして一旦なる貴の
人と生れても多寛ならぬ
らぬ後やうなるゝる
しくく

明石女御之
語お盃円

ばかりおきさあんへぞりなるしとかわしらうゆく
しくりくおお前かしそさうともなしうかをも
のし給ひむよよりるんへかとかくをも
あるよろそひろきう川かりのみはさいんい
をそれはあくこうひきばきんあの人へえさう
べきこそしろきみをとなりて　あゆきうゑ
ゆうへばみかさへをとくれあきなちひさらひさ
しくつるひるいろいぞ心ぬうゝくみてうしうる
あ人はなうるきしあしあやんゆかうりなゐる
ど紅梅かもこのみかすかんをのをさづらく
つきうるくき御なをりあまそうしめさせ給ふ
きまわりのあきりしらかしゆるなじぞしらも

ちくきかしかうどうりのやんごとなきことに傍る
どいひとくるゆかりしあまり人おゆにげうひとさき
くまいうとういそじくみぐるしうれいつかをにと
しもていのりきこゆ　またきくしまえこき御なまゑ
えしまふとき又六月に　まさどかうべくゆき又くよりかりも
づくひ給ひしいつしとあすりて月日を人まへ
あをいつまおかりをさべきさまよりよりうまでしきこれ
からりやせ絶わしたげくれのりのけつるをしく
いとくいそうりうのしみかやうきまふき御そ
こもみとうえてそなそげうてにまかそへてよりう
まふさ御よのきみあれはいつくよくかれし
くいさしく増わるまもれころのいさ御も

ちかし　ありし日に御かさ
えかよ時又六月おほせて
紫上の病悩又六月よろ
しくてはまた重くなり
まふとこ盃宮へあらさ
せ給ひし

まことや衛門の督ハ

細 此所下柏木の事をいへり 此所より末幾年をへて書也

今の世にハいとしたしく

師 柏木の今上の御方のおほえいとしたしくめでたき時の人なり

まことや衛門督ハ中納言になりにきかし。いまの御世にハいとしたしくおぼされて。いと時の人なり。身のおぼえまさるにつけても。思ふことのかなはぬうれはしさをおもひわびて。此宮の御あねの二の宮をなんえたてまつりてける。下らうの更衣ばらにおはしましければ。心やすげなるすこしまじりておもへり。人がらもなべての人に思ひなずらふれば。けはひこよなくおはすれど。もとよりしみにしかたこそなほふかゝりけれ。なぐさめがたき姨捨にて。人めにとがめらるまじきばかりにもてなしきこえ給へり。

細 時よおほえの人也

弄 女三宮の御事也

孟 女三の御姉落葉の宮也

細 更衣腹をいふ

落葉宮の御事也

孟 女三の御事也

女三の宮をいふ 女二宮も慰ぬと也

女二宮をいふ

たゞ しきなみのやうに 河 我心有

なほかの下の心わすられず。小侍従といふかたらひ人ハ。宮の御侍従のめのとのむすめなりけり。そのめのとのあねぞ。かの督の君の御めのとなりければ。はやくよりけぢかくきゝたてまつりて。まだ宮おさなくおはしましゝ時より。いときよらになんおはします。みかどのかしづきたてまつりたまふさまなど。きゝおきたてまつりて。かゝる思ひもつきそめたるなりけり。かくて院もはなれおはしますほど。人めすくなくしめやかならんをおしはかりて。小侍従をむかへとりつゝ。いみじうかたらふ。

女三宮の御乳母小侍従ハ此人のむすめ

小侍従のめのとの姉ハ柏木の御乳母也

六条院ハ紫の上の御なやみにより

細 柏木の詞

院のうへなとは　細 柏木詞
なり女三宮の御ことを
人のよしとく深いたく
に諸事すくれたる人にな
されたるやうにそてまし
まゐらせば後悔しあふさる

私案しくいでゝ人の
まへに女三の御後見と云
は源氏のやうなる人こそ候
ある人を撰ひてまゐらん
御事也

まじくおぼゆるをさるべきにや、しきりにうかゞひまうす（女三の御方をとうかゞふ）
おりて、ほのかにさへ見たてまつりて、年ごろの（柏木の心は）
猶ともさらしめさせて心のうちもしらずまさ（嫉妬の心）（女三人の）
らまほしくなりけるは、かゝらくてなんつ（花山院なと朱雀院の御やうに）
らふ院の上はさのみしられたる御ありさまにて（紫上なとをたれかれとこそ）
ぞて人はたれかれとやうすて、ひとり出かなく（女三の）
とのこりはれくおぼえつれづれともなく
しのびかねどひとのそうしきろつぞよ（朱雀の後悔）
をもよくやひかりしまれぬしさまてか
すぐくはずにまの心やまひうもろきとさ
ぶんにかまゐやうまつりきまくこさひ
しとこそきじべりれとのちをぞ
女二の宮の御かたこそ柏木の北のかたにて（女二の宮の御方は柏木の上也）ちらやとくいりとおぼえり
さう侍しそのしのぶかりことゝの給へ（嫉 右大将殿のことし）
とろうとつくらくさ左まいとおしう。只今（いかゝりなひたるかきとし）
しうもいかくいひかそろうしけよ此君の御も（異本 女三の御兄弟にて女二）
と返へ（されども女二ハ女一く異なるとも）
どもしまれ此ゆかしいりどもそれいそれとこそ
けぞゆるやうにおかれとうらめさりの人は
小侍従くいでゝあるみなかわけるみそれとそれ（小侍従付）（されてハ小侍従の詞）（孟 義案とあるまじくせ）
とさうしきこゝにすりけそて又かやうにおぼゆり
かくこれこゝろなしんと見んどろかう（愚案 柏木の詞とあらきこそ世ハおやみ人とあれとのこゝろ）（柏木の心）
てさうしそいりのいまこ覧れとかよりうけるみ
くさうしてさせとしびれうそ御ん（細 柏木詞）院みも
今上之
御みもさうしめしたりなりぞそてりいさてまさ

それはそれとしても
おほかたご兄弟とも此を
されども帝列のやうなる
みなくし細かりもを
さうさずいさまれぶるとも

ありさうしけりてかへて
お女三の御うしろこのぞ
うしるにハ朱雀も今上
もおうつめしうらくし
なさそていさてもさて
いぶらまし　孟 女三宮を

柏木にもゆかり給ひん
やうにおもしとこ之おもさも
あるべきことと仰られ
しとこ之
いづやうでもとこしの
細花鳥須め字楽雀今
少し嫌悪あるは親
子り許らるへきおもとこ之

此その事とかく
花 柏木の右衛門督中納
言に任ぜず中納言は三位の宰相
位の相当之三位の袍
浅紫也とぞ之
今はうしろめたきことヽは
あしじや 師抱ともい
いせねさるまは給はりて
さらげれどもはよし
しやりしだれのかけ

かうはざらましとおんじよのつゝくおもての
給ひをけりそやうづらまするものはいさえん
アこあるまじくかるさにんだいひとりさ給ひしと 細 小侍従の詞
あまりやれどもくさとりいふことも給なるとをも 此源おもしと根本おもてとこ之
ものくらの洩のこゝまいそぐわんじわれは記 細源之源の念はま字をとゆきこ之
こし給はさらるしひさ海さげるところさ
どあるべきこれ方の御わしもや御見されしご 柏木とこうていふこ
細中納言に昇進あるを之
のどかにてずこしりのくしく、たそのかみ
をかくたりまへれどいへどいつかひなく 細 小侍従の事也
ありかるらつらはさまえいひとて給は
でいまはうしすぎおしりことヽはずもしじやさ 細柏木の詞之
じらくゆるがふさりのひまよはげちうさ給ひ 源氏二条院よおはしけるにや

しそこの御れいしらよおもしのこゝしはさてし 言葉の詞
女三ノ宮上をまうまうまうれとも
こゝしさとめくくらうじんはうりうへいでゆかわけ 女三宮近
付ろうんれは山ひまされてもよし我右衛門督をとゝへまえとも
なすきんはとるべてよしうきまんいひとゆそら
しかれはぞひさるれて給ひそのまへはで
れらのゆかりけるさるはいでいあはんは
細 小侍従の詞
とむらいはさこしくどもゆかりしうりけ
ゝるおかしよ見りつらんとどうふくいでそ 細柏木
女三の宮をまうまうまうれとも給ひしとこし
の詞也
あるさてふく・おまりこちらさつりのそこを 御とくしこし
いひるしまおくされ世くいとさめかたきを
のと。女は后こそあるやうありてのおかしあ
さでひさまへは世にしてそのためありさ海よ。 細 女三宮之
ゆすへはいとかくめでたけれども 皇女こそ六条院の帝宝なれば之

ちらかく
ひもろこ之 絃合 撥柳 にて
御今の世俗まえらはりて
ひもろとは數く
らうさく 式部 こらあく
むころあるとよ云ふて
帝后とおりやうありて
細 二条后あぐの例る
あべし 是等 女后后
もゆかりのあるひありて
人よ逢まふすくひもる
さりかしこ之

ぎこしとひとしりしなるさ
いのれうさぐえり
細 めんしよだの同事よ
まへひてうしきこえ

しらいかやおしうなりけるもあやしき心の 細 柴蓮之 細 思ふよどされますつり
おぼさるれ中に文などびるさうなな おかみさの姫宮の御中よし
らりきこえなひしまそしをひとしりく
ぬさはのれうぐよさらまじてめざさ
ましげなることともめぐくこそいとらく おこすべうく
我宮をして うて仰りや世の中いらしつるさき物などひて 細 心ひさず語
きたはよそひさごめくえしえるくつきごとの 細 小侍従り詞
そとし 孟 つきぐりうるかやうな物なひそとこと
ありうこしくれの語そのまへいかへ御ゆく
女三の されまへるれあ語として めそしききりきよあり
もあまへきしやい仰しんされはよのつれてれ
まる語にも仰しきめりさざれうちろくる
くてじくしうしくかけしきこえんりいっ

めそうくこぎへけり
細 とさ文いひける方より
あびきまへべきさすよ
てもうしとて
られしのつゐの 忠案云
女三の宮の案政にかりけるを
すいおる宮の其病まいわ 細 ...
とそしめりりの系
うば宮雅意のうさい若し
りしぶろとて
あいなきにとしめごと
いそれぬ柏木のとくし
めるりとておのさしも
ひとしりぬさいの汁
うくよさらまじ
めさまいけるなりも
ありめくくしそとえ
ると服さりし
あやしきあれすさ
暁 早下云ろくなり
御同 所境あれさる読
あぐりふんそ早下の
詞也

ゆやご御みこゆづりきこえてあひしらひぐ お女三と源との方ずひまさへまうか語あらそしとこ
りさこはさこして 思ひりしうこてさせ語
うあれあはれなるにとしめぐしきわらん
とぞそくえつらじよらうげよらひこ 孟 小侍従服之
しらへてまゝといさばかりにまうさ 細 柏木の詞之 細 柏木之 孟 源の世すまぐひるさき
語とこをすりるれあるれうしよくとぞみもあ れめさうりうとく 女三乃こ 柏木の我身のこと
らぞおやしきるれもそこどそらとけ
てれらんそしれんとはさうしよなすひけ
ぬこしかりさひとこしりのつしみく
おしなりをぞうさんおなよつうの代身のや
つれよりいあらん神北みもとすやもといつき
あるわぐりはとじいえしきちりてとしつ 女三よ言ひ いんまうりとりしとの空

なまぐトりの 柏木の君
ぐしよ物しらんなと
空きふしそさまその女
三の病みもろしとと

まさしくね　細小侍従
也。ものしらぬきこえ自他あ
しきことの如来あら
し

いろ〳〵おもひとゞまりぬ
是小侍従がんらしゆゑ
ひかる性女宮のさみあ
しき　すなり、ゑいと
しるしひまかし
是しるさひてゆくに
はしらふ狗と出す

の給へば、こじゝうしこそいとあやしきことに
いひしかれば、身のほどしらぬ人は人の
うへ身よりもいふかしくおもひのほかとかえい
きゝもてぐりのがりぬべきひまあらばさ
ばかり給へん。源氏の御かはりもはなれぬ夜はこ様の
光くりよ人の御わたくしにてひて、おほしのぞ
ともまちくらしつゝ、すぐしんならひあへ
ばかりありをさうらはひまもえけ給へう
らんとおもひつゝまちぬいつまでとひに
をあらんとしてさらにさぶらうひ
つけてとゞこほしとこそすゝめつゝひ
みなしらしわやつれものひとかりしね、

ありしくおほくおひとさ
み　女三の宮御ぬて宮す
みどもの人まで、柏木の
おひらしめさし、思あまり
ありしもそとがよ実よ思ひ
ありしとのまそではあれど
只一こと申よりものの
みぞしりなれば、ゆくゆく
てはありていよく思ふの
ましかつきすこ思ひられ
と、人のきぬぬさとぶから
あるよは宮物の一念よあそ
ぶらまちてあるど志うくざ
れは柏木がとくまどぬれ
つくしたとおれし後よ身と
いたづらよなりつるよ職よ
おろかなるど也と志りて
世のあまに遠き人の戒とすれや
こそかくあらしとて
細　御の内親王の御後
こゝより孟　賀茂の御
使へ人とつかへまつる

まことにわりなきものにおもひしみけれど
こゝろなればけぢかくちかゝくおもひさそふ
こともまうべきことゝおもひなればひとよ
ちぞ、さきいふ日のくれぞのつまへら
どうぞまうしくろのゆふべのおほ
ぞよしくりなどおもひいでられけるあり
さ夜とぞつけらくてこそすゝこ
こゝどとてあしくせていひとくぞこの
御心あやまりやことおもひかれしや此
しかるとぞおもひけ。四月十よ日のころ
のみそかりこそござおもそとて御禊よそ
まいりける女房十二人は、とよおくらつかへ

師 此説然とも見え侍らず 女三の宮を[illegible]
上らうはからぬ 細 ようハ下つかたの人なれバことはりもなくけにけにかはりぬ 晄 柏木ハおもにかくて
そうまうなり
人にすぐれたる心ありけるを
て かやうなる人にすけける
ぬれぬ。主人の為なるをと
まり、男ハ女御達なれども
不至のすくまじわるべし
さかしめにせんをやむ
あざらの君 晄 女三宮の方
よろづくまかりけるを女房
なり
源中納言 細 おぼろの君の
かすひ人なり。師 此説も
あるべし

細 物語の評にて柏木
[illegible]こうして有紙[illegible]

ゆめしりはいづくとかある
睨寝而ちぎりしと見え
たり。同床のむすびとは
天思義の不及[illegible]見養衣
あちらくと思ひねしとたゝ
を 柏木女三の宮かりなる
なるまじる[illegible]

あくぬ。げに人よりさへあるまし。そのうつゝをと
のみひけさうなるし。つりのみんとおひ
ありくらしも。とかくまいりて宮をかけて（女三の宮おる人をくるし）
ほ常のつとめやうにて人にけはひぬ おり
なりかりはかろがろしくあざらのなきことを
時ぞうまふ源中納言をとめてしひいでこさ世なれ
ど。かりうちゆかしたるこの御はぐらゝ（おぼろ中納言のもとに[illegible]）（小侍従に）
くいうかふおもりそへしきかりと思ひ（小侍従）
てやすきものいみかたゝがへのおもし（女二宮の方）
のちはすゑにさまそとあるべきこと（柏木を）
なりやハうのハするおて わりなくゆかしとの（女三の宮）
こまりよめぬとりくのけしきひのと（柏木のことし）
れバ[illegible]の御みもすこしとかりてしまよりつ（女三の宮の御[illegible]）
しきまさうなりさきて。ゆくの君りよ
いさゝかつしてまづりいりのほどそえ（女三の宮）
おしうをあてくあけむれバおもね（院の御）
人なりかり。おやたてとたしねしとも（そこ院よりの御）
とそ[illegible]ゆりや。あさましくもつけくな（女三の宮の御事）
すくくへめせとらくをさまりての[illegible]
つけて見かりあし。ともすこしさむ[illegible]（おられうり女三宮の御事）
のやうよおせもあすれく御こえて給
いねそうさいとあきくはならくうけなり。
ぞとすねど。いとかうたと見えしめさうへ（細 柏木の御事）

みかけしこそこの位しを
ある不相應のつけたる
ならひけるそかりし
こ
ひきかゝるよこめそ宮は位に
なをしたハ　あ出て一向に
思ひ果てゝハて　宮
おぼさるゝ

身の数ならぬひとさまは
人より　柏木の若代深き
及びかたへは深くかるゝぬ
うき志をむかしく
うるかと

ひまつかたんおもひて
あかうかさうえと
つきさく

くるしさハなをかハらねど首しもあげ
られぬの心ちをひさしうなりて宮
侍なましかどものゝうちそへて見ね
へり出たまはせんにこそ　抄御柏木
のかた菩薩になりまされるを
みをもこゝろしめされけりあらまじきまで
院
八幡へ詣さりしよし
身のほどものなのをさりなるまめをとりけ
それたりて身のほどもなしぬひとはま人
細 名を動すこと
しりよりきこんそしとひをすくれし給わら
まくらぐしこし給みしかる人をかり宮仕
うちへうきしくおりしかまへんを　いはづら
河深着　日本紀
しきぐりよけりかなそ月あきてく
うめくしおつくしげくつけてあかくれは
もいかくよおくなりかまへかくゝろにおそきこと
料しむ
うきてしく思ひかけるまさ御とはらんどゝ
なかゝもらいはひてありひかりすくもの
細 宮の事なをたつきまほしき
うしうれたつきよりまさんにとかくのま給ら
逢 女三宮之御 柏木と思召之
おもしとびりそゆくよこの人ありける
と思ふきよいてめづ御しくならむ
抄 柏木の女三宮をさなくおもひさかひ給し
くそつちいくとしく御めでといふこと　柏木の心
ほまされどとまりてあつまさしらむは給
らぬとめつしくはるさけ河きこほんでく
あのうそいひこうえくくてあひとかり
しあそ
なかうつりてそつき給れ義をまた
細 この事を思ひ
のこまつをはぞれをうけ給りてまう

〔右〕 柏木のことば ……

でうんとくに …… そのことひや
あんどいかゞくまのかれてそしなむらん
をえてしくぞしらひれなふよぞ
そらりえひ めさうくこうくこそ
おとゞそれよくうけくしさこしいます
てやさうんとうひしうどいとさだりけ
さうさうけはおしそてぞすさまらつくら
うちけはやうくのそらえて
ひのおとくよいつらしくとのそこへて ……
細さ世給ふうりけ …… 〔右 女三の柏木の心づから ……〕
ふうきしそてあさくもおもひなさ ……

よもの思ひやるは
細さりつきなく …… もて …
かくはいうれてとも

うけくしとさすらいうて
細 ……
とい思ひもうくぞむし
よ思ひのおぼえと 柏木
かたさ ……

いうらもくねくくし
く 河海 孟 ……
これていうんとし 哭 ……

さして やうく …… ひるうれね
さいうくうまいり給ひて …… 〔河 眭 …… 仙 ……〕
よこのでまいしえて ねこのいとらうたげ
にうらうてそてありをよびまいなん
てわがおそてきこゆる見てし ……
すりつくんとあ宮 …… 〔細 花 ……〕
そしつるすんと ……
らうもしかし給ふ …… 〔細 ……〕
生かしはかずあくとうかくのかれぬ ……
とのおさうしさりつらしとあかし ……
しうのゐのみがくしくも …… 〔六条院の猫の時の ……〕
宮ん姫宮の御かたにさぶらふねこの

代よもてねこの …
細 懐妊の …… 夢 ……
貽之相 ……
なかしよすり
細 ……中のこくうええと
ならんさ ……
しらはし …… 花 ……
し 猫を …… 夏 ……
……
よ ……
八何しよ ……
六条院の ……
めをとひて 懐 ……
さきみてしし ……
のそでも面白し

けはさつておりけんうと
日比しくらうきりんうき
御身あり　十三の御台に
ましくは柿本まんてあ
人まし〳〵と石山を
もぢみ草まで池まで
てておせらり御縁まで
ぎりうきし御身として
貞女のたをもととすひまふ
るも〳〵さ御身ぞを待
より

今の御座をとらん　　向ちかし下宮
乃将衣紬襖娘子武藏
出仙宿

又まへさせんまする事さ
さを　盃又重てまゐらく
ともわるきしまうれば
今一盃まゐらし

つまされとのつるひきまうし夕のしもまん
えいぞさり　げよさろさわりけんまりにわれ
しくちきりんうしさ御身なりそりなま
をいまはいくらはえし　なましんとうるして
んがそくていゝしまするけうのなきあふとい
とらふじけつくめられしとなりて人の
深きさへの袖にいつゝまもけさの手まま
あけゆく気色なりよそんなきまう中を
なりいりはじ待らんでさいうしいまま
せまんハ又とらて　さまんしもまけさなりと
まじひとこしれてまをきすをまつてしまふ
まゆのしうやせてもしりうくさひもそし
のきうにいうれて徳をられてまなくつに
ひてつけくてことなりもりかれ又ゆうや
うハおしらじしいとうしまとひゆのしく
まいつハみうりうまよおかりわかをいてつらう
かりもそぬいてもそかなさよりりて
そらくまりぐもなれどもひまるり待りな
んをいそぐくらんつもそてもなんゆるし
待て御身ハぞれなりへつろまそもまて給
りまましよそくさいひさいつゝさそハかりま
しつきてしわされて出ずなしすきの事乃
屏風と門ひろげて　そとおしあけられいで
こ度の南れしとのよくべりりまつまするさる

きくハふゆうさえりりるとぞ
いおいらしやで
殊はまさ三の御一言とな
なれバ行ハ親子不用
のりの人身をいおつり
もうさらんやしまし
れをそこでぞあり
いとてそでこうさな
細々らかれうくいうまで
ぶ命もあつもて後は
べきうい御身の様ぶさ
さつきそこそく　まぐも
ア待れくもく
こよひまうち待りうんも
細命をその御身くなりあ
くそてまひ命せとうい
人もつくじとさるかも
しててり御身
つるまでもなんゆうし

うしろひ命を轉りとても此折客あるまい
こゝ
をこしらひのどかうし
くびさらうらんを云ひ
あれど　おりかさなえ

ぐらあつよふごとあけぼのゝ手から今
何のまゝすらんのこゝろあれば〳〵と
やあらひきおげてりうりつくさけんよ（柳本の狗し）
（血柳本の赤んでいせきらし）らりしびをうを作りぬすらしこひのとあ
うしかやされば哀しずまの後をうとお
ぐしきすあらをいゝしめりしつるうと姑がし（幸三の乙）
てりのをいゝくんとしきえどとまゆくられでい
ともろくしきれさ海ちゃりゃあけまあ
けゆくよいてんあくてしくてあられ（柏仏）（喉 猫の見たし）
（妻の表志られ もやおとし）なりる蓑ぐうりをおえしさすべさとぞらく（喉 猫の多及備姫え）
まをあへでこそさりとはいつまの始かしあそ（えまさんでまゝめうう）
（ものゝるやしその）すりとしも作りかんしそのとうるうしれさ

めらえてり　細ゆくへき
方も不知しくも浩白面
徹説ハ此附柳本んと
とたちさうらのそさこされ
でさまをさのち別も
るきこく紬すりはんと
いふんをありもさんれど
此挑のまゝ作り
後撰三深川かげそわぶ
めもおりれどもらみつり
の家や何なり目蓋衆
てとらかれしかんめびゝお
うへよらりぬんるたるう
此此れあきくあるべし
不審よあら見おぞての
家のくいつての家にそあり
ぞしいぶんとの支ままき
せそうのでこさ紬まりと
ひさあてき世着作りて
此秋などもちすらせきを
紬ようりの深へいつくより
とく家よやもし方と恋
しうらりしく仏教でよえ
のるすらくりらに終あり

ちゃうゆくれ旅の宮もしりしもんづらしるり（細 四月まれし）
（柳本）ゆるさそしり宮をもつくれぬ明書よいづくの
家のうち紬なりひきいぞくれへさう由れ（紬をりきそ見せよとて無きと）
じいづくるんとすりよすらしるぐさめ縁そ（才二ム）
（血 幸三の忠勇もし）あけぐれの宮よくしき男へきしさうんゆめ
ありつりしぞそすやむべくとぞくるすげよ（柳本のこゝく）
の縁れしこのまゝくおうしげやまゝとゞらうくさ
（もおへを知りるし夜鳴る虫で）もちうみつくいづくぬるゝ御しぬるにも
とをるれてとゆうりぬるゝらうぞ女交の流（細 養犁のゝ）
まよもおうで縁つゞく大層へぞ無ひで（柳本の父のかえで）
おいしめらうらめしれどもめをあそんかと
つる妻のさうらよあそんこのまゝきへ

但ちく哥ふもの紅おり細流よ門まへり
そうんとするよすらしきくさめのまて　お梅本の立出んしすりふく女三もみゑてとえぐさ
めて恋哥ゐしまるしく　孟月弟　細月
おけぐれの　細おま八梅もの手かぎりしも今梅本の出まふよ座をてくうそす十陸
師うくらさ嵐ともすべくやむべさよ此哥ぐれよ我岩さんかそうしとも
うう壬すやくしまて　師論義さん妙ある出様く
まくしよ分とのまれ
細流の字妙之わかぎりし
神の中すや入まりんの光
何おりぎりし御の中まや
入まりん切り出立るのかき
もしらもつ　師説よ君を
まるれてとハ此哥よ思
しけりく
丸り袁のさうちよおりん
ことしさとくへとおよ
師光ハ猫のしときうに
おりんとハ懐娘のすを
妙しふおまへし
いとあまし我まよ中に
こと　お　みつの思ひさうて
とよ此版ハおりまむ此す
さればもきハ別してわり

うふよりのれとのありしき夜いとゝふひしと
芳華のつまとよひおうるし
そひいそくらざそをいうじさあやめらし
つる月らればあそんしくそゆまぐゆくあら
我ちりかきさし孟夫眼思後ふうとし
めれど妙そろうくそうううしにらうし
ておりきるとめし給うそ女の御てあさ
師
女三家のす
らるもいそすけがらうみもいとおりまん
きとくうふ声すみもじくつけく妙ず御れ
バ此ましひのましふをえまされありらをみる
三　何妃　日本紀　御妻周礼お女御后の部し
もしのれめりもとりおやまらでじしのぎま
ほ
お光ハ兄猫のすふれぐ之
えおんよくぞりりゆゑえんしくゆへかかぶ

あつりるあつき　唯女御まで
とおやまらて罷よおる
なやうよハたゞしも
限るさ女とろくゆれど
花二条后又東后などの
の嶽く　お　花従て強らや
師佐ゐくやんしなきん
のらさしん　らり
うへハゆへありこめりしき
おもあるさうかね下のあまひ
お　らへハゐうみて立ち
も下のらそちとくろさ
えきうの人へそんら
りしおゐるともおれとし
これハかうさんもかせ
ねど　師　女三をふさきん
よもあしとし　お光ハ女三
のらかり立めりして
あらぐくまつる事ぞそも
なきよあくしく[illegible]

のつきづくまるらんくしも、らうしく妙りぬ
細流
孟妣　揚焉
おじあうつらありさつくゆへおうゝむどえ此
流よめとえばめうれなんこといひておそ
うくえぞうしく妙り也、限りそこそんるす
せちり女三の御すむ
少ゆれど、ずくしもづきさらかぐんまずて
好色のらふるし
うへゆへおりそみくしきみもちうこうかねあさ
のうろきひさうてそ、とおりこととうくうく
しらるびさんかうし給さくへまきのれこ
まそみつさんをかきるゝど、ひとそも如き
今まで　ぬさきうらえうくさう
しやうよ出きん
よ物とぢしまつる此らよ。どいやうしもん
のさきつけさんやうまかせかくさう

ゆかしきまふんかりえや
へをも知らるやうれある
きあるべかりそろうらき
や、まゆかりあへ

いとゞく知らひきありて
柏木のるりあはゆへの心の
とあく女三の宮也

ひきしくあらぬなうさし
まきを　抄 源の心て紫の
細ひ後久しくおぼせぬ
折よらぬそて、女三の宮や
うよくらむかうハめやう
よ志あまうしのんて
あはれられ母なまじき

しくゐがなれど。おほくさ所はなくまえぬる
まいらばくぞて、いとほしさながるりけり　女三のさうつりかる
抄 女三の我もと思ひ知るまへしとし
と。分づらしかりまくべし。おまやゆうしげに
うし源へやうなし
あるん心きぬれバ。物ゆしくてまして、つしじくれ
細 柏右上の病悩ようさそうしし
なとつくし給はししようらさて又つらに
と此ちうとあそて。ようりまへつま。ちょそうと　源女三へ也　抄 女三の宮也
ゐりしけるがこともなく御ゆすいてつる
くそらひしかりてさやうのもこあつ　抄 源の心也
すり給もぬど。ひさしくみすりめあるそ御
どうしめしくゆかすすやしいとおしくて　細 紫の上のこと
あはれらの宮御つどこそまそていまへの　源の女三への
ゆしどのかよもしてあれいら御さしまよとう　仰也

とりんとて紫の所ハのまなきのくまなし
いまいのとじめよとしるあれ
うさ御とえくみしこそ　此比て紫よつるさそひきひしとし
紫上の宮はおもやおはんとよのかごよ　孫男

ひとりさきさてしくしらり
抄 紫を初より養育
あわしうぞ今女三へ
うらがきさとし

くるしさもとありまへ
ねも　孟 柏木のると源
の知るへゐとし女三の宮
入まって

ゐるさ御とこしとそれどしてなんりとし
けるかりしゆどころあさつひとめて、又
ちるなかさきそれば。ゆうつまてるしるりとを　女三に對て孫男の事よゐるなるべし
しらぬ御よゐし給ふぞ。その人つらく
のがすさば。さる心ゆ給ぞんるもし中めえ　源の女三へ孫男ならぬ知ならんとのこと
まふしき気色もあり御ゆゐまいしかし　女三の心
ゐがらしくゆがされて、めいへあれど御がく
ニしくゆかさうんの志へうりて中くある　細 柏木心
ゐらのえまかりて。ゆきあへありるもし
まびまふまつりの日なれば。りのさうまありう　細 酉の日也　我ぞとしもこゆくらん

きのふひゆくゑ(?)逆うきつれて、いひそぐのをを
どうやまし(?)げなりそてる(?)ずかあか(?)給
つり。女文ぬどかうしこまりかやさうさ(?)御り
りそるしゆめして、ゆるく(?)くらしけてこと
らしまり給つて、我身よろうれうそ(?)いとく
つまでくなうろかそくるかめまで(?)るよまさう
ワぐのりきるあふひそとまそ
ゑやうしくぞつくそうしれらあかひ(?)給の
ゆゑをうつくしうすぐしぬよ。ちふもいし中と
なりぬ世車せ(?)門うすしぬ車のとしゑてと
とゝ。そのくりよらそて。人やりなうぬつ
ゑもいのすきまに(?)ゝそと。こうしれる(?)
あるよごしくへちうり給りるゐとそゝぐうしくめ
ざ御しとうてよ。ものおとをりしうぞゆかされ
ゐる。女房るし柏よくされいぞく人もとく
るまのぐやりなれいげけるかめて。さくるの
しうろうしくひのきのまささうりて。ゆかく
すうけそうへしもあすりよあそしょるまま失
うしそれどゆるのかくはのあ(?)ひさくへど(?)とよが
ざりきそくぞくせうしうをまゆかむ
しろみて落葉を。うかてひうひるん為へ
ひつまうくうぞうれどもと。このうさこすうて(?)ひ
みくうらいてるかすめけたるあうりうぐとかなり

ゑやいぞ。楢ま罷と
しかせ(?)らる孟わが罷をかを
さらと柏をともお女二
宮のうりとまめう給の
ゆるせるくぐしうすぬし
い源の色(?)と助りひてしあ
ま所あまちらいらなく
まてこにおうろかすしるもい
後まめをさかめくれな

りうくこ
こと細蓋の事すとそう
女二とも落葉ちかとい見
ずさうれなく見しちあ
染ちかといいさりあ名え
もあましさへ同し朱雀
の院なうすれつえ見い女三

えんをえぬるをとりて
すれくもるりすて
御諚の意のうえおりて
うり枚ハりて言く出ひ
すじり二字説へより
きうぬさ

まかくし
唯要字也

何独言

し、鮑ぐのこさくハ、すすれくもるりてまなく、
えふりしもるるくりと海をもす。ふ河ん
やすく、ゆるぎうるしよ。ここえいりやあぬとそてん
まりられバぞうくよるみじとしも荒しわる
れど、それんもとられくうるうり給ふらの経の心
りしてさまげふりの流ハ渡しりの功わら
すべてひとうらさくろくさくりとのくさら
るすきのてらろげらひいとすずくしざれは
をおしそびりまふれバ目とわくしりそうひ
まうしまるるよりてよるんうくゆりてすそ
とてそうりふうるりハまれもまれまう

うらんさうくらうくうて
おきへ不動の講持須
衆居ゆゑまふてくへハ
退ぶせず歯座の流
法ゑすブワうりうり
ふる八種もちっ。ら浪
也とうくし
あらしも地のけ
細字もそ法のんとれ
らしてつうくゑを持
ろ

小くうえんの 細字業
本体特の句へ河海ろ
えんてう。善巫異二義
之所欲滅中子為愛
灌頂名無限行於法
真愛灌頂也 唯其後

うらくとのじむうらり、防るのどくまたうくくまら
ぶりらそしすうてハ。おらくとさけてとを退おく
あふ。ふう、さしへ浪よりそうしと荒しろ
ぶあきさめし、さよ、すよびしりへさくひあら
人ぶりとしものゝけのすうまてとをあるめ。
いとひさんつよあささつざうくしとふ河かあ
とりよくつりどうさ乳丸とそてそくさせ
給そくぐれうけんざいの浪ゆうしあり、め
くりうりあり流いのちもそこの世つさき
ひぬとも、ふごいまちうしのどかあひ不動
善の流りうのちりひあうその因くどぞさ
まりけどふめなりまへてとりしらうら海

礼延年のうり有し．○大
般若経曰延業亦能續ク
甲報盡者能延六月住
不動義軌 師 なりょのちうひ
とハいわれのうし．その日
数とハ六月のこゝろ．
○三能延六月住とわ
うに付て能延六月の
法とて秘法あり．今は
六つのとまりねありぞ
分を一月よ一つてとり
六月よ皆らうと．それを
とりあまて法の礼能延
六月とハ云．ら
○そうじさあんのうちらど
○お源の鉢備の源切なる
どれもありれとまいて
し

こゝよらろけありとさらてくいつうじさうて
ろとをさくてうらしをる．怺も今ハ
とくひめととわもをしまんいくとあへなく
くぶらをりつうん婦じとそてよえくさとをな
るるきりしものらやゑくうをしそきとしも変
○お源の紫よとられ甲守しき祈そさく
しまくへる．海とまりのぞうさふもあら
ぬとゑをうらうらどとしてしとらるうへ
しいうまじされうろのくらとれもさき
そ給ふや．月比さしまよあくられいぞこ猫
のけらいうきこりしけようりてぶまへひの
○お家上藐生しうさ海く
のもうう福よやしくいさとつくまかまどれ
お源てまぐんみうくと
しくもゆしくちもゆげしいうじゃ

月比てうじてひさせまふ
お猫のけと伺してさへ
さまらく猫のけのつ者
かんん
くのちもまうしく
○お源の会も堪ゆしく
歎きのふるあり
いふしへのんのくらうそぞそ
師 恵是も執心ありゆ．
られぞ猫の事をみぐらう
源氏の両心をとりさうる
とくわうれらうらうらう
○お今宮よそのの執心よ
ひられてしもしぬせずて
まうられともうれど
今と源の両ゆるうく心
まうくあうられきうしく

讃伏く
くてうちゝれてんへこれきうれ浪ひく
きしろの体をしまとくん．とのれを月比
てうしまひさせ給ひなるけうくつしあ
悖業をととうん
れへ出るおどくい業しきくきんとむひつ
れど．ちするよいのちもうふおぞく身と
○悪不よそ生らう
うつさて業しまどわ猫をよぞそれあれえ．
いまうそうくいつじき身をらけされ呆つ
へのんうなうでことくゆぞ一も東り
きさうるされいりのくらんろしきと怎と
もく．そぞつるよわしつれぬろうとある
細妻上の附そしりのてけれ旨之
よそしれしとせひつろりの．とうてさこを
ふうくけりくるくけつひょぐむうしこまうひ

しかのくいのち偲とくしくわうおかさおしく。
むしつけしと妙わしきをみしこのかつうるぬ
もはししられへばつしへのてをとくしくへて。ひ
きらしくさ恨おしくもときせ仮りぞ。ましく
しよその人かよのしぬきらのやぢうふかなかも
のくじはかれさうりうすき人の娘りそ。かをとう
こいつひ出うとかわうぞ。こいろわうあう
きよまさ人のものしぎんこのかくよきるく。
乞ひ出かられめぐうしんなとひへさそうろんいさて
うかくも。ちんじぐきとのよ俺へば。おらう
とおしくるらきて

ろこ人のとりてかせう
拵の死衰ゑふのやうまで
けて死人の桜をうけ現る
いやうおりしと
まさ人のちとしぎんへこの
お須の名を聞くゆきそへ
へえしらぬるをと梅のけ
このいつとしと

らゆがきすりこへのきわうり。いしつうらりく
とうきさけぶ梅りしさんすうよりのからぢ
しきうけそひらうしもぞ。わくいてとうと
おしくんらけきべものいつもじ気がそ。
中ずめのけふしとしても。いとうへしくうき
じあるしとうん。おまうけらてもをきま
楚ゞ。こうらしよ如めれべこのへまでを
うくゆわしぬかやあしんぎんを絶つうろ
つうしとさひゆへしらうのちうの気す人と
まう梅るうりきうそのなうよも。いそて風な
よ。人より出るく出がしをそしうちをさ
かぢらの沈梅彼のつかくよふしゆらつれ

徐考して
須出ハちりまべきさとして
きをゞよ梅をらぞくろう
けそへ
梅のけの秘とうるあ
をお流息の術恋
よくあつしと

かそのまま今うり
ふ秘をさひ猜かひうり。
死後の広ゆろ浮のつくき
しと
妙まづらの
よ人浮絡ことし。師人の

あらぬことゝゞのへこのき
まへバ堂上しらず殿ハ
しらずとらかて
今ハそあらうま気ゆかし
おかるわるのるれバ御
るすをまのかたきおそえ
かきくしうえくく
くし給むに　細　悪鬼なども
かれぞそこまうらえ
たゞ病者のしあ[illegible]よ
かなきるとく
あわりつらく　細　源ハ御も
まつゝ　しるしもつる
かたふこく孟　源へ根とり
哀とつゞしも仏神の不議
あれくると
らしつらことのこてくろむ
ぶつつの　お　わか指く霊
気のさめとは苦悩よかう
ことぐ得脱をうることよ
弔ひとしあて此執ハ孟
のべし　こ[illegible]
法ょう[illegible]

みくるしき御さまの給ひでくらうし
かんどうくしくいまはさてあるらは
見てゆるしてぞことの人のうへ世にしめんを
ぢまそあかきくしまてとてそもへどう
らうひつづけりまうくつきしさ身のけうひ
すれぞう…あをさこうもこの人をきうくまは
くしともひむからしといるすけれども御あり
つらひいとしれあさりともさくらしてゑ
らんざさまつるとぞれてゐとがさよ御の[illegible]
かんさて仏からしいまはこのうくろむそ
らのまぶ[illegible]をあせまへぞ備と給との
の[illegible]

経焼損邪気之足六之由
稲荷明神也貞崇法
師終ル見延長八年
李部王記ニ二日死霊ハ
追福をそて令得脱之時ハ
力也其霊の苦と消へき
ゆへ不審顕也ハ如此ル
密のさよハわ遠しめ

つるしとあそて　河　紹巴
物のけどもゆへどもあそて
そをそれそもせぬやらにし
世上をいて方ハ不…給
か[illegible]

さのの御[illegible]のをきつれてさたまらさる
さことももさことゑるゐいひてくわしくるんゆ
文かもとのりしとつてへさてしまへゆめ流を
やつうへのおかどもえんとどかそうひそいふむいかつ
うひ給ゐ。歎きよおりしゆのし此かうへのれ
つまうろひへうりんぐらくのことまうるすぐ
をさせことまへいとくやしきさてまるかんき
もうらなきどいひつくれしとりのけるむちひて。
物侭し給ひんもうちうらうこゝろぞそれいぶかうし
こゆてゆへをべめつし方よ思ひそくかうすな
ア給かくうを給よかうかふとふ世中よ
くらてけうつひよとさし給人へぞある

細　歎き人ゆへ御仏をまにとらまのうちと
孟　其の御之故ね頃のこと
河　御帯とし
河　息所の嫉妬の念を悔しとくと
孟　源の心
孟　忠君とし
花　見るるまよらふつて
細　世を人をか源ハおもつきまあ
その心ふうよにあくそ

いとゆゝしくめでたきを
花鳥ニ実ならせ給ふるを
て帝の人おとといふにし
くめでたく
なかのくさ 細 前坊の御事也。
聖 前坊長者宮ハくさとえ
しく昼日御さまおしく
いかりひあらつきかは
人の 細 くきこえらつけ
みすきにくり。聖 紫上の
光をうしのひ給時言
あかれに母もかるよ
やとらして
なみを探 河古今 ましそ
いたはらしてしき
物なりども何を探てし
ひきさすし
二条院のならのの御所にて
あらそれ 孟 紫上をまかせ
どもは女三の御世なん
なども人のいふて

を。いとゆゝしく（原の心く）めでたく。なかのくさるよい
でのひかりかくぞ在らるすぐ。その給ふらむ。花鳥
（うき世をりとふかる）人のかとをばいとしいまじきことにもなりぬ
いけりひあらつきかは人のひかりし
今日かくめでたき御からぬなりにけり
つけざし給人まかりてくしきひかりけ（かゝるは御なくせし也）
いかなるべきなりかしぬしるすなき
らうゆしいふあかりしもあかりけるの
とじ世なるりしてのあれをとどうく
だくさりつの人かりけんいませて二条（細）
（聖本巻の心なるべし）なかいもとの御心しあかりれ給ひかりし
しげはとかりけりつりけりかげもしょうなるか

あふらに世よ
つらんだてるいとど探
いめでとられしき世よ何
りくしうふさ師説と云
なく絵探かうするやう

ちきとめでたり。忠孝さのあいとしかく
らうしたりくなかいは御此らしりとも。なか
弁治宰相となりける人のことのまへを
ひかりかくいひあるとうもしもむかしいちつ（細 紫上の御滅のまへとひあまり）
かれるするかまうき世にひきしゆくなるべき
ぞしひとりして人の御へうれしきりの給ふ（二条院にて）
（うまとあて）しりすりぬゝしけれいゆく物て
えずからさのほとりひまあらはれる事。
かく人のちかきさとりけれいまひくしかせ
とうちさけざきて。成アロのあをこまえ（細 紫上の文也）
それそいといとめかれらは御
てぞいつ給人でのはきむことも。え申

ぎりあらずしきんすむひる
お柏木のうりまきるす
夕霧の詞にもくまんどく
おりしござらく

つゝみかくして夫ねの色涙とのべひて立
（畑 夕霧）
出まするよいつまでもゆくぞさら涙まへの
（細 柏木の詞と）
しられぬゑんのごきゝもろともてかへまでび
（お柏木）
きく泥にあやまちはけに涙かりなじみそ
（月後の詞と）
来りつゝむぞの給ひとりくるりて月日
（細 夕霧の詞と）
へすぐると朧しりさしつゝ給ひりつゝとも
のくけのしわざよなん申のやりくりいで
給やうに嘆きし給そ今なんされ人心と
むかれどまさいとよのめしけなしやんごろ
しきりしまてとて涙してよいつくな
さまへる気色をせめをするしこれよりお常盤

ちくちく 細 花紋の命宗礼
自由にちゃうるへし若かり
ありしと同じまいりで
叶はずんぞてこそ来ら
れまし花鳥の勝と宰
お終いにてまてハとどろき

さしもちうしりしぬもし女の涙しん
くんちめまつるうるしめどもらぶひやうこれ
（細 源の君まふて）（お源の詞）
かれまうりまつるりしらてめでてども
（重藤若）
さひめうざのよりつゝしらかつさ涙なま
まつるを女房るすぐいんりえ地さめてござ
（お女房とものうち）
まがいちくさわきさ給りけるよござりしを
（さうさまるに涙てえん地さめさせ給ひとと）
えのどめでこうろおんしてちさ給まそ
（らま別あれしるさひやまりんとし）
るんとさるよるんぐくりのしまてまちろ
（河 宰藤）
てびいさう由べきしのまつりぐんの君むなる
つかれてくるめりのらくもる申すのごとは
え来るまづしけんひそぞつしくおつわまゐ
（宰の藤はよろこび）
のしらぞぞうくござらうてみりまるるくいつさい

こゝろくらし作　細川悦月
へし
つゞりしられしとぞ
おはらの附より見のと
らん人　細源のちく細川悪

そひそゆかむ女の名ハ
細女とて業深かりしとぞ。
涅槃經ニもとけり何海
よゝくらは、涅槃經云
界ニ男子ノ諸煩悩合集スレバ
一人ノ女人ノ為ス業障ト女人ハ地獄ノ
使ニ能断ス佛種子ヲ外面ハ似タリ菩
薩ニ内心ハ如シ夜叉ノ涅槃經
あま人もこゝろぞらし
彼女某の翌五月　紫とい
源のうらみたりしと見
のいひおもしるく

のちまかくしよまさくの
ろあわりしよりしおかり
まよさかしのすき人男の
こうとぶめのまをとを
づかしく出わたとく戒破
ま紫上のとしそうる源
のいふり
又あらかり　殺生　偸盗　邪
婬　妄語　飲酒　とよし
おゐ戒ハおは戒く、五及十
戒ニあし
いむしのもぐれたる
何又戒經ニ云一月一夜間持ス
三帰五戒ヲ人生ニ三十三天ノ中ニ
又持ニ五戒ヲ人ニ五神王被
護ス　暑記
よふりこてかほとるも
おほらの智人も賢人
も難義よなぶ時ハ仏
を何のゝこしとて、源を
いふとし仰を宗人のい
おしめまかなる狗く

できての乃ち志と、ゆきそうしく見して、みと
いとじき、嫁ら我もつらしてらゝんととな
くるを給ふつらしへもえてずらむくつけうらし
人のけらいひのましてせりつらおやしき細
のよ海よかゝりまつらんとおがしやうま、いうそん
こうみれバ中紫をあるうひ出しく給さへそこの
あけハりのりてらびひまそゆけハ安の名のかれ
ゆるぞつまふかきれたひぞうしとおへて世
やいとつくろの又人ももくさらし
なりのむ何物後よおそらしくう出たるゝ
こゝとびいひ出さうしよ。海てつ物がし出る
よいまゝしまくもつくゆかなう。れば

てんいさかうのめがりうれハいろいらのち
りやとらそぼいつとてき、たうしつゞりてぐを
みつハそうのくりけきせをなりる給ほぐらの所じむ
こしのもくろれさるよし給よはるもも、哀まさ
うらきさこしをおしつまて、人まろくぬきいから
そこひあまて、海をしのどひのみひつてほとけ
とりろぐま給へじゆえし給さ海まうし
うハおや方の本も、いとろくなくをまとらふくてるま
あおりてハえらの給ひぬまとさがりたりもいの
なるまど給ひて、これをすくひうけとじの世
らんとのちぞちむやりゆかぬしかうけくま、かれぐ
しくきゆそて、れうかをすらしゆとやと給へり

五月なとハましてそれ
ぐしからぬ　細 まして
とハ西(?)申しもんぐ
しからぬハ五月雨などの
故なり

かうんのさとなり
細 禁中ならねど六条院
ハ殿中なれバ御読経と云。
此経ハ大般若最勝王法
華経等也
なりくらすけなり
師 物の字のまかひまそ
又ハさかさよらしなと
とゝまりてそゝぬ
るさやうなり　細 紫上ハ
物さゆかしぬくらるゝま　源氏のかなしむを
さうしく古語く

五月などハまして、はれ／＼しからぬ
空の気色に、えさはやぎ給ハねど、ありしよ
りハすこしよろしきさまなり。されどなほたえ
ずなやみわたり給ふ。もののけのつミすくふ
べきわざ、日ごとに法華経一部づゝ供養ぜ
させ給ふ。日ごとに何くれとたふときわざせさせ給ふ。
御まくらがミ近くても、ふだんの御ど経、こゑたふ
ときかぎりしてよませ給ふ。あらはれそめ
てハ、おり／＼かなしげなることどもいへど、
さらに此もののけさりはてず。いとゞあつ
き程ハ、いきもたえつゝ、いよ／＼のみよわり
給へバ、いはん方なくおぼしなげきたり。
なきやうなる御心ちにも、かゝる御けしきを
心ぐるしく見たてまつり給ひて、
よの中になくなりなんも、
わが身にはさらにくちをしきことのこる
まじけれど、かくおぼしまどふめるに、むなし
く見なされたてまつらんが、いと思ひくま
なかるべけれバ、思ひおこして、御ゆなどいさ
さかまゐるけにや、六月になりてぞ、時々御くし
もたげ給ひける。めづらしく見たてまつり給
ふにも、なほいとゆゝしくて、六条院にハ
あからさまにもえわたり給ハず。姫宮ハ、
あやしかりし事をおぼしなげきしより、
やがてれいのさまにもおはせず、なやましく

なりひかりして　師 源氏
の心をさわがして心ゆ
かずおもひまどふゆゑ
と注く

六条院にハ　師 いかなる
つき給ひし紫上絶入
給ひしよりまだ　細 源氏
の女三の宮方へハおはせ
ぬとも

若のやうに
まえも無ひしきめれど　細 柏木女三

さうざうしき　細 源ま
ゆきあくるられまふ
自称しまへいりでとえく
より

おもへど。ゆるさるくいわしぞ。さうらぬ　かぜとえ…
ほそし 柏木女三に会うハ四月也
みつ月よりのうらしめきてですくかと
ととこうられまふ。かの人いまりすく思　細 柏木也
ひかまうとさくい。若のやうにこころよく
まりぬれど。たいつきをすずまうちさし　孟 女三を
とま思しうら流とつらじくゆらさとて　抄 源のさし
まる流るま。おほ給も人の前とひうしく　抄 柏と源とのさし
いうえやハめう。いさしうしめきる両がとさ　細 柏木の詞也
れバ恐るるこの人めまこそるへでのひとつま
はあきりてめでしうられゆされくまりさう　源とりて　女三のさまをさ給しうらと
ぎびるさされ。とさ両まよ我しひまへつれん
よいめざあしくのこえのふかどしくかの　細 女三懐妊成へく

やくまくり給ハあくられるうれをもくをみぞ
あうもうれめのとさうこそしまうりとが　孟本 懐妊
めく流の上らしを給ひしも。いとさ両さう
ありをとうやさししくそそもろ。く　こころと　河 諭ツネク 譎曰
ありやこまふときこうしめしてぞいさら給。母　細 懐
ごいハあろくむつしそ。れぐしとのしく。　のしろう
とうしさうやうるよりてすしまくらふう　三 寝なる
うちやまうしくバもるよもうそうのど。つ　髪をわけきハとそくひろうし
也らうらふくこまのふすらりすて。
いとをのよゆらくとしておほ流これ　細 小まうし
とろへまうしもいうらいさすよしろくう
つくしげよすさようやくるこ両ら流るる

くるやとまふと出るて
ぞまうりまふ
三一 女二の於ひまふ心源
の六条院へ御見あらすし
細 六条院へ源氏の給と
おくいまど二条院の
ですとうろう見は物語
の筆法也

いうりさうまよおろく
孟一年さとまくかて
あう葉の於くつうく
白きいまうく抱也　眠

つきなどよになくらうたげなり。河脱之所や
もぬけたるむしのからなどのやうに。まだいとたゞ（せみなどのもぬけたるさま也）
よはしげにおはす。としごろすみ給はで（細 二条院也）すこし
あれたりつる院のうち。たとしへなくせ（二 さへ見ゆ　師 紫の）
ばげにさへみゆ。きのふけふかくものおぼえ（おのれとれ人の心地さへ也）
給ふひまにて。心ことにつくろはれたるやり
水せんざいの。うちつけにこゝちよげなる（師 そゞろにうちつけにみゆる也）
を（紫の心）見いだしても。哀にいまゝでへにけるを（細 よそながらの心地也）
思ほす。池はいとすゞしげにて。はちすの
花のさきわたれるに。葉はいとあをやか
にて露きら〳〵と玉のやうに見えわた
るを（細 源の詞）かれ見給へ。おのれひとりもすゞし

おのれひとりもすゞしげ　二 おのれひとりとは此池の蓮のすゞしき也
とりわき蓮ひとつすゞしげなると也
我身さへかぎりと　三 紫のなやみの時は源もかぎりとおぼえしと也
きえとまる　細 紫上の命露のやうにあるべきかほどの事也。いつまでもあるまじき命と也
ちぎりおかん　細 源の心 一蓮托生の心 後世をちぎる也　三光院説

げなるかなとのたまふに（紫の詞）。おきあがりて
見いだし給へるも（源の心）いとめづらしければ
かくて見奉るこそ夢のこゝちすれ。いみ
じくわが身さへ（孟 看也　源のうけとりて）かぎりとおぼゆるおり〳〵
のありしはやと。涙をうけてのたま
へば（細 紫上）みづからもあはれとおぼして
紫　きえとまるほどやはふべきたまさかに
はちすの露のかゝるばかりを
源　ちぎりおかんこの世ならでもはちす葉に
たまゐる露のこゝろへだつな（孟 女三へ紫の事）
いでたまふかたざまは（源の心）ものうけれど
うちにも院にも（細 今上）きこしめさん
所あり。なやみ給ふ（孟 女三之）ときゝても

こゝろ雲ゐ　細疵のひま
し。おゐ月夜の後の人も
おつ乳父ハ病の床より
師えしく女三とえな
るうもゐきにうゝ紫
の上気色の床まとへ
女三ハえまふましきくハ
とのへし
文ハ源氏のおよぶ　喋なの
中の橘のうゑとんやま
うしんとも。いの思
しらふ
出ゝ女ひとうへめして
柏乳母上臈あどめて
女三の源氏ひのさ御
を源のとひまって

へめうと。めよちゝきよらゝゝをおどゝつゝる　細紫たし
そど。いゝそまつるゝも地さくおすらうゝ　女三とゝし
よううゝくをまよさんやそし。こゝてうりしゝん
とおりしちちてぶちゝゝさせんひぬ。文ハ源　女三へ
こゝろのとおつ。こゝえゝそしまつゝへるちゞゝ
しくいつ。おしく地がまちよ。りのるとこゝこ　源の物のまふよ女三の風志
若も千まし
えゝ源ハひとへをそゝし尚つゝ々で。ひろ
のつりをよ。ますいまさうげすゝてつゝしと
地おしくゝとふゝらゝしうれいどくゝらへ　きて女三と處め源之
世の源。地とあびへらへめてれこゝゝ氏さ　細川懐姫之御川めとふの若ヶ源し
御るどとひ源。劒の御おしゝぬれこゝゝ
よるんと。よづゝひ源川る源ととこ仍。

おやしくわしくてめづらし
きゆるのかし　二　川るの見出
おあんおうば若ようも
ふく。おおあんるすぞとれ
宗叡よ源の若ひおゆてし
師女三の六条院よおせ
しより七八年へより
こゝら人めら人とぶおも
三若ハ源の三人のるを
きすし。紫上明石上花散
里あどのる乳お
お定ゟう川るす　孟　女三
の懐姫と源の不審し
ていうするおゆうさひ
まゆ细し　喋　三若ハな
くもおそうすそめの
あどのやうと源の推
若さし
いつのまよつりう川云の
御ふにうおん　孟　源の
川出おうゝく二三日より
こゝおれ文とのこおそ
づゞとそ女三の川おの
おやきうをいおしゝで後

おやしく川づくてめづらしきゆるのめもこ
そゝうのまで。川人のくうまえとしづゝへ
ぬるんゝでゝよおる。さうこしゝすゝ紙不定る
おれこよよりや地がをば。ゝよとをとう　ふだん
くもの源あへしらひよ御ちぞ。こうでうら
なやこまするよ御のひこらうよげゐるを。
あゝれとこゝそまうゝ源。ゝゝゝしうてお　二やうくよ若ひ出すとゝ
がさゝて。もさうしゝひしゝべふとをえ　おゝこゝ喋点
ゝゝよ御のぞ。一三日おいすゝ用ど。いうるく　細紫さとへ
とうしろめさくわがさうれど川めことのと　とよく思源と　孟源の出若へし
くきつゝし源。いつのまよつりう川こゝの御ふに
ゝあんいでや座すゝしぬ世をもこゝゝ

いふこゝろ
そやあまうたせとて
たるへし
仲綱そうらはつけても
おほぢのゆるしをたまはる
ぬるへし黒人うつしといふを
しまつるといへば柿本のかの
どぢのこゝろのうつしいのおか
人丸と小野綱がうつし
んおやまりしてかこそれ
うぢまよどうゝさつゞけて
孟浩のまうしくうろん柿
本のまなどうつりせら
ハ曲るへし
あつるはおいて歌はかわり
三業のおかりせねども深
の對へ用るはじあうりて
おかしからうるへし
為ほしてけ　しかきのい
とおしく　おかしの文
えかいとおしさとふ
あへ人のおうちとうつて
いぬべきと仲綱があいそ
てもおしるとるくしく

業平上を兎角して歌女三のかたへくまいらせ（細女三宮上）
あさわうさえの御方やまゐらせたてぬ人へい
いふ仲綱でかうよすつけても細かうら（細柿葉こ）
わざまうの人まかくいうらうまちらと（御源の女三の御方へ）
きくは世のかけるくうろおやまちして
いそしきこともりて御つゞけくとこを
まうらあいよあこうさ歌はまくらある
おぢよ人まつりもれば女びくこゝとて（おん人のすゝめること）（御小仲綱が柿の文を）
まろらむりしきりのこゝろをいとゞ（お女三の細文のこと）
うかれらくらのひゞおしさうそてよりおも
へれだおほ絶えてこのそうぐそのいしおしけ（小仲綱がまうさくうし）
は仲だちやかくてひろげさしば人のまくら

そこうハおくもそ　け文字
嘵渇法従清之　孟女三の
消報ひハそれならにま
しまさぬぞどうまと源
のかいとまじめし
ひかくしくうて　ちまを
人おうらも　お女三の方
あめろうを根まふりと
源の心ひまふて人まゐの
わざ歌よりうすた
信男わかる我心いハゆ
らじとるずさめその
まつて

まいくらしくてこゝちゆらさしまそ（孟仲綱）（女三のかた）
すらぬいとひじりつゞらきは深いうう（源の入る事）
らくもうらくし給かくこれまてのゆのまさ（女三の消息よく）
しうくえ給川よそりつこく二宮綱へまさ
ゆうら源入とそれい歌こゝて給らくまこ（源の女三つ）（細源の行）
そうはおゆでこそ給そはこいとくよ（お業上のまへ）
いけまりしをこゝ千とくうゆうは世とそ
あつもいはまうるいとおもしくてあん ひ
がくしくうてあまそひとありこゝとゆ
めらうろやさきさまうふる歌こゝうさうまて
人とうつひ給れいいら歌いそけあさき（女三のこと）
まくらふれじしるぞおもうらしけらそこ

いとくちをしくてさやうなるも
孟 女三の宮のいはけなきあたり
を根こそぎにと源のおぼ
すなり

月まちて　細 女三宮の
詞 夕ぐれは道たどたど
し ――　三條氏
のさうばかりにておぼつかな
らぬ路にのぼりたまふ
此哥のこゝろを書きて

まふを。いつくしうて。さやうなるこそあれ
をさなくもあらぬを。ことにもの
らしきけはひとしらえなくひとのお
ほしなしまで。御物がたりなど聞え給ふ
ほどに。くれにけり。すこし大とのごもりいりにける
に。日ぐらしの花やかになくにおどろき
給ひて。さらば道たどたどしからぬ程にと
て御ぞなどたてまつりなほす。月まちて
ともいふなるものをと。いとわかやかなるさま
してのたまふは。にくからずかし。そのまに
もとやおぼすと。心ぐるしげにおぼしてた
ちとまり給ふ

女三
ゆふ露に袖ぬらせとや日ぐらしのなく
をきくきくおきてゆくらん。かたなりなる御
心にまかせていひいでたまへるもらうた
ければ。ついゐて。あなくるしやと。うち
なげきたまふ
源氏
まつ里もいかゞきくらんかたがたに
心さはがすひぐらしのこゑ。など思ひやすら
ひて。猶なさけなからんも心ぐるしければ。
とまり給ひぬ。しづ心なく。さすがになが
められたまひて。御くだものばかりまゐりなど
して。大とのごもりぬ。まだあさすずみのほどに
わたり給はんとて。とくおき給ふ

ゆふ露に　細 此日ひぐらしの時
とゆふのそではしをれまし
きのふとこそ。おもひ出
のなくは日のくれて後
しばしそれをまつて
なほ紙袖をぬらせと
のたまふこゝろなるべし
ころかはれぬよきなりせ
三 女三はいとわかわかし
うらめしくゆくすゑ
まつさまも　細 二条院よ
もまつべき物をとて
あやしくうちむかふ
日ぐらしのなく夕暮は
きこえて　三 さくさい
思ひしと女三宮 孟 心も
はかなく思ひもまよふ
らんとなし

ともしきかな
細 まことには躬恒か歌
兼も躬恒の歌とあるよし
ともあり 哥 孟 同

ありと思ひてこれは風ぬるくこそあり（細 後撰かうかへ）
けれとて御かうしもさゝせて、このかみくる
ほし給ふりしかましのをりと、さらに
まゐりてものすれは是よりのものこしまし
ひさしつまよりわたりのもとにかく（河 陰 源氏）
なりつとの、そしまくらうちゆりと、（弄 柏木の事）
みまかりたりし人のはいそくれんずるに哀
このてかりうとのうたといへみえて
きこめさうろうくうかなりわかうこの
よろしくとうると、ものよりはなくら（細 柏木こ 孟 柏の事也と源の心也）
べきころく、その人のかうちるらんそ（孟 河 後を思ひしたる人にかれを云々）
まひ河流かくなしかけてまかりける

柏木給へるへしそれて
孟 源氏の御かたのそれかくて
よとせりけり
のそかくもそれはあ（柏 後が心とも）
らじ
そみえそはわくしかや
うのふさすのみそ源乃
見えまふやうはあすけす
かわし給ふまさんと
おほかるまし

人々柏木給ふまうそつくしはかけなり。
小侍従をうけてふゆのかたのつらきを（侍従六位の至うつる又云々）
あはれいつよしもつゝれるべからち（弄 朧さして）
をかたわきさらふくめきてそれ。（源のこ 小侍従こ）
いそくうとそれよりわしいひとしく
くるさしへのうんやうくしそれて
げんと思ひるまゝ身へすさるよ海（孟 廿三こ）
じかれるのつきわり。おほいゆけ給ふるを（細 源の心こ 柏の事ハこゝろう）
きこゆ
のとうしまて、これなかぬ人をうけ
こまかしうつと也かとも、ふとようして
されつよいてむけよらくろかくさまそか
二のきみは給ともうろめくしてたまきし

くまりれ　細人〃の
まうしをぐるほど代人ほど
うらしねとしく　哢小侍
たちてこなことぞま
人やもぐめんとさそり
給らしとし
いや給しれば八　細源の
給おあらしいるぞし源
師とまさかのとえ
りしいばかいしい
れいる給文の源こ世給
りんとさひしとも

いつゝの文あれん　おとの
かきうし心何おかり
どこみなんをとんみ
ど世俗もの詞

うくまで思すまへし給うさ
おしくなしなかのいさとを
人給くてぞすくさと
柏木ものゝまひしくこう

とみかそ。（細 源の二条院へ渡り給ふ）いでまひめれば。ひとくすらしお（女三の宮の女房たちをいふ）
（しなり）れめるよ。物語りてこのよのりれい（小侍従が詞）
こまとき世まてしげき院の人じつ
かみのなそて。まて給はれこ中れば。
（女三の宮）わきかしと笑してすきこのゝいぞさ（細 小侍従が詞）
よらそくれはとかしさまのうらかひ
まのれこ御やしゝてまつらはよう（細 小侍従が詞）
いとゝを経てしひらでのまいらしまこと
あらかよらくきつくしとさはらの（これ柏木の詞）
（柏木をいふ）いつ代にてまうつのまかをり給しとや
せ給し経はすらしわかく給ふしどうく給
まほい。（源氏の詞）いうましよ。うしわかくまつり給しなは
かくとえたきこあんでさうしきを
まされよかくよの給よ。（小侍従）いとしきうえん
こさすし。ちりてされとい。つのみはあか
人あるいつくしの。（細 小侍従が詞）のゑもいと（細 柏木也）ゝくとぞ
かりて。かし紀そことありさる世給くとわ
ちづとう。とまうかのし。まのしものせ。候ど
くきや（源の又付まかりし）のこなしのいでまかいてしのをを
べくいよけあされありさ御しまして。人とことえ（細 御の時）
えさ世給かれば。（まかりし）うしてつきらかれ
ぐつくし。（柏の也）つらひまる給しうとうくま
てよふまへし給くとかいるぬが給あするのだ

まんせとく許しけるゆゑ
かまうやうのあるにあらぬ
ふちまえ忍ふなり師 柏木
のこゝろ根もとられたれと
をとくるみ給ひて
そのなかにあるへき
こゝろのなかにしも
とゞめむ
細 今はとまて
かよへる物ハつれなきを
をゞりしれむ 柏
ものこそ今ハ
もみちなとに
しとやかに
ころもやまし 弄 女三の
御前 孤
御の御様 三つ
こんとつしまつ
人とやまた
まつ後の
中納言のては
柏 女房の
し 師
の柏木の
うちくしくて

おしくつかへきくくくらりなすくしき
柏木より御紙にて
ころやもくわりなくおりとれハなすれきく
女三の宮也
ころなめらかんりしほとそてくな
さまのこゝそのる給ひつるやよしけれ
女三の宮の女房
家くらの物もこゝしめさせくうら
の心也
ものしくをさせなと
細 是は女三の宮の心とす
まて侍るひら給よふらに
源氏の
かひるとられまつらしく
源氏也
らくかもひつふかしこのみその
やこくかかれそひとるさみく
しらへしつく給さてなくへのか
柏木
りの中納言のてよかたしてやきもの
をまて也かしられとこしらひてま

くるしきへくもおもくることとも
細 久の人みとよりて
まこしきへくるひかりけるのこの
さるよりひかひてやもうぬもらと
こきみらしつてへてこゝとおりて
表すれとなくやかはりくへしや
と恨むらう
柏木
こゝろ人のみさとそとひやうすくさけ
このやうよ 墨せり
まからつきもてそとひしら青や
うよ御かろへきありみかもてきそ
ぞつもてうきまくらしうにのふ
柏木よりせ 女三の宮にも限のある
かさうらいはりてきりきかはりとうの
細 源氏
ひとの心をさいとなし給門さそとこの

いとうしらうよ 孟 数云
いまてもわつらふやうに
こゝさ物とし 柏木と源
の又やうしまて 細 源の
又良工への文 良を云々
まつか又源氏の老 腋月
夜の方へおほせたりさ
の御ことえまうかおひて
もおうぬらりとさう
づきとやうきの家の
まさくあしと

みじかきのすさひにて
細 肖柏ゟ抄所望の
うたゝよみしそへつかふまつ
ところのおもハつるさ
物とかし

そうしの所見を
孟 序の比翼鸞鳳の心を
とりあつかへあれども
それハうつりかうなどと
此三条ハ花鳥余情の説
白井ニ通信中おもふ通し
まうすきこゆ

とよろきちかう方よりうけ
てうつかなる人のあり
卵女後見衣ハおもひさの
本なれバ自然よきの心を
ちらしたるやうにかぬなふ
へし
抄わきのけのさかへぬる
細そこはくとみえぬ候
え。まつりこするおもふ之
師そおやまちの怪は
家持とぬれどもいそかに
てまうちやうぎもあり
てわらひそれゆゑすもあ
つるかし
うしなふ又此記 細此女
三条之源氏業といふをも

抄女三のみやをさして
人をハいかでうしろめたくさ。めのとくさ 細 儒雅之
つ物のはらからとうちとけのまかされわらく 抄木ゟのまのものきこえしこと
かりうちいでゝおもふゆゑやうく人づて
見しむかしことをえりくおもしみがく 抄 源の事なるべし
ところそもしんうしけひうつるすることを。
え知りひたすらあしくかやゆかしさから
のすさひとうしめうちゑどもとぬ人さ
よそにさ物のならひさみえ心に
さるくちひてゝしそこをまもてられ 細 柏木もおもひ知給ふ
さ物のよそかひろみへさ人の心をもあり 柏木をさして
きうらうれ。みかどの御ゆめをとおやまける
ぐひ背ものりぶれどもそれハみいひ 細 うるハしきことも
かりぬめづくへいそのひてゝ見れば人をおもひ
ようれつゝまうち猶よそのづしてさるべき
くるまつけくもんをとりしそめ。扨のまぎさ
れわかりぬへきりざなり。女院ハふかいと之
どもおもちらぞくかくまつけく／＼は
なら人もおもふところかせうろ人をも
うくぬうちめどつきて知りとも人なくこと
すおれどもかわろけのさへるるおやめちら
そぬほどはさてもめぐらふやくるあら
んよふとしをあくらハならぬめざれあ 孟 女三宮の事 抄 鬚黒大臣の事
またぬくしくぞうりみるとさ事まりてあ
しゆのゝてうらくのそうろさしひくらさま 抄 紫上

さしあたる女三宮
よのつねなりし
こゝらにもあれと
細ふかきの心志のあさき浅
まゝ私のねぎことの深さ
よへんをしるせるつひ
おはしまし

ふかしとありや　孟　それ
ゆるさずしてもある也
拾おの句をうけて見る
一つのよりおもひとこと
おもふ　　細　柏木に心
をかけたりしかば

またなきさまにもてなしきこえてうち〴〵の心ざしひくかたよりもいつくしくかたじけなきものにおもひはぐゝまん人をゝきてかゝる事はさらにたぐひあらじと。つまはじきせられ給ふ。みかどときこゆれどたゞすなほにおほやけざまの心ばへばかりにて宮づかへのほどもものすさまじきに心ざしふかきわたくしのねぎごとになびきおのがじゝあはれをつくし見すぐしがたきをりのいらへをもいひそめ。じねんに心かよひそめけん中らひは。おなじけしからぬすぢなれど。よるかたありや。わが身ながらもさばかりの人に心わけ給ふべくはおぼえぬものをといと心づきなけれど。又けしきにいだすべき事にもあらずなどおぼしみだるゝにつけて。故院のうへもかく御心にはしろしめしてやしらずがほをつくらせ給ひけん。思へばその世のことこそはいとおそろしくあるまじきあやまちなりけれと。ちかきためしをおぼすにぞ。恋の山路はえもどくまじき御心まじりける。つれなしづくり給へどものおぼしみだるゝさまのしるければ。女君。きえのこりたるいとほしみにわたり給ひて。人やりならず心ぐるしう思ひやりきこえ給ひて

恋の山路を　河　いかなる
恋の山路のしげくれば
ふかく入ぬる人はまどふ
ん
さきのこり　　細　紫上の
御病を見捨がたくし
て女三宮の御ことを
おろそかにあり
難有く

（細　桐壺帝之藤壺の御こと　源の藤壺密通の）
（源の女三の宮を念ずおもふ）
（源の二条院へ）
（紫上の）
（細　紫上の句）

うのこやのゐるやましけよ
おりそくんには
孟　女三は八ぬとそまし
ゆうそでこやくうり
まふぞし紫の源への
詞と

らしよりかおびく心任ひ
三今上より女三の法方
へ　晴　女三の方へ源の乞
ろうまやとふんの文
うイしく

とかの(女三)文乃ゐるやまよしげよおりすんなり。
とくわうり給ふしこそ。いとあしくわれとき
らしまへじ。さうし。倒るさしくぞそこしまひし（細　源の詞）
うぐこしるらんちふ色おそきぬでひどのづ
うゝんのどうまよ云ひそくるんならよりならび
よむ法つくひありくろ。からふも流れてまあり（孟句　朱雀の今上へよく作者どうれおぞとき）
つとう披読のいと床んぞしるすくまそくてば
まつれば。らんへもうく地がりしらの女へしまでとし
どろうよゐどうまあらんえてるさうさ地（三　是ハ朱雀今上のさす）
さんこのいとおしきそやともて。めさまへ（うけそいふて）
いぐらのきこしめさんちりもきづくしう（細　黒上の詞　抄　今上の源氏と云ふ人より女三の流ん中心）
めしとおきうてに渡りんしそてはんから（ムさしくさしこと）

うれしうわり
抄　女三ハ云ひ入なるんをとと
も人の思くらへなるん
とし
げよあるがらよ其よ
晴　源くと云ふ人わハしを
まらひあらりんるをも
むまうへれどと見ハれえ
しき国王の流へをと云
がらハ浅うるのことと
紙ありけりきよまずが
とハ国王とらふなりお
おまそ人へとハあくらの
人をらふと源の切よ云ふ
人のあまハ云ふ国王ハ
紙りくさよまずるれど
それのそうすゝぞてあさ
ア(?)の人の云ふんるさえ
をを思せくれて琢磨を
がてきさと見いをへんと
源切よ云ふまハあしそて
兵国王の流んとでゝう
中え浅んそうとし
よゝうまりんなりりろ丸

みんどもれくるかりしどめむとうもひろうね
さ海よよくしすなを人ぐらすくがわらんと
そハいとうしくるんなどのつまへいば
よあゝらよ云ふ人のあゝふはらづうり（細　源の詞）
きよみすゐれどよろ河よすどりうつき
てしどやうくやとゆかすそく人の云ちんころ
さん云ひめぐゝさうく。とき見いで　ごくわらの（女三のゝす）
流んやそきさ給ちんとぞうりとそ。くうん
いおさならぞしろうと源しそえ乃
しらひせきうりす。けくり給けんとへかろ（六条院へ）
とめまくうてよ心のぐらうおうんとのこ（孟　紫と源と六条院へこ）
そろく給よ。うらわげ云ふくしんやそくて（細　紫上の詞　抄　紫ハ我身の二条院よお帰遊）

ありくりてを　なにがし上大
夫何へありますべき府
よりつかうまつること。嘆御意を
はや女三へおはさんとは此わ
しめさるのみ
いざへ日ろ源　をゝくりく
ちませそ　三ノ宮は南分
の日比く。おや源とのゝとう
らをまもりし女。今は女三
の源氏よおやすらかう
かへしと出家しぬ

ゆくしんがうげなりける。人の御心をたがく
さこうん猶まをとし。めのしかりしまふ宮どに
日比へぬ。ひめ君ハうくしうり給ひぬ日ご
ろのかうもたゞ人のはへしさまのことが程すを
いかはまうけ給ひそぞうくりうりかよひをてしぐくな
まめかと致ずやすかよ。院をきこしめしつけて
いかよまかりしめさんと世中つまいしくあん。
みの人もつきじげよのとひまされどもふ
御源をまつつくがりひるがけそそて。ぐく
おかしきんあうしとうげてくれど。いとあ
さまのくいろのみどもよさうぐしいぞてさけ
んがうしくはありわれべきのつうしく気色
まそことりぬ出ゆやうのやし出ひし

宮はめつきしうるかりに
源天眼のかゝれ混蜜
をうるるも四郡とて天
地人我の四ハ
天の照覧へ専一なり
網夕まて人もおなき此ま
まど　源氏の日も網夕
をいて見がうねとつどて
くわの様ずくらん
としてろよあるりまをあ
とうしふも　おまより
源のみつくしうりうさ
御といふひてかる根本
のみて
いそぢハめをとふこあが世
此狭海まことよ免り

いとぞつけしく。宮はめつきしうぐうまよ
思くてしよ。まりて　さびらい宮ふべくはも
あふぎりしくと死をもまでぞんちが
どくさうしげすくきついてさに網
夕むくことをするさ比るれど。身もうちよるか
ならて。いそんくさすく此がのひとし比まあご
よふもわざこしふもめしまかりて来ら
きつらりめを人ならんと御やうくよね網
とめよられかくしきの様まるまうしさ残
わきまうしく此がけるさとのよくひとられ
まうてはいぞでくめでもこおくをそて

しくおしう八いうて柏木
の君をいつゞくよなふを
よへゝもぞつゝる可惜身
條まゝ人のいましめとも
べし

こゝして世りきつゝまへ
おゆりてひきみて飛
まこうひきてのかわ
しられとも花ゆから
ひみてきこえるべし
とへもそく舟をたまき
りのきなすしうらの
もてなすべし
いそやあかやうな
思ふあいも女三宮の又
えらひしみとゆかり
よおやしくいありけ
きそうし思ひしきり
御柏木のせうそのきよう
んとそくゆひとつ[illegible]

まうんざりしてうさきて有のゆさ氣て
ざらんも人めおやしくおのはらみまれ
ずしおもそんこのいまじさるし。やもとうら
もてよまゝころもいとろやうしくてう
内裏へもと
ちんも来てしぞさしてとりきつゝまいかさ
るべきさるもとど身のいつくしみめろん
師 思ひそむろかわ所程をもりきてまくし給ふ
らもれがされどもうれもわがらもいとし
の様と
つゝし出かもいぞやあがやうまんるてき
けちひそし海かねわくりぞやゆゞ河へ
六条院の御方の事也
みのとすのいふ海も。さるべきつとんぐうか
がめしとお縁の心ひまゝる気色とそきこう
二の宮御息所之
しるとりすぞふひありけすあゝのしけこ

の御の時三宮の御縁之
あり[illegible]柏木のせひ合
まうし 三 夕霧の侍意
つゝりせしるすわり
まこやしとそもわきら
御女三宮とハ大やしるるが
こ海しされども女三ハあ
まりおやまるるちとめる達
所ゆふし海人へり
細めつろし人おみもあつ
ろべきんをえらしふ人へ三
とし 思書 小侍従なとど
が[illegible]と下よこめて思
るかなし
うのはけのらるりしきも
御三 懐妊のこりらく
紅 小侍従ハ女三の御方の
らの乳母の娘なりしるく
乳母とつけて思ふから
よ御女三の御方の乳
母しこそとつふかるべし
うく思ひそうらもみよ
孟 源の女三と思ひ給ち
てもをかや申てよ意しく

とよ思ひさ海さんしなふり
孟 女三ハ歌つけて思ひまゐらせ人とも
らよろんつけ給しまれしきそてお
らんまさやそしても。わきらひさとを
むさよ出わしるよあてるらん。いこのある
三 世尊の在法
もちもりこうわ念と
猫もあつしゞ川さみし海人よくし。さす
絡しるすくてうくいとおしきれ身のさ
女三の御方ちもと
めとど人のるさわと。いつしきしみもあらう
あとの御こしのらざりしきと。え出りひえ
孟 柏木の事と
するれ絡りそ。思へいとらうまげみく。
孟 女三之
あやまころら絡さ海の。御いとらざるし
源氏の御心と
くゞく思ひえるらおまよつけてハおや
みくよろきよまだされめつ」ひしきのぐる

てならひまでの事 既
あやふくよろこばしさにまかせ
細 源氏のありさまかくすべて花鳥
ありありきて 花鳥
まのうちにはまづかうと物
めづらしきやとひきくらべても見えと
えまししや大鏡三位 物語
うつ後の事也 事により理
事也
けぢかくうちうちのことならひそ
三 えもえぬ物にて
ことに物心といふことなるを
かきはさて難

しくゆかしがられば、ほうらくまでもきこえあるか
かくつけても。むねはつくしておもしくおぼゆ 孟 深く
まかれいのうすぎたなくよもすがら紛れ
うちのことはあらじまうしでおもく
つくやんごとなくもてなしてすこしもおもふなり 三 是は心をとめておもひ給ふなり
たまひぬるけはひなきさまにもてなしきこゆ
まゐりつゝうちすくれ心づからさらにいとさへ
らかにまゐりつゝ人めなどもやうやうしげくなりて
まゐりてゆかしのみこそまことのれいのけはひ 三 女三の宮のけはひ
くおもひは心にものせむとて
からしのぞきまらうどとこそあらめ 三 猶のまのあたり
さもおもひきこえさせ給ふる 細 女三宮の事也

いとしうらゆかしきことのなかにも上臈はたゞやうなくてありかし
いひくおもふこともなくてしとやかにやはらかに
あなかしこ。おもひなきさまにもてなしたる
ゆゝしげなるをさながらにてすゑまつりてや世中
かずくしろしめされて。女のこれはしもとて
よそびきこえたまへるにこそ。 細 此より女論也
くしたりとも心ばへよりはなを。うちしめりたる人は人の心
うちとけてこゝろうちまかせたる人々し。女えうちに
おもひけることはすくなくもありぬべし。人にもあるまじ
らうたげさはやうなくてありける。
くるしみやまぬもあやしくうちかたらひて
ほがらかなるのかたへくのやうにのどかなるもおもはしき
ものうちあるべくもあらず。ものゝあはれもうちゆかしく
すその。さまよう大かたやうにてかのひの事ども なれ

みくさんのそいぬみしも
おくぎりし
孟おゞかれ源氏のん
をうけしるしおされ
ども浅子實すえみ
しるる

ちまりみくら中ありみれい
細 勝月兼とも葵との笑
アーみくさ中あれども葵
のんしらけまかまえさく
とくしおりは後ゑみつくるの
らんとゑふまふ

そのほんしてるきもまうしい
三 女三の宮の君加 勝月被
のんよつまもりうぐし
きるうとかちひきり
そろりちて

どうどうくあらうわうて。られを見れ
くさみは地やめきしうど。みくさんのそ
ゐみしをあしざりし。とゝのゞうらにつ
きるくりてをしてもぐ。この地どのきろ
むぞんの女房よ。んわくをそてつりくさり
まんみもけぎやうまりてをまれうらさ細
と。んみもえしもされ。しこきるまゆうされ
して仲されてうら多给う
さうる種よもるして。ワゞんとつこあるに
いおきぞすたらみあるじ。いまもえばいつまう
どあうとわちりそりらきりみゝさわら
かりられば。あすぐくら句をそてかすんしとい。
しそりうしてるも地のぞしわくりま
うし。んりそのくれしくい。も。世ん。もやひ
ばもくしうみぐ。あきせひくうらるまし。
いろいろくのそすりてりきさわるも純が
しう河ご条のきいしのうんまん給をはな
残さるぞせひいで唱しまでじぶくしろ
めつさまむびのくしぐ。うきまのよ書しさ
まくぶのれ。んうまきさも。ぶううるくせひ
するれまひそり。うるよ。はみいのぷとし給
てたりとぶくますていいと衰まるらかし
いまあるんとぐまよ。はわりし給はざりきそう
らく残わさうしくもをききて給

あまのしわざ　細此尾は
なりけることをあらはさんに
ハ只我身をすてゝ
まのあたりにもあそひ
あはれなる事　孟同
又孟　を海への事もうるさき
あはれなれば此川に出家
せん事を思ふ　思経勝
月夜の心に源氏なき
ことしも非ずして秘に
こそあれもたのみをも
られけるは地としての
尾にあらはすをよそ
くまことひとつのあこのねら
とゝ云ふ　細　其花の浦
出づる時の付句に　云
節のまゝに源の海さ
げ給へるべし
若し　細　此心まことに
まはねさ此浦の舟を
とまり

源　あまの世をすてゝこそ海ぬれやすらん
よりかへしもられなくてゝ　此浦ひく
（一の句也）あやしき世のさだめなきをうちに
集てなり　いとゝ思ひつゝも
いまでといへりて　ぬらしなり　孟
源氏　よもそてつゆもさらにさされ也の
まうへ　句也　からにすぎし衣にあらんたのみなりぬれ
かくすてしきつたら　勝の心て　さをしこ
とあれどもこの浦のさけなうてふかくつ
ていまは去る方の浦をぬらしたまへ
とのかたわかれに　若しきかまくら浦
ぎらとすかるにわたくしもゆかしきこ
まかねらにし此くゆかし　此の浦にかし

いまはくしもの浦をあすからにてなのとなり
さ文の心ともかゝ
孟　云ふとうとめ心へしと
勝の心て　三尾字もなく
歌よめよとて思ひつゝ絶
のんすハあしまじきを
きかばいらにめしなり
つゝすこし世と云ふ　三世の事
ならさハ我身一つと思ひ
まよひ心もはへに浦の仮にも
ういらかと思ひ　一云
あまのみに　細　此心上方に
いんとも心まふこと我身
心ほにハかねるくとして
愚案此心の浦にいそぎ
世してと嘆称にそく
たなかにいかなる事ぞとこそ
そのかのときに見ゆる
らひて我に此心とぞられ
あひしにてことにかとめ
とりべし
云ふなれハ　細　其花一切
の心そ　愚案これ源の句に
あらはさん此廻向の心なり

めしかけをも衣して心からめてをなし給
もとめつらぬいとをかしつゝあまる世とハ身
ひとつ川にのそむ　細　文の月
ひとつの浦をなつけてしかなのけしきの
絡めせるまへなん、げに
勝　あまのよハいかくさひとかれ人あり
しの浦にいてらをしこそあつまるは、あまの
きこえてものかたりけるさあはれ　此
のこしてあゝきよきまつられいのこと
なれどもいつもかたらひてつくづくと　風流の心
そのまゝ思ひ　遠くらへて　晴勝月
みなもひめゆかしけるに二度もなほ　源氏の心
まよひけれ　晴　勝月夜の文を書上すもなはなし
今更みやもいゝ事はむしけなくそ

ふそとおう言〻ましん一切衆生にあまねくそよみて廻向たちらくも。源氏にハらくなくと
かくあかりうつふ〻ふかれあれなくし。是歌ハ三のくすざうらうらき恋の思ひより出る也
勝の勝若のことハいづくみそもうくここらららんあらんをつあそこるべし
さえあるし細今をとらめあられだく哭 出家しまうえ

ゑつりめつれ上也
細此句のうし 孟 かなえ乃
歌よつこうせしとあつい
我心をえうづしめくことを
思案ありくハ書きうこと
またもあすハとあつす
まや
ききくままもそ 孟 歌を
けをもうえしてあくさ
まんまハ勝と權しあれ
と世をすむえてまま
せうらう 一 [illegible]

やうかうあく言をすり給いてこそそ 孟 源の筆への細し
づしめられ。けまらづうろし。やさ歌ぐ 細 歌の心にまよひまさんとかまへて人のなよりのつけし
まらわそきさまの中けまる給とうくこすどし
つるやうかうまろべてのられつしそくしとど
ゑうく物をつひらしまかくまもそ。義を
をもうゆへとまもちくさずなくそるなしれど
つびるしつづき人へ。歎冷との系とうくそ 三 權歎冷と出家ハ勝同じ
いのうらあらつうとうくられそひこそさそく 細 權歎冷出家のすうらくそえそくう
さへ冷らさつえぢうつしめて。まさそれなくを
こうひまし給うこすり。歌うらの人のふ[illegible]

女こと思ふしきそんこまま
おもみとさくてんうすま
うすしく。女三の様うすのみ
中まおるにま源の三歌
ノくのまうし
よくこそあまさらつくま
お源の伺とよくこそあま
くのまるけ度としも
女三のうゆうて

とゆえうる中まか[illegible]
つうしさこしのうの人乃直あなぞく 他の人ハ權歎冷よ[illegible]
をあしくさりかうれ。女こと思ふしきそん 三千お点
まとまいとうさうへきわさぬそらもくさる
とりつんりのいやまたくぬりざそくまや ハ歎のちにもうくぬらし
のんよ出るをうつし出ひさらん給のそくろ 孟 出ひさくんかそハ至うそ
づうひとるそとちうつうべうあらまくそ 歎の力をいれてそうそもく
あるううくまん心をとらづく思すさ契り
するさまれ。いうくいてうざら細ご 細 源ありさ附し
ま。さうくしのまいやさ歌ぐまさま 孟 ありさ附書よりすくまざしとさひしとも
こうらへとなん。あげりしきおりうくあつ 細 女一条こ言上の言ひとなえまもし 哭
わりくやまをんしてまふしくそあかのまへ

みるよるもかりしうき
細 女流ハ法の曲なくしま
ざるくおりませむ
羽ひののとぐら叙るま
べしとし
ちつさらかん 既 出して
の法文建のうとのまよ
く師女とこのさし
ふとまてんつうかしく
三人よ廉與せしかく
うじくし
それよもさとけられぬ
かど只人て独えよ云
しゆくせらてとなき建
いさらくのまも自由な
らどとし

のハそくども我今とし
らぬとくめし 細 ありき
うきさ御も

まづらられぬ
盃 勝月喪の尼よなら
給しらじめられぞその
くさの女房しもちさち
別せじときくし 既
かく〳〵ぐらてハ
細 尼ちりに世をすてしき
さらぐうよハも出家れ
し盃らをそてつとし

てさ所 細 金銀纓
の所なるべし調度乃
まみえし 三 尼の冥ハ悉皆
ぬらの白く名御よて蒔絵

盃 女流の出家だにし
女流そよかくうろとかくちう給ひくな
らぐくいとまるさまじらひとしかへバ
あるよりとも仰しるさりくまぞ拙し給
かくんさてさらかんずとあくうぐらひく
まてんつうかじくて世銭のどうよ近く
し給らんようしろめ くうかまじきさらこ
むせつけまかしさまざおうける限あの
てとぞ御くざ御のうらそまうらうさ
ざ人ハなよのつうしそれかもしさすけられぬ
かどよなじさくしのまへぞとかくあさき御
のほうしろうさすずとしよまひなりく人
んかぎりハさまらぬやしあしいとまみ琥
いろすんとそてふすはまのせこころかそけれて
細 業の御中なり僕 勝るよりめさし
うくふよまりそてどことあひともとぐ云り
かくし給人ハくとせうしやおしくせひかしと
つぶくんの君よまき御くうのまへくんさらぞく
あぐ出まづさかちらるれぬかどいとふへらき銭
けきなどはいうよめふ拙ぞくれをさ世かふ
須へのそ
しうけんらのつしさ何しつくつてかさ
へびとらずりハ六条の宮んがしのきよまの
てらのめをけらまらうふしきますらのそのこ
ちかよ法服めまそて調しまてく
さらそへともそてとあるどかし給おどまひ
のひとくぶらうちうつせをさせ給つくま
ぢしつの人めしてよびてかまの所いかど

よしなく孟子は河原院
更あり霰を三段に
分て見るべし 法服衣
裳は[illegible]
前への詞ども[illegible]
きこえしめのくさまりて
尼の御房達ともの[illegible]
をえしめ給ひつらん
御産とも[illegible]
盂らん[illegible]
のゝ事まで[illegible]
かりや[illegible]
むかしいふ事の[illegible]
まかりすまるを

その月よ八 哭 十月よ廿二
日 朱雀院の御
[illegible]

さのさるべきさんまめのく滝つきて出きて
ねうれむしろ海風ふすぶものゝとまゐ
とあびらくわざとげありしくいそぐを給はる
うくてやまのこうじの御がくもののびて秋
三好て朱雀院と山のもうとせもり
とすりしけ八月ん末ねの下さ月まて
ツキ 御忌 細 葵上の忌月く 盂く 旁母葉
上の巻 薄雲と夕霧の御給よりて之 哭
ぐそのこしいえるうひさ海かんよ。おん
るるべし。九月は院の御わきさらぞのり
おが拜 細 朱雀院 御給の御忌月く
くれ給ずつさるれば十月ふし御わりまう
十七日 拜 御堂十月ふとし
ならぬ姫宮はくるまやまへばえのび始まり
細 薄紫義く
齢の御あつかりのまゐんぞの月は朱ゆ
三 給仁か院と
給れぬ御わりさ御とくねまちてがめしくこ

御うよ物のもよろくなきしをつくしおえ
つくりんくんのさまも。そのつねぞに。むむびたく

かんのゑもし 細 [illegible]
かど出乱るらりしきを
をつるでよ出まうく 孟徳
朱の朱雀へ急すそ 哭
いとおかしとのそ 女三の宮
前を源のおぼ[illegible]
らんかのころをいそれ
あるうそし

こそいまされめかくそ
孟 葉上の扇さまなど
よ海をされてし 三行
あどのうさく

うしてはつ給ろうる鉄るやかにしく生いる
細 女三宮 所標
らもそやすみひつるものをもどし給ふ表もう
薄氏の作おを西う女への露まうや
らんへて物をつやりしくいそおしよのそ
雅の格く
おがしるげくきるやめくんつさ姫君く
まうり給はさしよいとくうしげよおつしさ
細 滝 孟 格朱の事を夏奉る家之
世べ院いむらしと思ひそるく給りるそさわ
生いくらうしげよあえろるあさ海して
くるやこまうりの紙いつよおつきんとなるげ
しるて海くよ姫わしうすげくあいのり
細 朱雀院之 拝三宮と点
あやいこうしいすらされ姫わくても[illegible]給
れ山よもさらしめしてらくくて急

河海にくはしくみえて
細流より源の女三ノ宮を
しとて也を朱雀の御后
て儀姫のすゝめしかとも
此本意の事ありし
○ひのみこの如くなりける此
秘抄上の此の所からハそ
れより給て女三ノ宮へ
しらめでも朱雀の妻
うらぶく御分けく也こそてハ
されこの所からいふなる
まかせて儀姫の有まを
おもふくしきうて此
推量て

とこのみこし給ひつゝきにはかくいかゞくこそ（細流の書　朱雀院へ入の御ちよし）
給ふしも御むくなるさやうにりひとのそゝし（の流うこへのさきさしまあめし）
ぐれはいろ〳〵のよろしきにもつかれて世
中もはまさくらぬうつく御分して（無書之）
のさるれいかゞらひせるこゝろいつる線ゑのあはれ
ひはとおらへしめしてぶさの海をたもよう（紫明抄）
ぎりしがそのくちちやうかくかく地し給
らんかそのひとかへ給ふなることやむまちて（書之）
まさんばくしきり給くしとみする（書也）
うしぬ給ふしるとぐものくなりて（孟　河海にハ宮を分まとむ）
かわりたんぶらふるかどのゑやびとか
いそがつきかしひかしかをしけ
しいとひいのさらひも御もうりてまへ（書之）

○みへいぶかいはやめ趣なれは
○ゑかへくとおりかへしひ
秘抄にハりのみやびとハ
西ひさとうらのみやよれ
のかりしいひうおゆうの
まるもかりかやら寂しは
まうちがのゑびとつす
も見へて人はえ給と八
しうらんとかやの旨の事を
やりてそれつきし
こまやかなる御分かまそ
しせられと御世の事のか
を御花主る朱雀あれども
其の后をハ御分しもそ後に
おくに御つきまゐす御まへし
秘源の女三の宮にまかりて朱
雀の父をえあく
かひやくるしいいかで
朱雀の御分めやら書
の所かやくおひくおかま
（ことかも）
かへりてわかよかのゆもを
（いたちにとそれから）
此所よりへ折本の細注之
女三宮の御くへなしかそ
らしけり御めうき御事を
かもなきね人佐るのよし

しとひいろのさらひも御ゆりしるへ
しいらも御こやうかりしく見へし柱し（花鳥余情にあさし）
せられどかれてのならいなるれはくて（孟　又后　朱雀の后之）
えよれかくこゝ海やりしてまはるとゆくく（書之ハ朱雀院よりし）
おかしわさと御かほよてこゝ給ひおつかなくてのとこ（是も院の詞又の御え）
二　朱雀の院よりひの御あつかぬ事
し月のすぶるなん哀かりけるにや給
ゆうさ海いかそらしくこしのちわんせ
のつあてみなもとひやしるくいつてこ（一二條の森）
びしく御かとそもかうつとあり（孟のち三條をかるり）
ひもしへかうしめしげかりしき
るとひみかひかくしてもかへかくよ細のい
りもていたれとくれさくわゝきまへなきと

らうくのあさましきを
お気色は朱雀の志
ちうめきて源のおろそ
かなうと思さん所と
ぐるしく思ひつゞけ給

おもなきと思ひ立ゆく
るなりとよ　女三宮は
ふる心のうらめしさず
あり〳〵も源の志すぎ
こはりのうつて人の見
よかるれどのそそう
いさ給ひさして又思ひ
つま　やう朱雀に八秘
ぞこなど安立ての御せ
うそこしと見ゆるよ
我柏木のうすさなど白
わたくしのおかう

かゝる給も　細又つゞき
のうちもわろつ[illegible]
[illegible]のちも[illegible]
あれとおもひ
細[illegible]の御心よそむく
とい女三の御心よ源のそ
[illegible]一[illegible]細朱雀へト
これあ[illegible]女三へ[illegible]
[illegible]
[illegible]
源[illegible]人の
当[illegible]の[illegible]柏木を
[illegible]のうへ[illegible]
柏木[illegible]

しへ哀しまつりいとくちをしく[illegible]
くうらうらくのあさましうとやさらし
めきこへきみはわして[illegible]
かひなくのさまくおもひてらへしとひつら
[illegible]つゞけてこの[illegible]
縁[illegible]れはせうそこよ[illegible]
[illegible]おもはずよ思ひ[illegible]
[illegible]よ人の[illegible]
[illegible]思ひわれ[illegible]
らんよのまふよそらくひてそむき[illegible]
[illegible]もいとらうけあり[illegible]
やをしりの思ひくしきる[illegible]
[illegible]

きこえていとくろめさうりふく給
[illegible]思ひあらせなれは[illegible]
[illegible]
そうしと思へどう人のれうよそむくきこ
しめ[illegible]やさしんにつふを[illegible]
[illegible]
いうりもうくすくて人のうらくあすすさ
よ[illegible]
あ[illegible]めてあわりしいま[illegible]
ど[illegible]
[illegible]のこみなし給し人へもなるてよ

あのく女三の宮ハ八才
源のそうしのとうろそう
ありと思召さんとなし
校のおりしゆうさん行ハ
三乙ハ朱雀の御おもての
つなの程よ上へまへとゝ
朱雀院の御わしいふらひて
源よ預けまゐる女三し
これはいまりわるべしと禁
しめせしとし
の思ひとそてさもやあ
いまへんことするさ八
あ朱雀院のさゝめとある
こゝられんたしはうる
うとさかあんひをひそ
ゝ源の御と
思しくさびくへむて
御福系よかひ地ころずと
もせあて源とあぐる人
みをかおせとし
いくさめうめ給そ　あまり
おもてりまふるく　斎通
のるれ根とのみみて

くちをしくもうれしくも思ひかへ源の（朱雀院のこと）
おどろしかさん程ハる御心ろ思ひあてなん（女三の宮の事）
思ひしまさてしらやうありたん。さぎすなき（よ細ありける事）（源の心うらう）
ひしとも思ひくさびしへさまてそてさ（のすみて）（細 我ハ道心のふかくありし）
くおうらめ給そいふ思へまりなりいくさ（細 勝 朗 和 校）
こうらもだからつゝひとりつくこ女うしろのさ
浮みもとれさるとしまされたびどられつゝいとめりくきてしとお
澗りく絶えすつくしてのさんよんおすよさらりたび（源氏ハ大ふよまよひまをと）
まよめべさよいおとゝいまつしとそて給（細 女三と思ふらず）（孟 朱の院お宮成のこと 異）
なんよのふしたろゝよゆかりとそさまへぶ
沖らうへのあられよされりらしとひとさで
さおうしるひさくゆんやうしとれはんの海

のさつさわくそひとそてゆりやうまて　お朱雀よ追つくまてし出家せんハ女三の御ふあ

めみとそとく
うころうしと思ひし人て
と　三　後世をうけとむる
おどのかしもすとく
併女三取よ世をもをまる
姫君とは源の御まふ

ころしれよてまのとゝあ
くハ　一　源氏の御生の
程さう別条なくハ
こなり
わたもにいおうよすそ人も
お家上の心上花散里な
ども皆世を捨ても知
らぬようひそく

よさもとてすかしんしのおへなるしはかわさうれ（女三をし）（生れ源の御家近行を）
んよつさてともんみろこりとしはしんし
人てさゝいまはらけしぶせらふてわざつゝら
けうもほくもど女にもくてゆくもさん（孟御事）（三 源の身後の細之）
そうかうれどらゝこらうまぞをひ給めれば
とかしらのまるよのごしけくんてさきをこう（孟りこくありて人生の年ごろ）
べしそのかかうれもくめくんよそえるさひ
もろともよ身をすてんもおしうらまし（源御を）（おもお）
しらひどことよかりおさらとやりく深
くさひ給心の御うれおかり久そうともおのを（やまうるる事）（孟 朱の事）
じいとあれそくいとど深まさりまそて御ん

しころよ世をそむきつひてかくれ給ふ御名
くりえらして　三 女三の
ようくおもひとの御ありさまおほく
ここらみすみとおもひて来
薩の法にをよみやすし
およふるとし
のられ世の法にうち給へるさ
け 女三の方よ心ならずして
後世の婿をうんも女三
の不孝のつまともうたきを

これもらしらるさをりて
源の懐胎からうをそ
さらそこ懇る心のとんを
のこし
人のこへもてりと　細 若は
人の和もひろうしく召ひ
ししとし 若は源の心乃
さうしらどとうやしよを文
なうしれのまりそく
身よりつうるすふまして
二の詞うちはかはしのさうしあるく
女三の宮のうしとりのうしし 若は
源の心ひしうしつ身の
よまうらるるとと

霜月とは　細 自らとは源乃
父桐壺帝の御忌月也又
朱雀院の為には朱雀院の御為
父帝の御忌月也 哢抄

かそげよのと思ひしうちに今日は世も尽きぬ
どなられたるりまして御心もとなう給ふ
この世にいとやましうしかりけるも心もとなうずの
ちのうれはこちの御悩みげれなうんもて
こいとしみたるうんなみじきにはよそのこ
とはもし給へるとどうくしてそのつけ
給ふ源のとからへされこれからもおもほしのひと
こそおつとれたれもらうちうるさまでへの
人そてとりどうしくてそひよふらんの
さる事てもいくによりくそろうて今
まその心ころうやしにもしくうらされは
そからんとして給ひて法服のきうとのし

ほづくしをしすりうくとりけるひ
なりしきまへども女三もわろくとうそしえん
さ給ふめるあらぬり給しぬるくいひとり
くしをつきまずもはも給ふしんり
世おしやうよいとうかくりれはかろの乃
まも女ぬへかれどとともなどをしく
りとより給ふ給ふそらへしとかられつき
りてすぎぬ二のよめ乃れのさ御ひとく
まえり給ひそよりめしこさ出身ざ御
そしちるしひかすらるんもつうりの
みうらうみけの霜月とえぞうしの御忌
月なりまして御とりもうさいとりのさはが

の字西吸よこそわり

出替とハ　孟　源の今
とびれて行すみも貸一
まめ世どもとし　お名や
りの附かどん柏木八身
一ま□ち□かり人とし

こんなつけくも　細　女三
家の流っとこのんまで
しや柏木のえんとし
やぶく月比まつり給ひ
とも　彼文の拾より
やぶく柏木の源氏へま
つり給ひなとく
流ちまてさ出をびまで
細　営も□ひとまつ気よ
法おそびもうけ生ハ
法用ゐでもあさね
とんてい出るて
あるやあっしるるぞ
おタ書を状やぶひを
不審まもつて猫の門
より手付し

しまきめとじこの流すがこともこぐらうしく
まらうき給んとしとひ行れどとらりとそ
さのまのぶへきつしとしやいむつうしくりのお
がしらぶれどもあきらるまてそしきまてご
のいつい中もやをまへるづくろひまへなどいと
らくくししとすぎまくこまり給ひ出つ跡とい
なまざ被のとしみもゆん出べきおりかつ
みはなるしんしとさしるよきんかつゝ給
つの給ちをあはをしどもそてさわ流
きくしさこゝりすの人かやしともらん
とゆかもじきんなうけてもいとどられ
ぶ地色しさくしどもかくしくやん
おさき我んをしてずなすしとやとおかりし人へ

されつやうくつきさであ給かぬを
もとくめなすし出かりさの人いずれ例あろ
ぞろやくまろうて流まくとこれあそび
あそかるさとしあれいそのくさひさぶ
あねのえぞそよんやいかくしとるべしと
さりのとくさぎめく□へ気色こそ
みはるのずねしやありけんとひれど
いとうくさぐりまありなるさき限あるんそは
とひより給つざりなり十二月よぬよきう
千よ国ともくめてゆ□とあいしとの
うらゆもそりてのくなるに六条院のうへ

時
ひめよく　細 白き花
めて菫すみ一叢の花え
治まゐりて菫より
八月よりさかゆる
能知がたりえ不及ふ處

その書ハ此生人の物いふさ
きつと　花ちるとハ涸
そゝまん　絡みゆるく
源氏のかゝんへのりん物そ

牡丹花云
うちかへし
ものおもふひとゝ
こゝろしへ

とりくるて　細
みさき別したる
かのまかへ

此歌はよりかゆのことく
まくらの波つゞりゆくところのえんぐよ
よりてぞ、え河めくりて　まくらのそで
みづ　女の花も星よおかりしもと、けさび
のみてハ又ゆるくよくるん　おかりしけ
みすぎくいとおかしけりて　おかしき物書
りくかそびとより絡まるんもぐらかく
ひのよしくられらく　ゆかされもかよく
おん氏の心のたとをこゝろまかく　夕霧之
えつしとくのかたりそて　めかりくよ
てうゞくのやうよ明暮あそびなくし
絡まれハかのはしそて　おまんのかれそ
うしてあかしきりのおりしう

かせざりん　いとかへりくもりしう
つさうるをひとおやしとうさぬ
かりくきうれハ来りまつきうおかりと
そこそくしろりけるひやまてうハ
ちざかまうせ、そふんのあいりかとくらし
くめけてとりよくそてハせうるとめり
かもうか
かさちうゆくもおとう　かくゆかよし
おひかくなるやうよ
んとゆゆらくとうきやまひかりもかるぞ
まけてあうまくとそくのりしそよりくう
をみてのまつれハかぐりくとかりもくある。

御もわからすま　細　冬生
ことをかゝる事なとおほき
人これ一の心あり　くつ
かし

ちとひみちらされはさつるま
御　思ひあまりんでもうて
ぬ人柏木さ女三の宮かれ
源のうつまおかし出そと
ありひやりかへるさ　細　本意の
ぬるうちく御推量
のとも[illegible]さきるす
よしつとゆりまれねと

上達部なともおほくけしひ給ひぬやゝ（お柏木ことかうしと）
ゆく御のけしきさうまのくちよいれまそ（晩 源氏と柏木とつゐま御中よかりしこと）
りやのとりすゑかてかりしますけよいと（お源ハ薫の声をそましらひあへと）（お柏の心をと）
いつくやすくはあなたて御もわらう
よろしやぶつろうさ八講とくよの心ぶら（お 柏木の事をいかにと）
よつりてたまれたくいとらうい[illegible]（お生かに[illegible]）
づめらうさ夜そつしたちと思いつとて見つて
まつしひまふさ御かとくへみさてるの泣う（月さしを心へうら也）
さつりまさつすくへうへまぶらうまほど
ろましきさてこよのさ夜乃ちつれなく
いとしひやりるさこそいとしつとゆりしか
さりれうしれめとまれたさりけるくい

かうしつくまつりまして
蒙[?]源氏薫御出家
の報うらむね師御覧
よハ寿命経すこしよむ
ゆへ源氏とをる
かうね　細　院の御心ありう
て思ふまゝにおほよろう
おいつも井八精進之景
へ長谷[?]給ふのし

しわつしくその心うろくて射[illegible]（お 薫上女三の宮之）
いとえしく都[?]まつ月はいさくそのひやう
ぎよのとあつひうろのいとすまる時は
よ院の御心のうちあうるまゝ抱し給ふの（細 御心の[illegible]）
かうしつるすまつるゝくおもしとつき（五月之）
つさとらさらことさけくさとうしも
きあられへえらひのうとりしあへでき（お　御て源の[illegible]）
のぞくうんいりゐの御もちぬあへさを（鉢）
は御覧るとらへばこゝしこるうされ（細 源の御[illegible]）
どうへよ思ひへ出かりくろへのうもかく
ありまけつとかしんとさせしつてずひ
るとすらうとをめしそのつとそてくる

まことされよりてとおもひあがり
らしうみてすん
柏木さまで雅きらひ猫
子さまど洞へきせんと云
崇し儒れとし
月比よりらひ猫しまえ
ぬらしとも久しく
恋の根ともなりく
柏木など居らるとし
雅よ洞へさせん人もな
くれのこと
いとをかしげうされ
お源の知るにるずつう
うしろうのすみとき
更いひしたうて下を
月比なりくては　細柏木が恋
すくさ法上女三宮の法な
やとかり
云ぶりとくひやう　細
とこそ只病の数なり佃
かとわらとひる所病
かくれ給ふべし　此所名にて
一名脚病と俗云ふ所なり
大和物語の病の名あらく
ひやうしとあり黒き

見こさんとて猫よとのへんにしかうこされ
まうしとおひ先ぐらしうねてるんづきこ
わらひ猫し給ふね根りまさてくぞり
との給は気色のうしろまやらしみうよの
（お猫の雅候よ思ふまし）
くらいとぐもりうしきまよりわのいろぬが
かんとおかえてはいろへをとみまえ
きうしもど月比なりくは見てあやむ所し
けしあつりるけさ侍りるうしき三宮の御
かひより倒をもずつらひ侍るうくびやう
とらむ独床とくとろうりらひ侍そうかく
たくみとうろしとも侍しまと月比ならぬ
あづさ侍りてるん内あどうかもふきしと世

ことりとけ車をおりかすす
孝経七十ニシテ老ナ致仕ス懸テ其車ヲ
徴之車ヲ置ク諸廟ニ　細
つくあるべし　致仕大臣
舅也せんあすしとのお玩
あんなるアバ只よりあるべし
とこそかんなるべし
ならうすらうとも
墨東の家しハ下屋まやら
じと致仕の部との方の
らずさ所まうされども柏
木みとも侍されしよるそ
今いのもらつもとうるり
細云は大きりして御ませ
大殿とを着鳴ずう
まことく鋭へしとと
いかいし死すでのひをまう

本給へしよ気がうしが侍ことより侍る給の流よ
たひより給とかたわらへまうさんとのよりぞ
（お給婦の法かくのまことかれどく）
へをりつうきまうへきらりしらの御とくぐ
おすひとぎびやされしをくうろとり
（致仕のうちおこ位）
け東をおしかもも給てし身ますてもとえ
つきまうんまずて所まなしけよでたら
（西柏木早下の肩と）
（お点）
うすりとも御あのじしらうさ所なりとるん
もん所しんをしれうしもりうすかしさう
（お致仕のすめ量しとと）
おことの侍しらひとわきやきひとあへき
（柏木しお気は本中の女三宮の御心のうちの）
もとけてあん気ちてそへしいまはいまよく
（お米蓋の法山性のていとよく　気をつける）
（米蓋つく）
いとらむとうるさ御よ出かしすまましいう
めしされいとをひをまうらけ者る給さへん

○い　師源氏の御師よりさき
のしらうて御あそびなど
もあそびしくしさやうなる
よしのうちの人々もあつかる
るまそ未の御事ときまへ
さとりわてしやうふし
いろめしくまうしし御あそび
細女二また内の御あそびし給ひし
と二家往古屋の名残すまよ
あそびして女三人の御あそび
のあとをさしくとびうるあ
しくいひろを源の名らう
ありしたかそとひきふ
　○暁日
さうらうえんし　そらふうる
ま國よ　暁源氏の初早より
諸盃日晨来朱雀院の
内裏をさやうに首暑よ
まふを世の人いあさくを
みるへをさを揃来いさいい
てどいふかぞくかうしとそ
ぎうりくゆるらくべきにし朱
雀の院おかきをとよくん
御そゆるりしに源氏を
れりわしいひかしまひる
つらく揃ゆしと同ふうう
とし先ハ雄徒のの書
をわぶもし早下しらく
首暑をうやらまあへ
多る翔し
物の師　師　道のそのそ
祇園ぞうりをそしへと
俗びうとしハなり南ぞ
よとおの御の絵人ろふ
只五飯うずどのやうふし
てぶつるひのうきあとし

しとねゆりくらも兼もそまじくこそあり侍
どこまをとべそぐをあてあつかうるの御撫のの
かうきはねつひつるをを給ひんるすへきこそ
てらづるへとしやまへ（源のこと）いつくめしくらうてし
御あそびのこと細女二の女乃れうさ御まいふる
さぬもらうあうしと始（孟 源の早木の初し）ほもとしつううなんこ
とぞきうきる海よ世人ハあきくらうへいさる。
きはいえどらえく揃をしろてまひされ（盃のこと揃本も）けらしく
（源し同じことの）みんいとしは始ひるしれ侍なお（お 朝源をまたのうち衣笠）ハ御かやけ
（ハやうく　難しうちとし）ださハやうりくをとなぶれとう（葉のうしとし）やらうはやすきさ
けひらうさハわしからまやぬまやおうん。
（細未雀院と）のれわすもしくし（お　衣裳よ過ぐまうりと）ひ給りぬしをし（ハ衣き）く
あすさうらかもかくの（未雀院ゆきと揃と）のくしハ内らとしうと
ぞあそびにいうしらくあうかくのへあくるとさ
（未の内御家のうら嵩来をと）こそ始めりしもそてきるやうなれとあつ（孝の今の同居よいかなる内裏を）るまさ
しめしすまさえへくしかしまいしらかんふつれひ
（多分と揃本ともみゆとし）さらくへき、揃あ揃とをりるたまとられてこま
ひのましくそくへのあらいふそくくうるくへく
まへ物の師あまいふ物やてしりがそとさ
とらしそおれいてゐおしこさ始ありるどいてと
あらうしくのうすもひつうくとい（お 揃本のこと源の階より）きられしきいむう
げき日を
らうらあくてまうてことよすくあするそ。び
（源の内おを揃本のとく宣給とと）まんべるとくしうらんとさへい倒のやうるよこ庵（孟揃し）
やうふもあしそやうりくきさうりあかねひんどの（家武里の方と）

けふこのみちハいとふるき
人なそ　孟称し節要
まよ深成の法流なる又班
まうしと思ひわづらひし
路とありげまをぐれた
まうとし西武ねし
めうきとしつつそを
夜の書ねふの去ををも
我為年七年　湯成孩
七十吏
白椽袍蕭陶深下事

仙遊霞　は大食講曲
舞お頭とておもせ給
洞のんを仙集かり
差のとかわちかく
古氣るかりし差のとき
ときのをみれど中ぞき
よりも花ハちりかるも
へ雪をしめる方くくさ
さうらうらしゑて
差のまうのとしそうは
方をこうを物さ浪ぞ

世ともそしあねのつくちひいてし給うし人をま
ひんのさうぞくのいしなとみくしとこうひ（西福本のらうく里え）
らうく給あかへき服いとしくつらしまうき給（お夕霧の防ぐ細殿ハ袖の）
よいさじらそしさん志らしひちふもげなば
ならいしかきさんへきそ抱志給めかふえらく（宮上の大）
みんとの日よすれバけうさくものと給ふんさり（昔日より　お南日の）
こそなくいあくそしとその也業の國え
おうきとしつつらとよえひ深のきてこうけ（篆書を今為て以て）
ねとよふるくしなふいおきらうよすりやくり（鉄子の旧し　お青色麹塵之師）
されなく人三十人なふそそしつりそゐとをてる
ひとうとのきれつうるのよ。つくさすらう
とうしあよしるく山の南のそでよりり流家
よいづり須く仙遊霞といふりのわそびくく
ゆきのてでいさくらふよ差のとあちりちり
く梅の久しさうらひあかてりくゑさき
てしひさしの言も乃しらなおりきそは（細やの文武し）
越てての女方の世をそらそらひひて（孟ひげ袋）
それらあとの上達りハすのこよわざきと
すしぬ日のしして。それあらうなどけらう（お食庭之）
こ月どよつうもうしらなの大殿（お雲井殿　孟夕霧之）
の四局の言大将殿の言節言無戸言の（孫子ハ帝王の出孫之孟五世まで八孫之に）
そんけうの言ぞらちてらハまんざいらく
まざいとらひさき待まそいとらうしげせ。
四人ながらいづれもうつくし家のこともて。

今は源中納言の御子はわう
ぞう 皇麞 陵王 落
蹲 太平楽 喜春楽など
舞楽の名なり

うつくしげなりかしづきいでたるやん
ごとなし。又大将の内侍のはらの
二郎君ぞ。式部卿の宮の兵衛督の（夕霧の子也）（紫上の父宮也）
といひし、今は源中納言の御子、皇麞。右
の大殿の三郎君、陵王。大将殿の太郎（鬚黒の子也）（夕霧の嫡子也 母雲井雁）
君落蹲。さては太平楽、喜春楽な
どいふまひどもを、おなじ御なからひの
きみたち、おとなたちなどまひける。くれゆけ
ばみすをあげさせて、もののけうまさるに（真）
よいとうつくしき御むまごのきみたちの（源の孫王の舞を感じ給ひて）（暁）
さまかたちもまひのさまもよにみえぬ
てをつくして、御師どもおのおの手の

かどかどしさそへて
つく 御孫たちのうち夕霧
柏木などの孫などもありし
細 皇麞
れむまごを
を舞人し 御師 むまごの
舞を感じ給ひて
細
宰相のくにのくるしめぞかし
ゑらうて 細 も
ての縁とて 三りえむ
らもなき人をさして
のふし事よ国もとを
ぬ人をしもとあり
さう夜はゆるぬ年月よ
孟古 さう夜よ年を
ゆるんもふもなどを
るよりひやまたるし

かぎりをしへきこえけるに、ふかきかどかど
しさをそへて、めづらかにまひ給ふを
みな人いとうつくしとみ給ふ。おいのつる上（先）（紫上の父宮也）
式部卿の宮は、むまごのまひのおもしろさに
のこゑやもれむまごをみはやしてなみだのい
ろづくまでおぼされ給ふ。おほいどのゝ御心を（孟源氏）
ぐさめたまはむとてはじめ（源の御兒達とて感涙也）
ごきざかりなれど、このさしくめそ
何をまうしてもひとしやうさりとてもい（さかりは過るものなり）（孟柏木をやがてあらんとし）
まだしかるさう夜よゆるぬとし月（柏の君也）
よ。おいのえのかれぬことなりとぞそふら
ふやうを給ひ、人よりけまさめにおかし何

人はりけなまめかしくて 匂宮の柏木をとぶらはんと見えて柏木のところ
ありてやがて病のうち

いとゞしくおもひいられて
お柏木の心に恐怖あり
さはかくのさまへはいとゞ
もの思ひまし

りそくがくしへの事
お柏木の事をおもひ
何事も人よもぎにこれあり
ふるいの人なり

しばしとはかくもいひつるやうなれば
いまはさらにとゞめもとまらぬこゝちまさり
人をしとゞめかねてそゞろにひしつゝく 匂宮の気色
の緒もたえぬべくおぼゆれど。いとゞむねつぶ 柏の心
れぬる月のめぐりくるもしらでつくお
ぼゆれば気色ばみてもまさるらんとて 細 匂宮もものゝ給ひて
いかんしと思めそかすをあかしつゝび 匂宮のれいの心を 柏木は匂宮をしりぞけて
たゞなるさまへもてなしてわすれもやらず 柏の気色
さ病などの人みてもをかしくうちそゝぎこそ 柏の心
まことにかくさくればきこしめして
まづぞ給ひけるよろこびいとまなく

つましき心をおもひけるは
お源のおもひて脳しそ
ありけんよりさらず
と柏木の親ともいひあり
まゐる

もとこそいてあかず
あしくて 細 一条宮は落葉宮の御事
しまもとどしびせさ
まかく匂宮まゐり
柏木と致仕の大臣へまゐ
しまかく 細 此頃まで
あひみずのこと
ものをとひける。今は故梅
之助ゆきもくわしと

劔のいとかなしくさきおもひあはあく 柏木の心
むかしいかなればいかなるらん。つましと柏
をたつよけのうかりあかもや。ひとさる
むしんしあくとまさかははさしい気色など。
はなひとくもきけうれとぶらひ 上気の
たしろ。たぶしの事ひろまひあひもあら 双紙作
ざりなりもんいといとしまぐしひあふ。
わびしくの事ありさてそくぞ 致仕大臣
そいてあかつかましもて。君よわれて 致仕の大臣柏木のこと
ありけるを。女宮のあかしこの病みいて 細 落葉宮
うろくかしこしまうてさくをも月日は 柏木の心
うろのどうよ。あひみずざれそして。いと

とそてまうんとこの
ことゝしく
いかゞとこうれなうさ
つとてうやと
古りうきの中さりひらとど
ぞおひし今てかぎり
のうちそ出たり

うらはあつくひハ 柳 釈迦
より生めの中にうつの
病を嫌ぶあまのやまく
らうすれあうねてそよの
ものありひなすれとく柏
木の釈のりこへ(末の婚
かどとびめりの心指)指
らつうる柏しうふかで
平愈しまふまでも釈
のれうして別当居の
ひんくにかうそてんも
とうすくんつくしあらん
もし

かくぬはなくごしつれど、いまひとつ別さ
てゆくべきかぎりぞしやとおもふは哀なる
しくそれとて必げしるげんしのゝど
けるさとかいひしとおもふ、母は息所も、いと
いとし欲るひくるのこゝろしておや
どうくとさらりのよとさをかりてこそれ
すゝひハとうあかりをみるおかりもぞ
されどぬこそ例のこゝろるれうくひ
きまれとふてるよ柏と婚までをも
とぞて婚つんがいでくしおりつさことも
よ、あぞこうとそてくてなきまへとれ
るさつるよはりは俵からぎんどそ

まうし人にひとしくわかるか
けらめとりや 人倫に
女性もきて出て尋常
こんともとうれとも

わうきんぐすとぞすま
女性をうて出たりハまてを
さ浅うくねんの事なと
ゑんと果作して死ゑん
まやまく

とふゆさやうすさき
孟 柏のわざ身ハすべく
うてきよきと女文を孟
て後仕へハいうさとくし
巫国寄 易象生とあり
ずうきんらぬも 於輪廻

まで婚こじつりやうどおしぬ身ゆして、とよ
びかさこれよすつこひよ、おり母さるよゆふさ
れをりてさあつし娘もうすまいかずぐせ
よ柿くうひなきさ身の婚をとすらし人を
ひとしくかなりけじめをまやはれんぞ
らうすとしを思ふ婚られ、いといでしく
くさんまりとぞれどふうきんぐすとぞ
よはれんじらそられどやわらか柿りな
んとおもふ婚なりよあん、とゆりぞうきん
らかも見ゆるこやるおじしくおひのつゝる
歌をだにきこえはおちまでしこゝるよまえ
まうり婚なるをバ又母ぞ前うしろめたく

せかれてもとゞこほらぬものゆゑ
ゆきやらずしてとゞめ
しや　西同

みかしてもとめありけり　桜　あまた
岩のところところ花まで
よろこしはしをむれど
うつるみえとも

思して、なげかしげ四君の句といふぞか母よりしきえんとは似合ふかろそくにえんとげにひ給ま
じきもれはらもとより例ありし
んぼうさま紀あまさのかくよまげ　孟一の為
とりわきて、康しくもとよりよしくもとこ
そ思てしあたりいとゆかしうるさしく。廿二之あまおりてとうろ為りぬと恨まるく
うつくしき給ふも。又いとこころなる　孟楠木の名
人ろうふ紀おりりきうけかめやとも　細楠木嫡子之
わきてそひまるとひまると、いまよかう紀
をみしらくまさくおもひしとえくぬるぞく
なしきりのみしまべからぬるく恨り
ゆかかりあかりしもえてまいらせんつを
みうらよきらべし。細房案　今いとよのくまうくき

うを給ついとものひてまうりあてはらん
をよろしくんなかで對面給ひてんやかし
いふ有くそろうらやすよまそて、なるよし　孟貞史記
上ぞくおろうよかがきうくしわりつくん　廿二之の徐
まそろやしく仕れかいのちのあまを
むつもそもりまつろすかくのそみればけ
あつしくすくるてりあのぬやへと　孟設仕は梅の之
まりあそていふことくかりしこざれり
太后よりまらさけあしさてまつらさ　故仕之
つぎ給ふまらはしまらるかたちくちきさ　学子
悲うちのさ敷みもあらじとつきごろも
のみたともきしよ兼つくさりなるよいまふる

ひとくしきみやきらの
細面もらも深きらも
く金比よふらひ語
るまつけそいよくおけ
くあらくあくせひさ
まつさし

拂子之
わかさくらしなどをこれこ海のご
盂有識之
しうやりくりのよひさいうすやうよう
語さうこの〳〵くのうく趣しゑて
埜中之
よの中おしてあくうしそらて消えひ
朱雀院之
よ多り語りぬ人多しうらうらも院らう
もれとらへてひきしく紫めしつくらしく
おしえめがしめしさうかもりそでし紀お
三 下のあかしき人と云ひふ深の心ぬ之
やうらのはころもろことまどふ六条院よ
とい〳〵しねおしきわきこおわりし夜がし止ど
梅本御と含めける
ろきそはとふらひよひくわへろよ
大まひかりてく
つ出しがからも紫めし語大将て出ましていとく
しきは中るれだくらく趣し語ろ。

は賀の元日 朱雀の伝
賀十二月廿日冬、伏は賀
試樂の時と宰細よ去て
南日と男君も西白さ
れハ南日の殺来れ冬も
試樂の所よ去にせり

女楽の 細 女三宮なくこと
のわりの大学までわり
うち子うく深殿のき
し師 女三宮のはこうろ
を源氏いとかしく思ひ
おはありけり
尽する 細 年の殺之卒
ケ年之 花 天慶二年十
二月貞信公六十賀二大政

いろじくるげきあり さ語は賀八九の日
よおりよくらうとこそのやむごとな
きよ達アのをりくまづくひ語よおや
りくらうおやきのへでとらう思ひことれ
なりくひの語きあかれまうるにわひそ
細 月こと
りのすさおとろくれどつきくよ
どこうわりつくしくすなよあうとさて思
は賀に
まじくてしまれどいさそひへおありとど
孟 女之
ましん女三宮のはらのしらとさていとおかく
ごまでド
思ひさえしさを語倒のめ寺のたびど
朱雀のおかつりますたおまそ
花細とおとせる
語え人のおかつりいまそれるふとせんべ家
文庫とすうりうこと見の法誦語知りそとのうまそ
さるの

大臣於六十寺修諷誦永延二年三月廿四日法興院大入道六十賀公家今月修
諷誦於六十寺 今案御賀の時六十寺の諷誦して年齢の数を用る事なり今
也六十の御賀あれども六十寺あるて諸寺を經ありし
おほきさと注てし 細 仁和寺なり 或仁和寺の円堂本尊ハ金剛界大日なりと見
六十寺の諷誦經別而ハ又仁和寺の円堂にて摩訶毘盧遮那の御誦經あ
りとし 師 摩訶毘盧遮那佛とハまうすなり大日をいふ 大日經の題号をもて大
毘盧遮那神変加持經といへ 細 洪緒諸古寺に多くの経あり 経藏に見え
えらり不識之 或云後漢書逸民傳韓康傳 公是韓伯休那 といへる那の
字同じくなくて 絵ハ物語にて発端しまるとさるゆへまよく見べき遠き
ありけれバ 経てようくつきとそのむかしより伝りたるなしにおもしろき
まかしく物かたり 此事よりふ風を定まり秋萩のかたも伝りたる人のかた